1832（仝 仝 3）⑧ 鼠小僧を獄す ⑨ 頼山陽歿（年53）
1834（仝 仝 5）③ 水野忠邦老中となる

1837年 大塩平八郎の乱（仁孝、天保8年2月）
（天保の変）

前年から諸国大に餓え、此年貧民多く餓死し、奥羽、越の地方殊に甚しかった。幕府は救貧所を建て、諸国の貯蔵の米粟を以て貧民を救った。此時大阪の幕吏等は民飢えても賑さなかったので、元の與力大塩平八郎中斎は之を見るに忍びず、私財を抛って貧民を救った。

遂に此年町奉行跡部良弼に上書し、官穀を出し、窮民を救わん事を請うて用いられず、大いに怒り同志と共に兵をあげたが、間もなく城兵に破られ、遂に翌月匿れ家に火を放って自殺した。之を天保の乱と云う。

▲ 焼塩に 末はかつたる 身の因果……1837
疎い役人 容赦はせずと 塩が一人で 身をこがす……1837

（附記）
天保の改革 大塩の乱と同年、家斉の子家慶（イエヨシ）将軍となり、それより前老中となった、水野越前守忠邦は大に政治を改め、勤倹を奬め武を尚び、奢侈を禁じ、風俗を改めんと頗る厳粛さを加えたが、その改革厳峻、冷酷にすぎたので遂に上下の怨を受け、のち弘化二年（1845）職を退くに至った。

（年記）
仝年 ⑧ 家慶将軍任、米船薩摩に来る
1838（仁孝、天保9）閏4 無益の費を禁ず（天保改革の始）
1839（仝 仝 10）⑲ 渡辺登（崋山）ら高野長英を罪す

1842（仝 仝 13）⑥ 高島秋帆に砲術教授を許す
⑦ 外船打払令を緩む
1845（仝 弘化2）㉒ 老中水野忠邦を免ず
1846（仝 仝 3）① 仁孝崩 ㉔ 孝明践祚 ㉕ 佛船琉球に来る
㉘ 海防厳飭の勅降る
1848（孝明、嘉永1）⑪ 瀧沢馬琴歿（年82）○ 佐久間象山洋式野戦砲を作る
1849（仝 仝 2）閏4 英船浦賀に来る ○ 蘭人始めて牛痘を傳う

1852年 明治天皇御誕生（孝明、嘉永5年9月）
（明治節……新暦十一月三日）

▲ 世の光 日本にたけき 君出でましぬ……1853
仰げ人々 世に生れましし 日本明治の 君みかど……1853

1853年 ペルリ浦賀に来る（孝明、嘉永6年6月）

米国の水師提督ペルリ（Perry）は大統領フィルモアの命を受け、此年六月軍艦四隻を率いて相模の浦賀に入り国書を上り通商貿易を乞うた。

幕府大に驚き、浦賀奉行戸田氏栄等をして之と久里浜に應接せしめ、明年返答する由を告げて帰らしめた。

今まで外国船は来ても、辺鄙のみでさのみ驚かなかったが、此時は江戸に近い浦賀に、山のような黒船が現れたので上下慌てふためいて、その驚きは並大抵でなかった。

▲ 夢の世の 眠を覚ます 酉（シヨ）の船……1853
起きろ開けやろ 夜が明けたぞと 眠る日本を さます雨……1853

(附記)
幕政の破綻　幕府は直ちに米鑑渡来の事を上奏した。時に将軍家慶歿し内外益々多事、且つ外交の重大さを思って翌七月諸侯に開港の可否を問うて その威信を墜した。やがて露使プーチャチン また軍艦四隻を以て長崎に来て通商及樺太境界決定を乞うたが幕府その要めに應じ難いので謝したので翌年正月去った。

〔年記〕
仝年 ⑥米艦来航を上奏、将軍家慶歿(年61) ⑦露使プチャチン長崎に来る ⑧品川に砲台を造る ⑨大船製造の禁解く ⑩家定将軍となる

1854年　神奈川条約成る(孝明、安政1年3月)
(日本開国・和親条約)

安政元年正月、ペルリ再び船艦九隻を率いて、神奈川沖に入り、前年の返答を迫った。幕府は意見が定まらなかったが、止むなく和親条約を結び、下田、函館二港を開き、薪水食糧の給與を許した。但し通商は之を許さず、ついで英露蘭諸国と略同様の条約を結んだ。之を神奈川条約と云う。その第一条に曰く「日本と合衆国とは其人民永世不変の和親を取結び場所人柄の差別無之事」……

(附記)
開港論と攘夷論　徳川斉昭 其臣藤田東湖及諸侯志士等の攘夷論益々喧しくなったが、信濃の佐久間象山は開国の意見を有し、その門人吉田松陰は密に米船に乗って海外に行こうとして下田に捕えられ、後、長門の萩に松下村塾を立て青年子弟を教育した。

〔年記〕
仝年 ①ペルリ再び来る ③吉田松陰捕わる ⑭佐久間象山捕わる ⑫日章旗を日本国總船印と定む

1855(仝安2) ②江川英龍歿す(年53) ③鐘で大砲を造る ⑩江戸地震、藤田東湖圧死(年50) ⑫蘭と和親条約
1856(仝安3) ⑦米のハリス下田に来る ⑩外国事務局をおく 二宮尊徳歿(年70)
1857(仝安4) ①蕃書取調所を開く ⑩将軍ハリス引見
1858(仝安5) ①老中正睦(堀田)上京条約勅許を乞う ④井伊直弼大老任 ⑥米(⑫露蘭英⑭佛)との假条約調印 ⑥家茂を将軍嗣とす ⑦斉昭等罰

1858年　安政の大獄起る(孝明、安政5年9月)

和親条約に基き、米国總領事ハルリスは安政三年下田に来、翌年江戸に入って将軍家定に見え、世界の大勢を説き、条約を改め通商を開くことを求めた。老中堀田正睦(マサヨシ)ハルリスと假条約を定め、自ら上京して勅許を仰いだが許されず、江戸に帰って辞職した。

此年四月彦根藩主井伊直弼大老となり、六月勅許を待たず假条約に調印し、新に長崎、神奈川、新潟、兵庫の四港を開く事を約し、ついで蘭、英、露、佛とも同様に假条約を結んだ。

そこで直弼を非難する声が天下に高くなった。偶々七月十三代将軍家定歿し、弟家茂(イエモチ)が職をついだが、これは全く直弼の専断で定めたもので、当時、徳川斉昭の子、一橋慶喜、賢明の誉高く、尾張、越前、薩摩の藩主等皆之を立てんとしたが、直弼衆議を排し、漸く十三歳の家茂

を立てたので、直弼非難の声は更に高まって来た。

依て彼は尾張の慶勝、水戸斉昭等を罰し、後更に世論の沸騰を見て、九月、志士五十余人を捉え悉く之を獄に投じた。これ所謂安政大獄の起りである。

△ 世は地獄　直弼閻魔の　役目なり……1858

井伊の閻魔が　世の志士斬って　苦い顔すりゃ　世は地獄……1858

（附記）

大獄の始末　翌年直弼は断然として

(1) 幕府に反対の近衛忠熙、三条実萬等の公卿を幽し

(2) 斉昭、慶喜父子、尾張、越前、土佐等の諸藩主に謹慎を命じ

(3) 吉田松陰、頼三樹三郎、橋本左内、安島帯刀等を斬り又志士五十余人を罰した。

（年記）

1859（孝明、安政6）⑩ 松陰、三樹三郎、左内等志士五十余人を刑す

1860年　櫻田門外の変（孝明、万延1年3月）

安政の大獄あって世人は益々直弼に反感を懐いた。

此年三月三日上巳の節供には時ならぬ雪が降った。直弼雪を冒し、江戸城に登ろうとして櫻田門外にかゝった時、水戸の浪士佐野竹之助、蓮田市五郎等十六名、薩摩の浪士有村治左衛門と共に要撃して之を殺し、鮮血白雪を染めた。此の人去って幕府の威信俄に衰え、これから徳川の世は滅亡えと急ぐことになった。

△ 雪の日に　人の良い（桜田）のを　割っちまい……1860

淡い春辺の　雪にも花は　降って散ったか　わびしげに……1860

（附記）

1. 公武合体（和宮親子内親王の降嫁）

桜田の変後、老中安藤信正等は公武を合体して、国政を処理する方針をとり、文久元年幕府の請により、孝明天皇の御妹、和宮親子内親王は将軍家茂に降嫁あった。これは却って尊王論者を怒らせ、翌年信正は坂下門外で浪士の為に傷けられた。

2. 京都の形勢　当時京都には浪士多く集り、尊王攘夷討幕を唱え市中を横行、白昼人を斬る等騒しくなったので、薩摩の島津久光京都を守るの命を受け、ついで長州の毛利元徳、土佐の山内豊範等もこの命を受けた。これから薩長、土三藩の威望高くなった。

3. 勅使東下と幕府の改革　文久元年、勅使大原重徳（しげとく）は島津久光を随えて東下、幕政改革を命ぜられ、家茂勅を奉じ、慶喜を後見とし、慶永（前越前藩主）を政事総裁職とし、参覲交代の制を弛め、諸大名の妻子の帰藩を許すなど、諸政を改革した。

4. 攘夷の勅令とその実行

(ア) 攘夷の勅令　文久二年、家茂上洛、天皇賀山に行幸、社前で攘夷の節刀を家茂に授けんと せられたが、家茂病と称してお供せず、されど遂に勅を奉じ、五月十日を以て攘夷の期と定めた。

(イ) 長州藩の実行　五月十日の期日に下関海峡を通過した米船を砲撃した。翌元治元年、米、仏、蘭、英の四国艦隊来攻、長州藩敵せずして講和

(ウ) 鹿児島藩　文久二年八月島津久光江戸よりの帰途、武蔵の生麦で、英人その行列を横り、従士之を殺傷した。よって英艦は文久三年七月鹿児島に来攻したが敗走した。之を生麦事件と云う。

〔年記〕

1860（孝明、万延1）① 幕府始て西洋に使を遣る ⑧ 齊昭歿（年61）
⑫ プロシヤと条約を結ぶ
1861（仝　文久1）⑬ 和宮親子内親王降嫁（公武合体論）
1862（仝　仝2）① 坂下門の変 ⑤ 大原勅使来下 ⑨ 生麦事変
⑪ 三条勅使来下
1863（仝　仝3）③ 将軍入京、⑤ 長藩外船砲撃 ⑦ 英艦鹿児島に寇す ⑧ 攘夷親征の儀、大和の変、七卿落
⑩ 生野の変
1864（仝　元治1）⑦ 佐久間象山殺さる（年54）蛤門の戦（元治の変）
下関の砲戦

1864年　長州征伐起る（孝明、元治1年8月）

京都では攘夷論者相謀り、朝廷を動かし、一時は天皇の御親征とまでなろうとしたが、京都守護の會津藩主、松平容保（カタモリ）等の温和派が、薩藩と結びその不可を奏したので朝儀にわかに変じ、強硬な攘夷派の長州藩の皇宮守衛を免じ、三条実美等の朝参を禁じた。そこで長州藩主等京都を去り、実美以下公卿七人又共に長州に奔った。之を七卿落と云う。

又此頃、攘夷論者が各地に討幕の軍を起した。即ち、藤本鉄石（奥宮）等は天忠組と称して兵を大和の五条（吉野十津川峠）にあげ、平野国臣は但馬の生野に、水戸の藤田小四郎、武田耕雲斎等は筑波山に拠って兵をあげたが皆幕兵に平げられた。

元治元年六月、長州藩の老臣等は藩主及七卿の赦免を

請わんが為、大挙入京、薩摩、會津、桑名の兵と蛤御門に戦い敗れ、空しく帰国した。

幕府はその戦の翌月、遂に征長の師を起し、徳川慶勝を總督とし、諸藩の兵を率いて廣島迫進んだが、時に長州藩主毛利敬親（タカチカ）は福原元僩（モトタケ）（越後）等三家老を斬って罪を謝したので事なくして止んだ。

▲ 世の秋に　歪（ヒズ）みながらも　立つ案山子……1864

威張る幕府は　山田の案山子　骨は朽ちても　立って居る……1864

（附記）

1. 長州再征　翌年正月、藩主の処置を喜ばぬ長州の青年、高杉晋作、山縣狂介（有朋）等の正論派は俗論党を倒して兵をあげたので、将軍家茂自ら長州再征に向つたが、時に阪本龍馬が、薩長の聯合を斡旋して幕軍振わず、更に翌慶應二年六月、長州に迫って連戦皆敗れた。
偶々七月、将軍家茂の死により征長軍を止め、十二月慶喜が十五代将軍となつた。
長州征伐に敗れてからは、幕府の威信全く地に墜ちた。

2. 假條約勅許　家茂大阪に下った時、英、米、佛、蘭の公使等が假条約の実行を迫ったので、朝廷兵庫を除き他の開港を許し、後、慶応三年、明治天皇は兵庫の開港をもお許しになった。

〔年記〕

1865（孝明、慶應1）① 高杉晋作挙兵 ④ 長州再征
⑩ 假条約勅許
1866（仝　仝　2）⑦ 家茂死（年21）⑨ 征長軍停止 ⑫ 慶喜将軍
孝明天皇崩（寿36）
1867（明治、仝　3）① 明治天皇践祚 ③ 征長軍を解く
④ 高杉晋作歿（年29）⑤ 兵庫開港
⑨ 条約改正、⑩ 討幕の密勅下る

1867年 大政奉還（明治、慶應3年10月）
（王政復古）

慶應二年孝明天皇崩じ給い、此年正月明治天皇が御年十六で御践祚になった。時に幕府は全く民望を失ったので岩倉具視は中御門經之と計を運らし、薩藩の小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通及長藩の木戸孝允等と討幕を謀し、遂に薩長二藩に討幕の密が下る形勢となった。

前土佐藩主、山内豊信（容堂）此の形勢を見大に憂い、其臣後藤象二郎を遣し大政を返上することを慶喜に勧告せしめた。慶喜快くこを承諾し、此年十月十四日上表して大政奉還を請うた。（討幕の密勅の下ったのと同日であった）

翌日天皇之をお許しになり、十二月王政復古の大令を下し、従来の官制を改めて新に總裁、議定、参與の三職を置き、有栖川宮熾仁親王を總裁とし、親王公卿及諸藩主の中から議定に任じ、公卿、藩士の中の人材を見て参與となし給うた。

かくて徳川幕府は十五代二百六十五年で亡び、頼朝が武家政治を創めてから約六百八十年で大権再び朝廷に帰った。

▲ 闇晴れて 光り出でけり 明治の世…1867

葵三葉も 世に影ひそめ 光り出たのは 明治の世…1867

（附記）

維新の戦乱

(ア) 鳥羽伏見の戦　時に慶喜二条城に居り、新政に服らず、会津、桑名等の諸藩及旧幕臣等薩長等の専横を憤つた。慶喜形勢不穏を見て大阪に退いたが遂に明治元年正月、慶喜之等の兵に擁せられ討薩の表を上って上京の途中、鳥羽伏見で薩長の兵と戦い、敗走して再び大阪に退いた。

朝廷乃ち嘉彰親王（後の小松宮彰仁親王）を征討大將軍として討たしめられ、慶喜は海路から江戸に逃げ帰った。

(イ) 江戸開城　ついで東征大總督熾仁親王、参謀西郷隆盛等の軍江戸に進撃、慶喜は上野の寛永寺に退き恭順の意を表して謝罪、官軍江戸の攻撃を止め、西郷隆盛は徳川方の勝安芳と会見し、江戸城及び軍艦兵器等を收め、慶喜を水戸に遷し、田安家達が徳川家をつぐ事になった。

(ウ) 上野の戦　慶喜の恭順を喜ばない旧幕臣等の彰義隊は輪王寺宮公現法親王（後の北白川宮能久親王）を擁して上野に拠ったが、官軍の大村益次郎の為に破られ、又大鳥圭介は宇都宮に拠り、官軍に破られ何れも会津に走った。

(エ) 奥羽戦争　会津藩主松平容保は奥羽、越後の諸藩と結び官軍に抗した。官軍、白河口、越後口より進み、諸城を陷れ若松城を囲んだから、容保力尽きて降り、奥羽全く平定した。（白虎隊の殉後は此時の事である。）

(オ) 函館戦争　さきに軍艦数隻を率い品川湾を脱走した榎本武揚（タケアキ）は会津に應援せんと松島湾に居たが、若松城陷るに及び、大鳥圭介と共に函館に走り五稜廓に拠って戦ったが、明治二年五月力尽きて降り、こゝに始めて維新の戦乱止んで全国平定した。

（註）上野戦争以下の諸戦を總称して明治戊辰の役と云う、戊辰は明治元年の干支。

〔年記〕

1868（明治1）①鳥羽伏見の戦、三職七科の制定る、旧幕地収納
②東征大総督出発、各国公使朝見、官職改正
（七科を八局とす）③慶喜謝罪

第五史期（明治の新政―世界大戦）

1868年 五條の御誓文（明治1年3月）
（明治の新政）

此年三月十四日　天皇紫宸殿に臨み、公卿諸侯を率いて天神地祇を祭り、五亭を誓って国是を定め之を群臣に宣べ給うた。

御誓文に曰く、

1. 廣ク會議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ。
1. 上下心ヲ一ニシ、盛ニ經綸ヲ行フベシ。
1. 官武一途、庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。
1. 旧來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ。
1. 智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。

我國未曾有ノ変革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

世に之を五ヶ條の御誓文（セイモン）と云う、実に明治新政の基をなすもので、後年立憲政治の成る亦之に根ざして居る。

▲ 世治り　人に五条の　拠り所……1868

明けて行く世に　暗路もはれて　人に五条の　拠り所……1868

（附記）
官制改革

(ア) 明治元年の改革

中央政府の官制は總裁、議定、参與の三職定置以来度々改革せられたが、明治元年四月、太政官に議政、行政、神祇、会計、軍務、外国、刑法の七官を置いて、立法、司法、行政の三権を分立し、議院制度の端緒を開いた。

(イ) 明治二年の改革

二年七月、大宝令に倣って、神祇、太政の二官を設け、太政官に左大臣、右大臣、大納言、参議等を置き別に民部、大蔵、兵部、刑部、宮内、外務の六省を設け、官位十八階を定め、勅任、奏任、判任の制を立てた。

(ウ) 明治四年の改革

四年、太政官に正院(行政府)左院(立法院)右院(諸省卿の議政所)を分置し、中央政府の官制略整つた。

(年記)

仝年 ㊹江戸城を收む ㊼江戸を東京と改む ㊽即位大礼
㊾改元、一世一元の制立つ ㊾天長節復古、会津降る
㊿奥羽定まる、東京行幸

1869(明治2) ①薩長土肥四藩主版籍奉還奏請 ②新聞刊行許可 ③再び東京行幸

1869年 東京奠都(明治2年3月)

明治元年八月廿七日、明治天皇は古典に則り新儀を加味して即位の大礼を紫宸殿に挙げ給い、九月八日改元あつて慶應四年を改めて明治元年とし一世一元の制を定め給うた。

これより前参與大久保利通は人心一新の為、遷都の必要を建議した。元年七月江戸を改めて東京とし、十月天皇此処に行幸あり、江戸城を以て皇居と定め東京城

と呼ばしめ給うた。ついで十二月、一度京都に還幸あつて、一条忠香の第三女美子を皇后に立て給い翌二年三月再び東京に行幸、これから永く帝都の地となつた。

桓武天皇の平安遷都からこゝに一千七十余年である。

▲ 世の明ける 東に在す 例となり……1869

明く治まる 世の春告げて 花の都に 龍駕とぶ…… 1869

(附記)

1. 明治初年の外交 明治朝廷は世界の大勢を察し、断然開国主義をとり、明治元年正月、嘉彰親王を外国事務總裁とし、又外国和親の大詔を下して、外交の事一に万国公法に従うべき旨を全国に布告せられ、外交方針此に確立した。ついで各国公使を引見し、三年には我国また公使を英、佛、独、米の諸国に置いた。

2. 使節の派遣 明治四年十月外務卿岩倉具視を全権大使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳等を副使として欧米に派遣し、条約改正を議し併せて各国の文物を視察せしめた。一行はアメリカ、英、仏、蘭、白、蘭、独、露、墺伊の諸国を巡遊し六年九月帰朝した。此行条約改正の目的を達する事はできなかつたが、欧米文化の視察は我が内政の改良に資する処頗る大であつた。

(年記)

1869(明治2) ㊺榎本武揚等降る ㊻版籍奉還許可、公卿諸侯を華族と改称 ㊼官制改革(六省設置) ㊽電信創設(東京、横浜間)

1870(仝3) ㊾庶人称氏許可 ㊿公使を英、佛、独、米におく。

1871年 郵便制を始む(明治4年1月)

明治維新に当り従来の外交方針一変し、開国進取の国是を定められ、欧米諸国との交通愈々盛なるに従い、西

洋の事物は追々輸入せられ、百般の制度、文物、器具、衣食など大に改まった。

郵便の制は、維新の始には猶旧幕時代の飛脚の制度を襲用したが、明治元年九月駅逓規則を定め、更に此年正月、始めて郵便制を設け先ず東京、京都、大阪間に之を実施した。此後明治十年に万国郵便条約に加盟した。

▲郵便は　明治四年が　歩き初め……1871

えっさえっさと　郵便持って、明治四年に　歩き初め……1871

(附記)

1. 交通の発達

(ア) 電信　明治二年京浜間に設けたのに始り、後大に行われ、海底電信も布設され、十二年には万国電信条約に加り、近年また各地に、無線電信局が設けられた。

(イ) 電話　明治十年、京浜間に試用したのが始で各地に普及し後無線電話も設けられた。

(ウ) 鉄道　明治五年始めて東京、横浜間に通じてから次第に延長され、廿九年には重要な鉄道を国有とし、鉄道院を置き、大正九年内閣に鉄道省をおいた。
以前は江戸大阪間早きも十余日を費し飛脚でも六日限、三日限をレコードとしたのが鉄道が開けてから十二時間位で通し得られるに至り費用も著しく少くなった。

(エ) 海運　明治四年岩崎弥太郎三菱会社を起し、七年から政府の補助を受けて、横浜上海間の航路を開き、十八年には共同運輸会社と合併して日本郵船会社と改称した。次で大阪商船、東洋汽船、日清汽船等の諸会社も起った。

2. 産業　農業は開墾の奨励により、益々その産額を増し、工業も学芸、貿易の発展と共に大に興り、貿易も進み、又日本銀行、横浜正金銀行等の金融機関も設立された。

1871年　藩をやめ縣を置く（明治4年7月）

（版籍奉還―廃藩置縣）

幕府の旧領地は明治元年に朝廷の直轄となったが、諸侯の地は猶そのまゝで、依然その土地人民兵馬の権を握って居たので、全国一様の政を行う事ができなかった。

参与木戸孝允憂え、三条、岩倉公に建言し大久保と謀り、封土人民の返上を各藩主に勧めた。明治元年十一月姫路藩主、酒井忠邦等先上書建白し、翌二年正月、薩、長、土、肥の四藩主連署してその封土人民を朝廷に奉還せん事を奏請し追々全国之に倣った。

依て二年六月　天皇之を許し、各藩主を知藩事に任じ旧禄十分の一を支給し藩政を執らしめた。此時全国は八府、廿六縣、二百六十二藩となり天下の全土悉く朝廷に帰し、王政復古の実挙った。之を版籍奉還と云う。

斯くして版籍は奉還されたが、藩が存する以上猶封建の情実を免れないので、木戸孝允は廃藩の急務を唱え、大久保、西郷、板垣等と謀って大に実現に努めた。

明治四年七月、朝廷、知藩事を召してその旨を諭し、一時に全国の知藩事をやめて東京に居らしめ、同年十一月、全国を三府七十二縣に分け、府知事、縣令（後に知事）

として之を治めしめ、その後廃々の廃合を経て明治廿二年には三府四十三縣となった。茲に於て中央集権の実成り、新政府の威令全国に輝くに至った。

▲ 世は藩の もやもや晴れて あらたな陽…1871

あちらこちらと 世を立ちこめた もやは晴れたか 王の地に…1871

(附記)

1. 事物の改革

(ア) 明治二年公卿、大名の名を廃して華族(五爵は明治17年定)となし、諸藩士を士族とし、農工商の徒を平民とした。三年、平民の苗字を称するを許し、四年華族平民の婚嫁を許し又穢多、非人の称をやめて平民とした。

(イ) 四年、士民の斬髪、脱刀を許し、五年礼服に洋服を採用した。

2. 国立銀行　五年九月始めて国立銀行を創立して金融を図った。日本銀行は十五年に開業した。

3. 税法　明治六年全国の地價を定め、地租としてその百分の三を納めしめ、地方税はその百分の一を超えざらしめた。

〔年記〕

1871 ⑧ 散髪、脱刀許可 ⑪ 大使を欧米に出す ⑪ 三府七十二縣とす、琉球民台湾生蕃に殺さる

1872年　鉄道始めて成る(明治5年2月)
(東京ー横浜間)

▲ 山川の 窓に嬉しく 汽車の行く…1872

岩をくりぬき 山川越えて 窓にうれしい 汽車の旅…1872

仝年 ⑧ 学制を布く ⑨ 横浜瓦斯燈点火
⑪ 暦制改定、神武帝即位の年を紀元とす。

1873年　太陽暦実施(明治6年1月)

明治五年十一月、太陰暦を廃し太陽暦を採り、六年一月から実施する事となりついで五節供をやめて新に祝日祭日の制を立てた。

昔から国々により種々の紀元を用いたように暦もまた国と時代により差別があるが、四季を十二ヶ月に分けるなどは大抵皆同じである。

世界の暦を大別すると、太陰暦と太陽暦とになり、上世には多く太陰暦が行われ、世降っては多く太陽暦を用いる。之は陰暦では月の朔望を定めるには好都合だが、季節の推移が計り難いからであろう。

太陽暦はローマのユリウス・ケーザルが西暦紀元前45年に定めたものであるが、その後千六百二十余年を経て春分に十四日の差異を生じたので、1582年ローマ法王、グレゴリイ十三世が之を改正し、四百年間に三閏日を廃し、毎百年毎の一閏日を三度廃し、四百年目の閏日を残す、実は三百八十四年間に三閏日を廃すべきだが、グレゴリイ暦は略之に合うので、世界の文明国はこの改正暦を用いて居、我国亦之を採用した。

我国では古来、元嘉、儀鳳、太衍、五紀、宣明の各暦

を用いて居たが、以上は皆陰暦であつた。こゝに至つて太陽暦を採つたのである。

▲ 世の中が　廻りゃ暦も　新(シン)になり……1873

お月様から　世は太陽に　めども変った　新こよみ……1873

(附記)

1. 旧物打破　明治に入つてから旧来の陋習を破り百般の事物新になつたのは喜ぶべきであるが、勢の向う所一面、模倣、急進の弊をも伴い、さては洋風に心酔して旧物はその善悪を極めずして打破し、名勝、古跡、古美術の破壊されるもの等もあつたので後国粋保存説が唱えられるようになつた。

2. 新聞紙　江戸の蘭医兵四郎は文久三年秋、バタビヤ新聞、及び六合雑誌を発行したが之は外国新聞の翻訳や抜萃で、定期の刊行でもなく、純粋の日本新聞と云い難い。其後、元治元年(1864)4月、岸田吟香、本間潜蔵、アメリカ彦造等が、横浜で新聞紙と云う小冊子を毎月三回づゝ発行した。之が我国新聞の始で、その後明治に入つて追々発達し、太政官日誌、モシホ草、中外新聞、江湖新聞等が出た。

明治2年2月政府は新聞出版を学校官の管理とし、新聞紙印行条例を公布した。

此頃本木昌造の活字も完成し、益々流行して、四五年頃には横浜新聞、新聞雑誌、日進真事誌、東京日日新聞、郵便報知新聞等続出し、明治六年以後各地方にも発行されて多くの数に上り、社会的勢力も大となつた。

(年記)

1873 ① 徴兵令を布く ⑨ 岩倉大使等帰朝、⑩ 征韓論破れ西郷隆盛等辞職

1874 (明治7) ① 民選議設立の建白 ② 佐賀の乱

1874年　台湾征伐　(明治7年4月)

江戸時代には支那との国交開けなかつたが、明治四年に至り、政府は伊達宗城(ムネナリ)を北京に遣し、修好通商の条約を結ばしめた。これ我国が外国を促して条約を結んだ始である。然るに其年十一月琉球の漂民五十余名が生蕃に虐殺された。六年二月外務卿、副島種臣はさきに結んだ修好条約の批准の為、清国に赴いたが、其翌三月備中の民亦生蕃に劫掠せられたので、種臣は之を清に質さしめた。従し清国は之を化外の民だと云つて我が要求を拒んだ。偶々六年十月征韓論破れ、我国内不平の徒多く、此年二月江藤新平は佐賀に乱を起した。依て政府は台湾を征して国民の耳目を外に轉ぜしめんとし、征台の廟議愈々決し、此年陸軍中將西郷從道を都督とし、陸軍少將谷干城、海軍少將赤松則良を参軍とし、兵三千余を率い往き討たしめた。生蕃諸番争つて降り九月特に猛悪な牡丹社も平定した。

此時、清国俄かに前言を翻し、蕃地を以て其の版図だと主張し、我に撤兵を求めた。全権公使柳原前光(サキミツ)之と論争して聽かれず、八月大久保利通を全権弁理大臣として談判させたが議遂に調わず、国交將に破れんとした。

時に英国公使ウエードその間を調停し、清国は償金五十万両を出して事止んだ。

▲ 行き討ちて　御旗立てばや　高砂に……1874

腕の力が　横さに飛んで　鞭で台湾　たしきつけ……1874

（附記）

琉球の処分　琉球は古くから我国に属し、殊に慶長以来薩摩藩に附き、又支那にも朝貢した。明治四年廃藩置県に当り政府は之を鹿児島県に編入し、翌五年更に国王尚泰を琉球藩王に封じて華族となし、同十二年琉球藩を廃して沖縄県を置き、尚泰を東京に移住させた。然るに清国之に異議を唱えたが、偶々来遊中の米国大統領グラント（Grant）が彼我の中に立ち清国日本の方策を認め事を断った。

〔年記〕

1874 ⑧ 大久保利通等清国に台湾事件談判 ⑩ 決定
1875（明治8）㊍ 元老院、大審院設置 ⑥ 始て地方官会議

1875年　千島、樺太交換（明治8年5月）

幕末国内多事、我国辺境に力を注ぎ得ないのに乗じて、露国は安政元年幕府と條約を結び、千島の擇捉（エトロフ）、得撫（ウルップ）両島の間に国境を劃し、樺太を雑居地とした。

然るに安政六年ロシヤの東部シベリヤ總督ムラビヨフ軍艦を率いて品川湾に入り樺太全島は露領なりと主張し幕府之を斥けた。

こえて文久二年（1862）幕府は外国奉行竹内保徳、松平康直を露都に遣し、北緯五十度を以て両国の境界とせん

且つ明年を期し、両国委員の実地協定を約せしめた。偖し幕府は国内多事でその約を果し得ず、越えて慶應二年幕吏再び露都に行って交渉したが議合わず、明治に及んで猶、樺太は雑居の地であった。

明治五年外務卿副島種臣は五十度以北の地を買収して、樺太全島を得ようと図ったが彼應ぜず、翌明治六年黒田清隆は樺太の国家に益なきを説き、其開拓費を以て北海道の経営に用うるに如かずと主張したので、政府は此年露国駐劄全権公使榎本武揚をして交渉せしめ、樺太全島を彼に譲り、千島群島を我国に受け占守海峡を以て国境とし多年の紛議始めて落着した。

▲ 厄拂い　豆のようなが　日本領……1875

魚のようなを　やったよロシヤに　豆のようなを　日本とる……1875

（附記）

1. 樺太南半を得　その後、日露戦争の和議により、明治38年、樺太の北緯五十度以南が我領土となった。

2. 北海道の開拓　蝦夷地はもと松前氏の所管、幕末ロシヤの侵略盛となったので幕府の直轄とし奉行を置いた。
明治二年函館戦後、新に開拓使をおき次で之を北海道と改称し十一国に分った。
三年、黒田清隆開拓次長として土人の撫育教化、産業交通に功を立てた。八年屯田兵をおいて国防と開拓とを兼ねしめ、十五年開拓使を廃し、三県を置き十九年北海道庁を置きついで屯田兵を廃して第七師団を置いた。

1875年 江華島事件（明治8年9月）
（朝鮮問題）

明治の初年我邦、朝鮮に使者を出し修好を促したが、彼国王李熙の生父 大院君（李昰應）政を執り頑冥 固く国を鎖し、再三再四我が修交の議を斥けたから我国人 その無礼を憤り、明治五年 外務大丞 丸山作樂等は党を集め之を伐たんとした。同年更に使を派し修交を求めたが彼應ぜず、征韓論益々盛となり、六年西郷隆盛は自ら使して朝鮮王に諭し尚聴入れずば、問罪の師を出さんと主張し、副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平等之に賛した。然るに同年岩倉大使の一行帰朝し、岩倉、木戸、大久保等内治の急を力説して、征韓の非を論じた為征韓論敗れ、その論者皆辞職し、物情騒しく地方の乱の因となった。　こえて明治八年 我が軍艦雲揚号が清国牛莊に赴く途中、水を仁川に近い江華島に求めた時、朝鮮の守兵急に発砲したので、我軍應戦砲台を陷れた。依て我国は黒田清隆を遣しその不法を責め、兼て修交を議せしめた。

翌九年朝鮮無礼を謝し、修交条約十二ヶ条を結び釜山の外に仁川、元山の二港を開いた。これ朝鮮開国の始で文化八年幕府が交を絶ってから約六十年を経て再び交を

結ぶ事となった。此後欧米諸国も相ついで朝鮮と好を通じた。

▲ 行く船に　水を向けたる　仲たがい……1875

意地と張とで　やっては見たが　水と火のよな　仲じゃなし……1875

（附記）

地方の騒乱

(1) 佐賀の乱　さきに征韓論破れて郷里佐賀に帰った江藤新平は同志を糾合して征韓党を組織し、同藩中 新政を喜ばぬ島義勇等の愛国党と結んで、明治七年（1874）乱を起し、県廳を襲った。
朝廷大久保利通を遣して之を鎮めしめ、義勇は鹿児島に、新平は土佐に各捕えられて刑せられ乱平定した。

(2) 熊本、秋月の乱
熊本の士族大野鉄平、加藤育堅等洋風を嫌い、新政を喜ばず党を集めて神風連と称したが、明治九年十月廿四日夜乱をなし、熊本鎮台を襲い県廳に迫り多く官吏を殺傷した。翌日鎮台兵之を伐ち鉄平自殺した。
時に筑前秋月の士族宮崎車之助神風連に應じ兵を秋月にあげ間もなく平げられた。

(3) 萩の乱
前兵部大輔前原一誠新政を喜ばず官をやめて郷里萩に居り、熊本の変を聞いて徒党を集めたが忽ち広島鎮台の兵に破られ、一誠逃れて島根に捕えられ刑に就いた。

（年記）
1876（明治9）③帯刀禁止 ⑩神風連の変、熊本、秋月、萩の乱

1877年 西南の役（明治10年2月—9月）

明治六年征韓論敗れて郷里に帰った西郷隆盛は、桐野利秋、篠原国幹等と共に私学校を立て、子弟を教育

したが、その名望を慕って来り学ぶ者甚だ多く何れも政府に不平を抱いて居た。さきに佐賀、熊本等の騒乱の時、私学校の徒之に應じて立たんとしたが、隆盛に制せられ事なくして終った。政府この形勢を見万一を慮って鹿児島にある弾薬、機械を大阪に移そうとするに当り私学校の徒急に起って、陸軍製弾廠、海軍機械所を奪い、明治十年二月遂に隆盛を擁立して兵を挙げた。時の鹿児島縣令大山綱良も亦官金を出し軍費を援けた。

依て隆盛等君側を清むるを名とし、兵一万五千人を率い鹿児島を発し進んで熊本城を囲んだ。鎮台司令長官谷干城よく防ぎ、朝廷熾仁親王を征討總督とし、山縣有朋、河村純義を参軍とし、海陸の大軍を以て之を攻め、賊軍は高瀬、吉次峠、植木、田原坂(タバル)等の嶮によって防いだが、官軍奮戦之を破り、一方熊本に向った中将黒田清隆、少将山田顕義等の率いる別軍は八代に上陸し賊背を衝いたので敵勢衰え、四月熊本の囲を解いて肥後日向に走り、遂に鹿児島に退き、城山に拠った。官軍来り囲み九月廿四日城山陥り、隆盛 利秋 以下自殺し乱全く平いだ。之を西南の役と云う。此戦で内乱全く收った。

聞く、隆盛以下壮烈な死を遂げたのは午前九時頃で、

宛も其時、大雨沛然として戦場を洗い、霽れての後は虫の声が頻りであったと云う。

▲ 矢も尽きて　身は城山の　虫の声……1877

今は力も　矢も尽きはてゝ　空し城山　虫が鳴く……1877

(附記)

1. 博愛社(日本赤十字社の起原)

西南役は文戦二百余日に亘り両軍奮戦殺傷甚だ多かったので、佐野常民、大給恒(ユキツネ)等總督宮に請うて博愛社を創立し、戦地に病院を設けて、官軍と賊兵とを問わず、凡て傷病者の看護をした。実に日本赤十字社の起りで之が明治十九年我国が万国赤十字条約に加盟して後日本赤十字社と改称し其後戦争及事ある毎に傷病者救護に当って居る。

此外我国の慈善団体としては明治34年奥村五百子の創立した愛国婦人会、明治天皇の恩賜金に基いて44年成立した済生会等がある。

2. 軍備　明治六年徴兵令を布き、男子丁年に達すれば兵役に就く義務あるべきものとし、全国皆兵の古制に復した。そして西南役等に当り平民兵士の價値よく表れ此制度の有効なるが証せられた。

(1) 陸軍＝兵役を常備(現、予)後備、補充、国民の四とし兵種を歩、騎、砲、工、輜重の五に分ち、全国に六鎮台をおいた。後之を師団に改め、日清戦後には十三師団、日露役後には十九師団、大正四年には廿一師団となった。

(2) 海軍＝明治七年、横須賀、鹿児島の二提督府を置き後鎮守府と改め、横須賀、呉、佐世保、舞鶴、鎮海等がある。

(年記)

1877年　佐野常民等博愛社を設く(明治10年5月)
(日本赤十字社の起り)

▲ 良く広き　まことの愛に　むくろまれし……1877

赤い十字を　やがては蔭(カザ)す　道の博愛　胸の愛……1877

仝年⑤ 木戸孝允死　⑧ 内国勧業博覧会を開く ⑪ 電話試設

1878(明治11) ⑤ 大久保利通殺さる

1879(仝 12) ① 梟刑廃止 ③ 始て府県会を開く ④ 沖縄県を置く

1881(仝 14) ⑩ 国会設立の詔下る　⑨ 教育令成る

1882年　第一京城の変（明治15年7月）

明治九年二月朝鮮と修交条約を結んで後、朝鮮では改革派勢を得我が陸軍士官を聘して新式訓練を施し又金玉均、除光範等を派して我が制度文物を視察させた。

然るに大院君一派の守旧派此の革新を喜ばず密に不平の徒を煽動し十五年七月暴徒王宮に乱入し我が士官を殺傷し、又我が公使館を襲い之を焼いた。公使花房義質（ハナブサヨシモト）等僅に免れ、英艦に投じ長崎に逃して変を告げた。仍て我は直ちに兵を発し公使を護衛して、京城に赴き厳談せしめた。時に大院君、清国の後援を頼んで毫も誠意がなかったので、義質怒って済物浦に退き国交危くなった。清国公使袁世凱等日本と事を構える不利をさとり、大院君を天津に拉し去ったので、局面一変し朝鮮は人を派じ和を講ぜしめ、償金を出し、謝罪使を遣わす等所謂済物浦条約を結んで事漸く治った。世にこれを壬午の変とも云う。

▲ 焼糞な　奴を隠居が　けしかける…1882

怒忍んで　世をよく見れば　やがて光も　来るものを…1882

（年記）

仝年 ⑧ 京城事変和議成る（済物浦条約） ⑩ 日本銀行開業
1883（仝16） ⑦ 岩倉具視死
1884（仝17） ⑦ 五爵を設く ⑫ 再び京城の変
1885（仝18） ① 京城条約成り朝鮮と講和

1885年　日清間天津条約成る（明治18年4月）
（第二京城事変とその結果）

第一京城事変の謝罪使として来朝した朴泳孝、金玉均等は我が国の信頼すべきを知り、帰国後独立党を組織し、国政の改革を図り、一方守旧派の事大党は清国公使袁世凱と結び両党大に争った。

明治十七年十二月、朴金等の独立党は急に起って事大党の首領、閔泳翊を傷け、国政を執り、我公使竹添進一郎また国王の求に應じ兵を出して王宮を護った。

然るに袁世凱は事大党を助け、兵を発して王を奪い独立党を破り、我公使館を焼いたから竹添公使仁川に逃れ、金朴の諸氏我国に亡命した。よって外務卿井上馨京城に行って談じ、翌十八年一月京城条約成り、朝鮮政府罪を謝し、償金を出し事收った。之を第二京城事変と云う。

斯く朝鮮の事によりひいて日清間の関係屢々危くなるので、此年二月我国は伊藤博文を特派全権大使として天津に遣し、四月李鴻章と会して次の条約を結んだ。

(1) 両国共に朝鮮より撤兵す

(2) 将来出兵の必要ある時は互に行文知照し、事定らば直に撤兵すること

(3) 互に軍事教練の教官を朝鮮に出さざること

之を天津条約と云う。

▲ 約束で　やっとその日を　逃げる支那……1885

頭(アタマ)ペコペコ　約束しては　やっとその日を　逃げる支那……1885

〔年記〕

仝年⑫ 始て内閣成る（伊藤博文総理）

1886（明治19）③ 帝国大学令公布 ④ メートル条約加盟 ⑪ 赤十字条約加盟

1887（明治20）① 始て電気燈を東京に点ず

1888（仝 21）④ 市町村制及び枢密院官制公布 ⑤ 始て博士号を加藤弘之等に授く

1889年 帝國憲法発布（明治22年2月）

五条の御誓文に基き政府は明治二年公議所（のち集議院と改む）を開いて制度律令を議せしめ又待詔局を開いて廣く庶民の建言を求めた。

明治六年木戸孝允、憲法制定の議を立て、七年副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平等は民選議院設立の建白を為したが政府は加藤弘之の尚早論を賛した。明治八年元老院を設けて立法の源を創め、大審院を立て、裁判の権を固うし、地方官会議を開き、十二年始めて府縣会を開き議員を公選した。西南役後内乱全く定って乱を思う者なく、言論盛となり、板垣退助は郷里高知に愛国社を組織して民権自由の思想を鼓吹し、十三年国会開設の請願書を上った。此頃新聞雑誌

に政論喧しく、演説流行し国会開設の請願多くなった。

依って明治十四年十月十一日天皇は来る廿三年を期して国会を開くべきを決し、翌日之を公布し給うた。こゝに至り民論静まり、板垣退助は自由党を起し、翌年大隈重信は改進党、丸山作樂、福地源一郎は立憲帝政党を組織した。十五年伊藤博文命を受け欧洲の制度典礼を取調べて翌年帰朝し、十七年制度取調局を設け、博文その長官として憲法及諸制度の起草に従事した。翌十八年十二月大いに官制を改め、明治初年以来大体太宰令に倣って立てた太政官を廃して内閣制度をを創立し、博文を内閣総理大臣に任じ、廿一年枢密院を設けて天皇の最高諮問機関とした。又仝年市町村制成りこえて廿三年府県制郡制を布き地方自治制発達した。

斯てさきに起草成った大日本帝国憲法は枢密院の議を経、天皇之を欽定し給い、此年、紀元の佳節を以て天皇自ら神祇を祭り祖宗の霊に告げ、後文武百官を召して憲法発布の式をあげ、てあつい勅語を国民に賜った。

此日上下津々浦々に至るまで一斉に歓声をあげてその盛典を祝し合った。実にかくも君臣和樂の中に憲法の発布を見たのは世界にその例なく、我が国体の美を語り君

民一和を示すものである。

▲ 世をあげて　世の御定めを　礼讃し---1889

上を下えと　喜び祝い　良き日孝ぐ　令成る日---1889

(附記)

1. 皇室典範成る　之は憲法と同時に制定せられ、皇位継承、践祚、即位、立后、立太子、摂政等の事が定められて居る

2. 帝国議会を開く　明廿三年十月、元老院を廃し、十一月天皇は憲法の規定により第一帝国議会を東京に召集し給うた。此時伊藤博文貴族院議長に任ぜられ、中島信行衆議院議長に当選した。

3. 法律制定

(ア) 明治三年大宝令に基き明清律を参酌して新律綱領を制定した。

(イ) 六年西洋の刑律を参酌し新律綱領を修正し、改定律制を定めた

(ウ) 十三年、佛国法に則り、刑法、治罪法発布

(エ) 廿三年　民事訴訟法、刑事訴訟法発布

(オ) 廿一年　民法、廿二年商法各実施ついで刑法を大修正して四十一年から実施した。

1890年　教育勅語下る（明治23年10月）

此年十月三十日　天皇教育に関する勅語を下して教育の大本をお定めになった。

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ遠祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン

斯道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

▲ 世に尊(タカ)き　令を守らん　我が友よ……1890

美しいこと　善いことまこと　令の御言ぞ　わがかがみ……1890

(附記)

教育の機関

明治二年旧幕府の昌平校を大学本校と称し、和漢学を授け、旧開成所を大学南校（洋学）とし旧医学所を大学東校（医）とした。やがて本校を閉じ、明治十年南東校を合併して、東京大学と改称し、明治十九年、帝国大学令を公布し、法、理、医、文、工、農の六科を置いた。その前後官公私立大学を始め、高等学校、各種専門学校、中女学校、実業学校等が各地に設けられ教育大に興った。

普通教育は明治五年学制を布き、義務教育の方針を立てた。

(年記)

1890 ⑪ 第一帝国議会召集
1891 (明治24) ⑧ 三条実美死 ⑤ 大津の変 ⑩ 美濃大地震
1894 (仝 27) ⑤ 朝鮮に東学党の乱起る

1894年 条約改正成る (明治27年7月)

井伊大老が米国の圧迫によって結んだ所謂安政の假条約は、我邦にとって頗る不利益なものであったから、其後のわが外務当局は多年之が改正に努めた。

税権、治外法権ふと"改正"を唱する者が多く

1. 岩倉大使による明治四年の提議は米国に容れられなかった。
2. 寺島宗則は明治十一年主として税権の恢復を謀り、米国の承諾を得たが、英国の反対に遭い失敗
3. 井上馨は明治十五年以来改正に尽力したがその二十年の改正案中に、外人法官任用の項があったので朝野の反対者多く失敗
4. 大隈重信は廿一年外務大臣となり改正に力めたがやはり外人法官任用の事あって世人反対し、爆弾騒などあって失敗
5. 青木周蔵は廿四年、英国と対等条約を討議したが偶々露国皇太子の大津事変あり外相引責辞職の為失敗。
6. 陸奥宗光 明治廿五年外相となり、先ず英国の同意を得、此年七月十六日改正条約に調印を終った。

▲ やっと我が 利権を返す つてを得て…… 1894

改め条約 漸う成って 利権伸びたり 対等に…… 1894

(附記)

1. 改正条約実施と内地雑居

間もなく日清戦争起り、我軍の大勝が談判の進行を助け、各国相ついで新条約に調印し、三十年十二月悉く旧条約改正、廿二年から実施し内地雑居となった。

2. 税権回復

外務大臣小村寿太郎は四十四年税権の改正をなし、再び条約を改訂したので我邦は全く欧米諸国と対等の交際をなすに至り、多年の懸案始めて局を結んだ。

(年記)

仝年 ⑦ 豊島沖の海戦

1894年 日清戦役起る (明治27年8月)

朝鮮に於ける日清の関係は天津条約によって一時解決したが其後事大党勢を得、独立党の志士多く国を去り、袁世凱は京城に駐って密にその国政に干渉し、我が勢力衰えた。 明治二十三年朝鮮の官吏防穀令を出して我が商人に大損害を被らせ、又廿七年五月朝鮮政府は刺客を遣し我国に亡命中の金玉均を誘い出して暗殺せめ、清国亦之を援ける等我国を蔑にした行多く為に我同胞大に憤った。偶々此年三月頃から朝鮮南部に政府の悪政を怨める東学党の乱起り勢強く、朝鮮政府は自ら之を定め得な

い為め清国はその求めに應じて兵を牙山に出し、我に通牒したので、我又兵を出し之を清に通じた。

やがて東学党の乱平いだ後、我国は清国と共に朝鮮の内政を改革し以て東洋平和の維持に力めようと提議したが、清国之を斥け朝鮮を属邦視し却って我が撤兵を要求し、益々大兵を送って我を威圧したのでこゝに両国の国交破れ、七月廿五日我軍艦は豊島沖で清国軍艦の発砲に應戦して之を破り、陸軍は朝鮮の要めに應じ清兵を戍歓、牙山に破った。天皇八月一日戦を宣し九月十五日大本営を廣島に進め給うた。これから日清両軍各地に戦うに至った。

▲ 行け男兒　遼東の野の　露分けて……1894

威張る支那国　行き討て男の子　龍の旗影　仆すまで…1894

(年記)

仝年④ 平壌陥る、黄海の戦 ⑪ 旅順陥落

1895(明治28) ② 威海衛占領、北洋艦隊降る ③ 牛莊、営口、澎湖島占領

1895年　下関条約成る(明治28年4月)

(日清戦争終る)

明治廿七年九月、中将野津道貫平壌を陥れて清兵を攘い、中将伊東祐亨は清の北洋水師を黄海に破った。十月司令官大将山縣有朋の率いる第一軍は満洲に入り、大将大山巌の第二軍は、遼東半島に上陸し、海軍と力を協せて十一月旅順口を陥れ、此年二月威海衛を陥れて北洋水師を全滅させた。

やがて第一軍と第二軍の一部と合して遂に北京を衝かんとし又陸海軍の一枝隊は澎湖島を占領した。

仍て清国遂に屈し、李鴻章を全権大臣として来って和を請わしめた。　我邦は首相伊藤博文外相陸奥宗光をしてこれと下関に会せしめ、四月遂に和議成立した。

(1) 清国は朝鮮の独立を認めること.

(2) 償金二億両(約三億円)を拂うこと

(3) 遼東半島、台湾、澎湖島を日本に譲ること

(4) 沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開くこと

等の条約を結んだ。之を下関条約と云う。

▲ 宿帳に　李と書き桑代　二億両…1895

威張りちらして　やられた支那が　李氏をおこして　泣いて来る…1895

(附記)

1. 遼東還附

露国は日本が遼東を領有するは、自国の東方経営に不利なりとし、独、佛二国を誘らい、日本にその還附を勧告した。

我国内外の情勢に鑑みやむなくその勧告を容れ、十一月之を清国に還し代償三千万両(約四千五百万円)を收めた。

2. 台湾平定

下関条約により我邦に帰した台湾は清の留将劉永福

が台南に拠り、匪徒之に應じ服從を拒んだので、北白川宮能久親王親しく征せられ明治廿九年四月全島平定した。しかし宮は此地に薨じ給うた。

三十年總督府をおき鋭意同島の経営をはかり翌年兒玉源太郎總督となり治績をあげた。

〔年記〕

1895（明治28）㊀ 露独仏の遼東還附勧告 ㊁ 日露条約改正
⑯ 能久親王薨去 ⑪ 遼東還附
1896（〃 29）① 台湾土匪起る ③ 台湾平定
1897（〃 30）① 英照皇太后崩 ⑧ 後藤象二郎歿 ⑩ 朝鮮韓と改称
1899（〃 32）① 勝安芳死 ⑦ 内地雜居

1900年 北清事変起る（明治33年6月—12月）

日清戦役の結果清国はその勢力のない事を暴露したので、列国競って之を圧迫し種々なる利権を得た。即ち佛国は広東、広西、雲南の鉱山採掘権と広州湾租借権を得、露国は東清鉄道の敷設権と旅順大連の租借権を得、独逸は膠州湾を租借し、英国は威海衛を租借した。

斯うして支那は各国に利権を得られ、分割の説さえ行われたので、一部の志士大いに憤り不平の徒満ち遂に明治三十二年義和團の徒山東に起り、扶清滅洋を標榜して外国の宣教師を襲い、基督教会堂を毀ち、三十三年天津の外人居留地を犯し、宮兵も加って北京の列国公使館を囲み、独逸公使ケットレル、我が書記生杉山彬等を殺した。我国軍により、中將山口素臣第五師團の兵を率いて清に赴き、列国の兵と聯合軍を組織し、太沽、天津を陥れ八月北京に入って罪を問うた。

清国屈し遂に慶親王及李鴻章をして和を列国に乞わしめ

(1) 清国は日独両国に謝罪使を出す

(2) 首謀者を罰する

(3) 償金四億五千万両を出す（三十ヶ年賦）

等を約して此年十二月和議成立した。

▲ 列国は　我を主力に　わっと立ち…1900

荒れる和團に　聯合軍は　我れを力に　湧いて起つ…1900

〔年記〕

1900 ⑫ 仝上講和成る
1901（明治34）② 福沢諭吉歿

1902年 日英同盟成る（明治35年1月）

露国は北清事変の際、鉄道守備を名として満洲に出兵し、清国と密約を結んで、満洲占領の野心を遂げようとした。仍て我邦は英米両国と共に清国に警告し、露国に抗議したが、露国の侵略は此後益々募るばかりであった。

英国は日清戦後我の実力を認め、三十三年の事変には進んで日本の出兵を乞うた。しかも今や英国の支那に於ける商業上の利益が露国の為に犯されようとするを見て

彼は今迄長くその主義とした光栄の孤立をすてゝ我邦と同盟を望み、我亦夙に東洋平和の為に心を決し、遂に此年東西の両帝国は同盟を結ぶに至った。その条約

(1) 清韓の領土を保全し

(2) 他の二国以上が聯合して東洋で、同盟国の一方と戦う時は他の一方は之を援ける事を約しその効力を五ヶ年とした。

これ第一次の日英防禦同盟でその後屢々改訂された。

▲ 両国が　和平の為に　氣を協せ----1902

アジヤの平和を　両手にさげ　笑い交すよ　国と国----1902

(附記)

1. 日英同盟の成行

(ア) 第二次盟約---- 1905 (明治廿八年八月)

ポーツマス会議の進行中、両国は同盟条約を拡張し、東亜及び印度に於ける、両国の領土権を守りその利益を保護する為互に相援くべきを約した。

(イ) 第三次盟約---- 1911 (明治44年7月)

英米両国間に仲裁裁判条約成立の為、此年さきの同盟を改め両国中の一国が他国と仲裁条約を結んだ際の規定を追加し十ヶ年を有効期とした。

(ウ) 日英同盟の廃棄----1921 (大正10年11月)

世界大戦後、ワシントン会議の結果、日英同盟は消滅する事となった。

2. 日佛協約----1907 (明治40年6月)

日露戦役の際、佛国は同盟国の情誼上、陰に露国を助け、日佛の感情円満を欠く嫌があったらで、両国は此年協約を結び、情誼を厚うした。

3. 日露協約

四十年七月露国とも情誼の為協約を結び、更に四十三年その効用を拡げて日露新協約を結んだ。

4. 日米覚書の交換----1908 (明治41年11月)

米国に於て排日運動盛に起ったので我国は此年米国と覚書を交換し、

(ア) 太平洋に於ける両国商業の自由平隔なる発達を希望し

(イ) 各自の領土尊重

(ウ) 清国の独立及領土を保全し且つ同国に於ける商工業の機会均等を擁護すべきを約した。

(年記)

1904 (明治37) ② 旅順及仁川の戦

1904年　日露戦役起る (明治37年2月)

日英同盟の成立を見て露国は満州より徹兵する事を列国に宣言したが、明治三十六年のその期に至っても之を実行せず、却って益々兵を送り、旅順口の要塞を修め、軍艦を増派し、アレキシェーフを極東大総督として同年八月更に朝鮮の北境鴨緑江沿岸を占領した。

我邦は露国と会商すること半年、大に譲歩したにも拘らず、露は我が小を侮って之に應じないので、日本は自国の保全と東洋平和の為に、此年二月六日国交を絶ち、十日宣戦の大詔が下った。

さきに我国が日清戦争と云う高い價を拂って得た遼東半島を東洋の平和に害ありとして還附せしめながら、而も自ら此の間に利を漁り、今や東洋の平和を已に破らん

とする露国に向って戦う事は日本の以て天命とした処である。

▲ 露の不義を 我は懲らさん 天に代り----1904

悪を伐て伐て 露の不義懲らせ 我に降魔の 剣あり----1904

（附記）

日露の戦況

1. 海上権の取得　海軍中将 東郷平八郎の率いる聯合艦隊の分遣隊は二月九日敵艦を仁川港に破り、同日 本隊も亦敵艦を旅順に襲撃した。その敵艦を旅順港内に圧した。又八月には 中将上村彦之丞の第二艦隊が、浦塩斯徳の敵艦を蔚山沖で撃破した。

2. 陸軍の進撃

第一軍（黒木為楨）鴨緑江を渡り九連城、鳳凰城 占領

第二軍（奥保鞏）塩大澳上陸、南山、得利寺に勝つ

第四軍（野津道貫）大孤山上陸、析木城占領

これより三軍並んで進み、やがて 大山巌、満洲軍総司令官に 兒玉源太郎 総参謀長に任ぜられ、遼陽、沙河をとり奉天に迫った。

3. 旅順の開城

乃木希典の率いる第三軍は旅順口を囲み、海軍と協力して苦戦約半年、十一月末二百三高地を占領して敵の死命を制し、露の守将ステッセルは遂に廿八年元旦降って開城した。

4. 奉天の大戦

時に露将 クロパトキンは六十万の大軍を以て奉天を守ったが、明治廿八年二月下旬 我軍は新に第三軍及鴨緑江軍（川村景明）を加えて総兵四十万 進んで奉天に迫り三方から合撃し、激戦十四日、大いに敵軍を破り、三月十日全く奉天を陥れ、ついで鉄嶺、開原、昌図を取った。

5. 日本海大海戦

露国は東洋艦隊既に破れた為 1904年末局面の大展開をなさんとして [illegible]

之が約半年後の五月（1905）対馬海に現れたので、東郷大将、聯合艦隊を指揮して迎え撃ち、廿七、八両日に亘り殆ど之を全滅し、世界海戦史上空前の大勝を得、敵の司令長官、ロゼストウエンスキーを虜にした。

6. 樺太占領

我が陸軍の別働隊は 此年七月樺太全島を平げた。

（年記）

1904 ⑥ 鴨山の戦 ⑤ 得利寺の戦 ⑧ 黄海及蔚山の戦 ⑦ 遼陽占領 ⑩ 沙河会戦 ⑪ 203高地占領

1905（明治38）① 旅順開城 ③ 奉天の戦 ⑤ 日本海大海戦 ⑫ 樺太占領 ③ 日英同盟拡張

1905年 ポーツマス条約成る（明治38年9月）

（日露戦役終る）

日露の戦、既に大勢の定まるを見て、米国大統領ルーズベルト（Roosevelt）は、両国の間に平和を斡旋したので、遂にその勧告を容れ、我国は外務大臣 小村寿太郎駐米公使 高平小五郎を全権委員とし、合衆国のポーツマス（Portsmouth）に於て、露国の全権委員ウイッテ（Witte）ローゼン（Rosen）等と会議せしめ、此年九月五日和約を結んだ。

(1) 露国は、韓国に於ける日本の宗主権を認める

(2) 樺太の南半を日本に割く

(3) 関東州の租借権を譲る

(4) 長春以南の東清鉄道を日本に譲る

(5) 満洲から撤兵す

等の条約を定めた。之をポーツマス条約と云う。

▲ ルーズ氏を　和合の神に　仲直り……1905

雨がとりもつ　ローズを仲に　我とロシヤの　仲直り……1905

（附記）

1. 戦後の経営

(ア) 日露戦役の結果我国は世界一等国の列に入り、八大強国の一と呼ばれ、之等の間に互に大使を交換して益々親交をはかった。

(イ) 租借地の経営

明治三十九年、関東州に都督府を開き、旅順に鎮守府を置き、又南満洲鉄道会社を設けて、鉄道、水運、採鉱の業を経営せしめ、ついで大連港を列国に開いて満洲の門戸を開放した。

(ウ) 樺太の経営

樺太には明治三十八年民政署を設けて治めたが四十年之を廃し樺太廳を置いた。

(エ) 韓国の保護

（年記）

1905 ⑪ 日韓協約成る ⑫ 統監府を韓国におく

1906（明治39） ⑬ 日本エスペラント協会成る ⑭ 関東都督府設置 ⑮ 旅順に鎮守府をおく

1907（仝 40） ⑯ 樺太廳設置 ⑰ 日仏協約成る ⑱ 日韓新協約成る、日露協約成る

1908（仝 41） ⑲ 日米仲裁々判条約成る ⑳ 戊申詔書下る ㉑ 米国と外交文書交換、野津道貫、板本武揚死

1909（仝 42） ㉒ 私立学校令下る ㉓ 伊藤博文殺さる

1910年 韓国併合条約成る（明治43年8月）

日露戦争の後韓国は我が保護国となり、日本はその外交権を收め、統監府を京城に置き伊藤博文を新に統監に任じて鋭意韓国の施設の改善に努めた。此後明治四十年には和蘭ハーグの万国平和会議密使事件により韓皇帝李熙は位を皇太子李坧に譲り、伊藤統監は韓政府と議し、その内政指導に当った。ついで四十二年、統監曽根荒助の時韓国司法権を我に收め韓人をして頼るあらしめた。斯くて両国益々親密を加えたが、是に韓国の事情を察するに、日韓両国の併合は相互の幸福、東洋平和の道だと知り、殊に四十二年伊藤博文が韓人の為にハルビンに斃れて以来、併合の議起り、韓の一進会員は連署して、日韓合邦建白書を日韓政府に出った。

遂に此年八月、時の統監寺内正毅は韓国總理大臣李完用と会し、併合条約成り、廿九日合併の大詔下り、韓国の統治権は一切日本の天皇に帰した。実に李氏の建国より五百十八年である。ついで前韓皇帝の親族を遇するに皇族の例を以てし又功労のあった人々に華族の礼遇を賜り、韓国を朝鮮と改め、總督府を京城に置き寺内正毅を總督に任じて諸般の政務を執らしめられた。

▲ 李の国を　併せて歓呼　湧き上り……1910

愛に手を引き　李朝の国を　併せ世に出す　我が日本……1910

1912年 明治大帝崩御（明治45年7月）

日本開闢以来 明治天皇の御代位、花々しい発展をした時代はあるまい。その初めは幕末の長い眠の暗に出て、それから五十年に満たない短時日の間に、内には憲政布かれ法典整い、教育普及し、文化興り、交通殖産の業振い、外には条約の改正を遂げ、日清日露の二大戦役に勝って国威を輝かし、韓国の併合によって日韓二千年来の問題を解決し、東洋の盟主となり、世界の一等国として光の出づる東方に万丈の氣を吐いたのゝ帝の御代に更生の若い日本であるのだ。これ実に上天皇の御稜威と、下万民の心を一にして我が君国に尽した結果に外ならない。

天何ぞ、明治四十五年七月廿日大帝御重患の旨が傳えられると国民挙って嘆き悲み、宮城前を文月の熱い砂上にひれ伏して老若男女数しれず御平癒を祈り、殊に廿八日御急変と聞いて幾万の赤子は二重橋前を去らず、夜を徹してその御命運の恙なからん事を祈って止まなかった。

然るにその甲斐なく此年七月三十日 聖寿 六十一を以て遂に神去りました。

かくて全国に飛んだ悲報、大内山をこめた愁いの雲、聖代の幕は閉じて世は喪の黒に悲んだ。

想い出さるゝ者者御いたつきの前十日、大帝が大学行幸の砌を途に拜して その万歳を寿ぎ奉り、御不例の由を聞いては多数国民と共に二重橋畔に御平安を祈った身のあわれ今更の悲涙をとゞめ得なかった事を。

▲ 霊(レイ)を泣く 青人草に 雲の峰……1912

大き帝の 霊呼ぶ子等に 憂きは漂う 雲の峰……1912

〔年記〕

1912 ⑦ 明治大帝大葬（桃山陵）、乃木希典夫妻殉死
（仝年2月支那は 清亡んで 中華民国となる）
1913（大正2）⑩ 支那共和国承認、桂太郎死 ⑪ 徳川慶喜死
1914（仝 3）④ 昭憲皇太后崩御

1914年 世界大戦起る（大正3年7月）
（日独戦争＝8月）

大正三年七月廿八日、墺太利、セルビヤの争から欧洲の均勢破れ、世界大戦乱の勃発となった。

日本は日英同盟の誼を重んじ、又東洋平和の為、露佛英を助けて、八月廿三日独逸に対して宣戦し、又墺国との国交断絶した。仝月海軍中将加藤定吉は膠州湾を封鎖し、陸軍中將神尾光臣は第十八師團を率いて背面から青島を攻撃した。遂に十一月七日敵の守將 ワルデック（Waldecke）以下降り、我軍全く膠州湾を占領した。又海軍は、此頃南洋に出没して暴威を振っていた独逸海軍を撃って此年十月独領のマリヤナ、カロリン、マーシャル、パラウ

等の群島を占領した。後、英艦隊と協力して、印度洋、太平洋の敵艦を全滅せしめ、大正六年更に地中海に出動して聯合国の運送船、商船保護に当り、勇敢沈着に使命を果した。

▲ 六合(リクゴウ)に　うずまき起る　開の声……1914

因果めぐって　六合ゆらぎ　命渦巻く　土の業……1914

(附記)

1. 日支交渉、日支条約

明治45年支那に革命起り、清亡び中華民国(支那共和国)を建て、袁世凱選ばれて大總統となつた。その後我国は彼と協商すべき必要起り、遂に大正4年5月支那政府と条約を結んだ。

(1) 関東州の租借権を露国設定の年より通算して九十九ヶ年に延長すること。

(2) 南満洲、東蒙古、山東省に於ける我が特殊の利権を認めること

等を定めた。

2. 日露交渉

(ア) 日露新協商　世界大戦にあたり、我国は露国に対し、軍事上多大の援助を與え、日露の国交親密となり、大正五年七月、新協約を結んで極東に於る相互の領土、利権を尊重し、互に協力すべきを約した。

(イ) シベリヤ出兵　然るに其後露国に革命起り、ロマノフ王朝絶え、過激派が暴威を振ったので、我国はチェックスロバック軍の退却を護り、又居留民保護の為に米国と協同して、大正七年東部シベリヤに出兵、九年には沿海州の過激軍の武装を解かしめた。

(年記)

1914 ⑧ 日独、日墺国交断絶 ⑩ ヤルート島占領 ⑪ 青島占領

1915 (大正4) ⑤ 日支条約成る ⑪ 大正帝即位礼

1916 (大5) ⑦ 日露協約成る ⑫ 大山巌死

1917 (大6) ⑪ 日米共同宣言 ○この年日本艦隊地中海出動

1918 (大7) ⑧ 我軍浦塩に向う ⑪ 世界大戦休戦条約成る

1919年　世界大戦終る(大正8年6月)
(巴里の講和)

大戦の遂行と共に聯合軍漸次優勢となり、又国内の革命等の為に独墺軍力遂に屈して、大正七年十一月十一日休戦条約を結ぶに至った。

依て関係列国は此年一月十八日、佛国のベルサイユ宮殿に講和会議を開き、我国は大使西園寺公望、副使牧野伸顕以下を遣し、英佛米伊の四国を始め、廿六ヶ国の委員と共に和議をはからしめ、六月廿八日条約の調印を了った。

此の講和会議は、独、墺土等の敵方諸国に対して議定したばかりでなく、将来の世界平和の為に国際聯盟、労働者保護の為に労働条約等をも規定した。

▲ 乱暴て　新たに見えし　黎明の……1919

今は世界の　乱離も止んで　新しい世の　霊が浮く…1919

(附記)

1. 大戦和約による我が利権

(1) 支那山東省に於ける独逸の全利権を我国に得た(膠州湾租借地は支那に返す)

(2) 南洋のマリヤナ、カロリン、マーシャル、パラウ等諸群島の委任統治権を得た。

2. ワシントン会議 ----1921（大正10年11月一　）

此の会議は大正十年十一月十一日から、米国のワシントン府に開かれ、世界主要国の殆ど全部から各代表議員が参列し、我邦からは、加藤友三郎、徳川家達等が選された。商議の重要事項は、軍備制限問題と之に関係した太平洋問題、極東問題等で、我邦は英米仏と共に世界四大国として協議した。

此の会議で日英同盟をすてた事は、其項に説いた如くである。

（年記）

1919 ⑦ 板垣退助死　⑪ 寺内正毅死

1920（大正9）① 世界平和克復の詔下る　⑤ 尼港事件　⑦ 樺太北部及沿海州占領　⑪ 明治神宮成る

1921年　ワシントン会議（大正10年11月）

▲ 類をもて　国が集る　アメの国---1921

あとの為にと　類呼び交し　会議開いた　アメの国----1921

全年、　日英同盟を止む　○ 皇太子摂政

1922（大正11）

1923（仝 12）

1924（仝 13）

1925（仝 14）

1926（仝 15）

1927（昭和2）

本文　第二　東洋史の部

第一史期

○ 東洋史のみおもと

支那の黄河流域と、印度の恒河流域とは東洋文化の二大発源地であるが、殊に支那の文化と勢力は東洋諸国に大きな影響を與えた。

支那文化を開いた漢民族は先ず黄河の沿岸に拠り、次第に四方の異民族を征服して勢を得、一統の国家を建て可なり高い文化を有って居た。　傳えによると太古、三皇（燧人・伏羲・神農）　五帝（黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜）などが出て四方を平げ・諸種の事業を起し支那文化の基を開いたとの事であるが、どの国でも太古の事は詳でないように、三皇・五帝の事蹟も漠然として居て、学者の間にはこれ等は実在の人物ではなく、後に起った三才説、五行説などが上代に反映して斯る架空的人物を創造したのだとも云われて居る。

三皇五帝に次で　夏・殷・周三代の世となった。夏は黄河の洪水を治めた禹王に起って十七代、暴虐なる桀王に及んで殷に滅されし、　殷（初は商と号す）は湯王に起って

廿八代を経、暴戾ある紂王に至って遂に周の武王の為に滅された。

前1122年頃　周の武王の建国

周は堯・舜時代の名臣棄（キ）の後と云う。昌（文王）の時、西伯となり深く諸侯の望を得、天下の三分の二を保ったが、其子発（武王）嗣ぐに及んで、太公望呂尚の計を用い紂王を討ち殷に代って王となり、此年鎬京（陝西省長安）に都して国を周と号し、一族功臣に土地を分って諸侯とし封建制を立てた。箕子を朝鮮に封じたのも此頃の事である。

● 殷を亡ぼし　鎬京（コウケイ）に周　国を建て……前1122

因果身の影　殷紂亡び　こゝに武王の　国が建つ……前1122

（附記）

1. 革命放伐

殷は夏を滅し、周は殷を奪った。これ革命である放伐である。凡て不徳の君が出ると、賢徳の人伐って之に代ることを憚らないのが支那人の思想である。我が国体と同日に語ることができぬ。

2. 伯夷・叔斉

武王が周を伐とうとした時、臣を以て君を弑するの不可を説き、諫めてきかれず、殷亡ぶに及び周の粟を食うを恥じ、首陽山に隠れて蕨を食い遂に餓死したと云う。

3. 周公の摂政

武王死んで子成王幼く、叔父周公（旦）政を摂し制度を整え・教化を興して国家の体制備り・泰平久しく文化進み別に都を洛邑に営み東都と云った。

かくて武王から成王を経、康王まで約七八十年の間は周甚だ盛であった。

前770年　周の平王の東遷

成王及びその子康王の世は周室栄えたが、其後外民族の侵入の為に勢漸く衰え、宣王（康王から七世）に至って蛮夷を退け、諸侯を従え周室中興した。

其子幽王無道にして褒姒を寵し、政を顧みなかったので諸侯離反し、遂に西戎の犬戎に攻め殺された。

その子平王、諸侯に推されて王位に登ったが、犬戎の難を避けて都を洛邑（河南洛陽）に遷した。之を周の東遷と云い、これから周室東西に分れた。　平王の後を東周と云う。建国から三百五十余年後のことである。

● 道の小草も　又洛邑を　わびしげに……前770

（注意）紀元前の年代句には皆「前の歴」と附けるのだが便宜上省いてある。

（附記）

春秋の五覇

周の東遷以後凡そ三百十余年間を春秋の世と云う。此間は周室衰え、外族が侵入したので、諸侯の中の強大なるものが王に代って諸侯に号令した。之を覇者と云い、斉の桓公・晋の文公・楚の荘王・呉王夫差・越王勾践を春秋の五覇と云う。

〔年記〕

前645（周、襄王7）管仲死す
前636（仝、仝　16）② 晋文公立つ

前632年　城濮の戦（周襄王20年4月）
（晋の覇業成る）

斉の桓公は名相管仲を用い国富み兵強く五覇の第一とふったが、管仲・桓公相次で死に覇業衰え、桓公の死後楚は頻りに諸侯を脅し、晋の文公出でゝ此年大に楚を城濮に破り、勢盛んにして又中国を統べ、子孫よく遺業をつぎ、此後百余年間の覇を唱えた。

◉ 覇権は晋に　楚は城濮に　勝たずして……前632

〔年記〕

前613（周、項王6）楚荘王立つ
前606（仝、定王1）楚の荘王、周の鼎の軽重を問う
前565（仝　灵王7）釈迦　印度に生る
前552（仝　仝20）⑪孔子魯に生る
前494（仝　敬王26）呉王夫差、越王勾践を会稽山に降す
（呉の覇業成る）

前485年　釈迦入滅す（周、敬王35年）

古代印度には、僧族（ブラーマン）・王族（クシャトリヤ）・平民（ワイシャ）・奴隷（スードラ）の四種姓があり此中僧族専横を極め、他の三種姓の者はその圧制に苦んで居た。宗教は婆羅門教であったが、紀元前565年、釈迦が生れて清新の教を始めた。彼は中印度の迦毘羅（カピラ）城主浄飯（ジョウバン）王の子で名を喬答摩悉達多（ゴウタマシッダルタ）と云い又釈迦牟尼と呼ばれる。夙に社会の腐敗と人生の無常とを感じて衆生済度の心を起し廿九才の時出家して山に入り、修養六年佛陀伽耶に大悟し遂に佛教を開き、一切平等を唱えて布教すること四十五年、帰依する者頗る多くその教は次第に諸方に傳った。此年八十歳で死んだ。

◉ 地の御光を　世に布き釈迦の　入滅し……前485

（附記）

1. 佛典結集

釈迦入滅後弟子等相集って、その遺教を議定した。之を佛典結集と云う。其後百年乃至二の結集が行われた。

2. 阿育王と迦膩色迦王

釈迦滅後凡250年、印度摩迦陀国に阿育王が出て熱心に仏教を弘めたが、仝王死後凡300年大月氏国に迦膩色迦王が出て又大に仝教を興した。

後漢の明帝の時支那に傳り、その後凡300年朝鮮に傳り更にその後凡180年、紀元552年欽明天皇の朝に日本に傳った。

前479年　孔子死す（周、敬王41年4月）

周代は文化開け、官制備り、教育行われて学校の設もあり、その教科は礼・楽・射・御・書・数の六藝であった。紀元前552年、支那魯の国に孔子生れて仁義を説き儒教の基を開いた。

孔子名は丘、字は仲尼、学徳高く初め魯の定公に仕え、後辞して諸国を巡り、諸侯に修身治国の道を説き、世の乱を済わんとしたが用いられず、退いて弟子を教育し、又

春秋等の書を著した。

此年、七十四歳を以て没したが弟子三千人各々道を傳え、殊に戦国の世に孟子・荀子等が出て益々その学を弘めた。　孔子の教は実に支那政教の基を為すばかりでなく、釈迦・耶蘇・ソクラテス等と共に四聖と呼ばれて世界の人々を感化して居る。

◉ 照りも光輝く　道の燈明(アカリ)の　魯に消えて……前479

（附記）

1. 論語は孔子の門人や時の人々との問答を編み記した本で、永く偉人の言行を後世に傳えて居る。

（年記）

前473（周・元王3）⑪ 越、呉を滅し夫差自殺す

周代の制度及学術

1. 周代の制度

(ア) 官制

○ 天子の顧問として三公（大師・太傅・太保）三孤（少師・少傅・少保）あり之は常置の官でない。

○ 中央政府の六官
- 天官……長官ハ 大冢宰(チョウサイ)……庶政總理
- 地官……〃……大司徒……民治教育
- 春官……〃……大宗伯……祭祀礼楽
- 夏官……〃……大司馬……軍事
- 秋官……〃……大司寇……刑罰
- 冬官……〃……大司空……殖産工業

(イ) 田制（夏・殷・周）

夏の世には貢法として田五十畝を一家に授け、十家を一組とし一家各五畝の收穫を上納す

殷の世には助法として井田の法を行い各七十畝を井字に区分し、中央の一区を公田として八家にて耕作し公田の收穫を上納す

周の世には徹法と云い、井田法と貢法とを併用したが、九百畝を一井とし一家各百畝を受持った。

(ウ) 税法

粟米の征（米穀上納）　力役の征（土木労役）布縷の征（織布上納）があり、之が租・庸・調の起原をなした。

(エ) 封建政治

当時九州あり　中央の一州を王畿と称して直轄地、他の八州に八伯あって一族功臣を封じ、公侯伯子男の五爵を設けた。
尚舜時代と同じく巡狩・朝覲等も行われた。

(オ) 刑法

墨・劓・剕・宮・大辟の五刑、此外刖(ゲツ)・髡(コン)・徒・贖等あり又情により宥恕・減刑の恩典あり。

(カ) 兵制

服役年限は20才から60才まで、平時は耕し、一年数回演習す、軍隊は　伍（5人）　両（25人）　卒（100人）　旅（500人）　師（2500人）　軍（12,500人）にて編制。
諸侯は三軍乃至一軍を出し天子は兵車百乗を有つ

(キ) 学制

学校には大学（辟雍）と小学（庠序）とあり。　大学は貴族・官吏の子弟及貢士入学し、礼・楽・射・御・書・数の六藝修学、小学は人民の子弟を入れ簡易な学科及作法を教ゆ。

2. 周末の学者

(ア) 儒家 ― 孔子・孟子・荀子

(イ) 道家 ― 老子・荘子

(ウ) 諸子百家
- 墨翟(ボクテキ)（兼愛説）楊朱（自愛説）
- 法家 ― 申不害・商鞅・韓非子
- 兵家 ― 孫子・呉子
- 名家 ― 恵子・公孫龍

前465年　越王勾践死す（周、貞定王4年）
（覇業衰う）

城濮の戦の後三十五年、楚の荘王は晋を破って一時覇を唱えたが、後に呉王闔閭は之を破って勢振い覇を唱え、やがて越王勾践と戦って敗死した。其子夫差遺命を守って臥薪の苦を嘗め、遂に勾践を会稽山に囲んで之を降し中国に入って覇となった。　然るに越王勾践は范蠡の謀を用い、嘗膽の苦を忍んで兵を練り国力を養い、遂に呉王夫差を滅して会稽の恥を雪ぎ、次で北上して中国の諸侯に号令した。　然るに此年勾践死んで遂に楚に侵せられてからは覇業急に衰え又覇を唱える者ふくかった。

● 薪も膽も　覇者の命も　長からで……前465

（年記）

前425　周の威烈王の即位

前403年　戦国の世始まる（周、威烈王23年）

春秋の後、即ち周の威烈王の廿三年から秦の一統に至るまで、百八十二年間を戦国の世と云う。　春秋時代には周室猶幾分の尊厳を保って居たが、此の時代には周の勢は全く衰え、たゞ洛邑附近に介在する一小諸侯にすぎぬ有様となった。そして春秋時代の諸侯は概ね衰亡し、たゞ秦・楚・燕・斉・韓・魏・趙の七国のみ強大であった。故に世に之を戦国の七雄と云う。

之等群雄は自ら王と称し、互にその勢を争い、弱肉強食の姿となって戦はその後、百八十二年間続き続いた。

● 続くよ戦　わけふく弥に　それからは……前403
（182）

（附記）

三晋と斉

七雄の中、韓・魏・趙はもと晋の臣下であったが主家を分割して各独立したから之を三晋とも云う。又斉はもとの斉の臣、田氏が主家を簒って建てた国である。

（年記）

前386（周、安王16）田和、斉侯となる
前372（仝　烈王4）此頃孟子生る

前361年　商鞅、富国強兵術を説く（周、顕王8年）

● 秦に商氏が　富強の術を　教え説く……前361

前341（周、顕王28）馬陵の戦

前333年　蘇秦の合縦策成る（周、顕王36年）

戦国の七雄中、秦は函谷関を門戸として西方険悪の地に拠り、以前既に強かったが諸侯からは戎狄を以て遇せられた。　戦国の初に孝公立って之を慨き、商鞅を用いて富国強兵の策を講じ、国力急に強大となり、遂には他の六国を圧しようとしたので、こゝに蘇秦が出て合縦の策を唱え　諸侯を遊説し、先ず燕に説き、趙を服し、更

に韓・魏・斉・楚に説いて諸国皆之に従い、此年合従の策成り、蘇秦は従約の長として六国の相を兼ねた。

合従とは六国が南北に相結んで秦に当ろうとするの謂である。

● 舌三寸で　蘇秦合従の　策を成し……前333

(附記)

蘇秦

洛陽の人、鬼谷先生について縱横の術を学び、秦に遊説して用いられず困窮して家に帰ると、妻機を下らず嫂為に炊がず頗る冷遇したので秦発奮し、合従の策を立て六国を説き之が相印を帯びて郷里に帰った。車騎盛美王者の如くであったから一族畏れて仰ぎ見る者もあった。

彼嘆じて曰く「これ一人の身、富貴あれば親戚之を畏懼し貧賤あれば軽易す況んや衆人をや。我に洛陽負郭(附近)の田二頃あらしめば、豈能く六国の相印を佩びんや」と。

合従成って後秦兵恐れて函谷関を出ぬこと十五年、やがて秦の離間策により従約破れ、蘇秦また刺客に仆れた。

前311年　張儀連衡の計を成す(周、赧王4年)

蘇秦の合従が破れてから二十一年、その友張儀は連衡の策を立て、得意の智弁を振って先ず魏に説いて秦と和せしめ、次で他の五国を歴遊して秦と連和せしめた。

連衡とは六国横に連合して秦に仕えるを云うのである。

● 舌三寸で　上げ下げ張儀　うまくやり……前311

(附記)

張儀

張儀は魏の人、蘇秦と同じく鬼谷子に就いて縱横の術を学んだ。

蘇秦の合従が破れると、秦の惠文王に仕えて連衡の策を立て、六国を秦と連和させた。惠文王の死後出で、魏に仕え、連衡も亦破れ諸侯は再び合従するに至った。

(年記)

前289年　孟子死す(周、赧王26年)

● 孔子の儒説を　世に説き孟子の　昇は逝く……前289

前279(周、赧王36)即墨城の戦

前269年　阿育王(阿輸迦)即位(周、赧王46年)

● こゝに阿輸迦が　佛ひろめの　喇叭ふき……前269

前256年　秦周を滅す(周、赧王59年)

(周代867年間)

蘇秦・張儀が弁舌により栄達してから、縱横の策を唱える者多く、六国は之に惑って或は合従し或は連衡し、一定の方針なく国々は次第に弱って来た。

秦の荘襄王は之に乗じ范雎の説に従い、遠交近攻の策を用いて益々諸侯を弱めたから周の赧王大に恐れ、密に六国と共に秦を討とうと計り却って秦に攻められ、此年遂に亡んだ。実に周武王の建国から三十七代八百六十七年である。

● 剣(ケン)は喘げり　乗りとる秦に　滅ぶ周……前256

(附記)

此時亡んだのは西周であって、東周は此後七年経って滅された。

第二史期

前221年　秦王政(始皇帝)天下を一統す

荘襄王に次で立った秦王政は李斯(リシ)の策を用いて先ず六国の君臣を離間し然る後之を攻め、十年の間に韓・趙・魏・楚・燕・斉の六国を滅し、此年中国一統の業を遂げ咸陽に都した。そして自ら徳は三皇を兼ね功は五帝に過ぐとて皇帝と称し又古来の諡号を廃し、万代の始王の意を以て始皇帝と云い、二世三世を全て万世に傳えようとした。

此頃漢人の領土大に拡まり、黄河・揚子江二大河の流域を包含し、今日の支那本部の大部分はその治下に帰した。斯して秦の国威は遠く四方に振い、諸外国は秦を訛ってシナと呼び、遂に支那と云う国名となった。

始皇帝内は政治を改め、封建を廃して郡県制を布き、禍乱の源を絶つ為に兵器を收め、挾書の禁を為して、医・卜・農の書の外は悉く之を焼き、咸陽に儒生四百六十余人を坑にした。尚土木を起し壮麗なる阿房宮を渭水の畔に造った。又外は将軍蒙恬(モウテン)をして匈奴を討たしめ万里の長城を増築し、南征して安南に及んだ。

● 国々六つ　蹴って始皇が　一統し……前221

(附記)

始皇の暦と太初暦

秦始皇帝即位から後は十月を歳首とした。漢も亦之に倣ったが、漢武帝の太初元年(104年)太初暦を作り次年から又正月を歳首とした。

前215年　万里の長城を築く(秦始皇帝32年)

將軍蒙恬は秦始皇帝に仕え、楚・斉を破って勲功を樹てた。此年、命により三十万の大軍を率いて匈奴を伐ち、河南の地を取り、臨洮から遼東(奉天附近)に至る延長七百余里の長城を築き(此年起工)以て匈奴を防いだ。

● 勝ちて兜の　緒は蒙恬の　長い城……前215

(附記)

長城の今昔

戦国の時已に秦は北辺に長城を築き、燕・趙も亦之に倣ったが、始皇帝の時之等の長城を修築し連続させて所謂万里の長城としたのである。

現在の長城は大てい明代の修築によるもので東は山海関から西は嘉峪関に至り、秦時のものより南方にかって居るがその規模は実に始皇帝の時定ったのである。

(年記)

前214(秦始皇帝33)　秦、南越を取る
前213(仝　仝　34)　秦、書を焼き挾書律を設く
前212(仝　仝　35)　阿房宮成る、諸生460余人を坑にす
前210(仝　仝　37)　㋐始皇帝死す(年50)李斯は趙高と共に胡亥(二世皇帝)を立て、扶蘇・蒙恬を殺す
前209(仝二世　1)　㋐陳勝・呉広等起兵　㋒劉邦・項梁等起兵
前208(仝　仝　2)　李斯殺さる　○鉅鹿の戦

前206年　秦亡ぶ。漢興る（漢高祖1年10月）

始皇帝の時既に土木・征戦頻りに起り、政治又苛酷であったから人民困苦上を怨み、六国の遺臣又乱を懐った。

先年胡亥立って二世皇帝となったが暗愚にして趙高等政を専にし丞相李斯等を殺し、益々苛政を行ったから、天下大に乱れるに至った。

楚人、陳勝・呉広等先ず蘄に起り、楚人項梁及項籍（項羽）は呉に起って懐王を奉じ、沛人劉邦は沛に起り、其他の群雄各地に競い起った。

依て秦将章邯（カン）等命を受けて東征し趙・魏・斉の乱を平げ、楚軍を破って項梁を殺したが、項羽と鉅鹿に戦って大敗し羽に降った。

項羽勝に乗じ劉邦と路を分って西征したので、趙高は帝を弑し王子嬰を立て三世皇帝としたが間もなく高も殺された。　此時劉邦は嶢関（ギョウ）を破り咸陽に迫ったから、此年十月子嬰出でゝ降り、秦は始皇帝の一統から僅か三代十五年でこゝにたんだ。

● 懐（カイ）王立ちて　わっと上げたる　火の手かな……前206

〔年記〕

前206　㉑ 項羽自ら西楚霸王と称し劉邦を漢王に封ず　⑩鴻門の会

前205（漢高祖2）③ 漢王 項羽を伐つ

前202（〃　〃　5）⑬ 項羽、垓下に敗れ烏江に自殺す

前202年　劉邦天下を一統す（漢高祖5年3月）

（前漢の建国・高祖の即位）

楚の懐王は秦を伐つに当り諸将と約して「先ず関中（函谷関以西）に入る者を王とせん」と云った。　されば劉邦諸将に先って関中に入り自ら王たるべき事を告げ、法三章を約し、秦の苛政を除いた。

項羽は後れて至り鴻門（咸陽の東）に陣し劉邦を除こうとしたから劉邦は張良の謀により自ら項羽の陣に至って陳謝し纔に虎口をのがれた。

項羽はやがて咸陽をとり阿房宮を焼拂って東に帰り、自ら西楚の霸王と称し遂に懐王を殺し彭城（ホウ）（江蘇）に都し、天下の政権を握り劉邦を漢王に封じた。

劉邦は一旦封土に就き、蕭何・張良・韓信を用い機を窺って居たが、やがて兵をあげて項羽と戦い所謂漢楚の争が起った。　攻争四年此間項羽の勇よく劉邦を圧したが劉邦の智よく之を支え、追々項羽の勢力衰えた。依て一度、鴻溝（汴河）を境とし、以西を漢とし以東を楚として和したが、劉邦は張良・陳平等の勧により約に背いて

追撃し、此年羽を垓下（安徽）に囲んだ。羽大に窮し一夜囲を潰し南走して烏江の上に遁れ遂に自殺した。時に年三十一。

項羽亡んで劉邦は即ち天下を一統し、此年帝位に即き、長安（古の鎬京）に都した。これ漢の建国で劉邦を漢高祖と云う。

● 項羽亡びて　我が劉邦は　国を建て……前202

（附記）

漢の三傑

蕭何・張良・韓信を云う。蕭何は相国として政治的経済的手腕を発揮し、張良は謀臣として、韓信は実戦の将として各々劉邦を扶け能く高祖をして帝業を成さしめた。

〔年記〕

前196（漢高祖11）① 呂后、韓信を殺す
前195（〃　12）蕭何投獄 ㊗ 高祖死す（年63）

前194年　衛満、朝鮮王となる（漢惠帝1年）
（箕子の朝鮮亡ぶ）

● 燕の衛満　剣を得て奪う　朝鮮王……前194

前193（漢、惠帝2）㊐ 蕭何死す
前191（〃　〃　4）挟書の禁を解く
前189（〃　〃　6）㊀ 張良死す
前180（〃、少帝弘4）㊐ 呂后死す ㊋ 諸呂反す 周勃・陳平之を誅す
前154（〃　景帝3）① 呉楚七国反す

前154年　周亜夫，五楚七国の乱を平ぐ（漢景帝3年2月）

紀元前195年 漢高祖歿し、惠帝・文帝が相ついで帝位に登った。

文帝は高祖創業の後を受けてよく政に勤め民を憫んだから天下よく治った。偖し此間に諸王は益々専横となり漸く朝命を奉ぜぬようになった。

文帝の子景帝の時、御史太夫鼂錯（チョウソ）が奏して云うに「呉は亡人を集めて乱を為さんとす、今其地を削らば必ず反せん、削らずともまた叛せん、速く削りて禍を小にするに如かず」と。　景帝此の言を用いて諸王に過ある毎にその封土を削って勢を弱めようとした。依て呉王は此年楚・趙・膠西・膠東・菑川（シ）・済南の六国を誘って叛いた。

時に袁盎と云う者鼂錯と悪み、帝に説きて「錯を斬らば諸反皆平ぐべし」と云ったので、帝は錯を殺し盎に呉を諭さしめたが呉王命を奉ぜず、そこで帝は周亜夫に命じ三十六将軍を率い呉を討たせた。

亜夫洛陽に至り呉楚の糧道を絶ち敵の退かんとするを追撃して大に之を破った。それから諸叛皆平ぎ諸王の勢衰え政権、中央に統一せられた。

● 大勢（オウゼイ）の敵　睨（ニラ）みて亜夫が　立上り……前154

〔年記〕

前143（漢、景帝後元1）周亜夫投獄、食せずして死す

前140年　漢武帝の即位（全帝建元1年）
（年号の始）

景帝の後その子武帝立つ、文・景二帝、国力充実の後を受け、而して帝は英邁の天資を以て此の富を利用し、内は大に文教を興し、老荘諸子百家の説を斥け、儒教を以て政教の標準とし、外は古朝鮮を滅し、又匈奴を伐って漠北に逐い、尚張騫を大月氏に遣して西域を威服し、或は烏孫と同盟して匈奴に当るなど頻りに功業を立てた。しかし晩年財政窮乏し租税を重くしたから遂には民力を疲弊せしめた。

尚、武帝の即位に当り、初めて建元と云う年号を立てた。これ東洋に於ける年号の始で、日本最初の年号大化に先つ784年である。

● 一番元に　建てた年号で　わかるなり……前140

〔年記〕

前138（漢武帝、建元3）張騫西域に使す

前126年　張騫西域より還る（漢武帝、元朔3年）

武帝は匈奴を討たんものと、先きに匈奴に逐われて中央アジヤに建国した大月氏国と同盟し、之を夾撃する計を立て、張騫を大月氏国に遣した。然るに張騫は途中で

匈奴に捕えられ留まること十一年、のち逃れて大月氏に往ったが、大月氏は新領土に安んじて復讐の念なく要領を得なかった。彼は帰途再び匈奴に捕えられ一年余を経て此年始めて国に帰った。

斯く張騫が十三ヶ年を費し、苦心惨憺した大旅行も、遂にその目的は達せられなかったが、その復命により西域諸国の人情風俗等始めて漢人に知られ、東西交通の端を開いた事は大なる利益であった。尚張騫は西域の産物なる葡萄・苜蓿・胡麻・柘榴・胡桃等の物産を携えて帰ったと云う。

● あちらの土産は　これだと張騫　話して居……前126

（附記）

張騫のその後

其後張騫は今の四川・雲南の地方から印度に通ずる計画を立てたが成らなかった。しかし又武帝に説いて当時西域で尤も強大なる烏孫と通じ、匈奴を討つ計画を立て自ら使節となり行きて同盟し、功により博望侯に封ぜられた。

〔年記〕

前121（漢武帝、元狩2）霍去病、匈奴の渾邪王を降す
前119（仝　仝　4）衛青・霍去病匈奴を伐つ
前115（仝　元鼎2）均輸を置き郡国の鋳造を禁ず
前111（仝　仝　6）漢の楊僕等、南越及び西南夷を平ぐ

前108年　漢、古朝鮮を滅し四郡とす（漢武帝、元封3年）

古傳説によると殷の滅んだ時、その王族箕子は朝鮮に

赴き、遼河・大同江間に後の所謂古朝鮮国を建て、王険(平壌)に都したと云う。　その子孫相ついで王とふること四十一代、漢初の箕準の時燕人衛満の為に位を簒われ、以後衛氏は箕氏に代って朝鮮王となり、その孫衛右渠屢々漢に抗したから武帝は此年、楊僕等を将として之を討ち滅し、其地に真番・臨屯・楽浪・玄菟の四郡を置いた。

此頃半島の南部には馬韓・辰韓・弁韓の三韓あり、これより漢との関係起り、従ってこれまで三韓と交通し来った我が国人と漢との交通も亦此頃から一部の間に開け始めたと見るべきであろう。

● 燕の衛氏の　我侯懲らす　楊僕等……前108

(年記)

前104(漢武帝、太初1)⑤太初暦を作り次年から正月を歳首とす
前100(〃　天漢1)③蘇武を匈奴に遣す

前97年　司馬遷の史記成る(漢武帝、天漢4年)

● 歴史の支那の　幕を布き……前97

前87(漢武帝、後元2)②霍光を大将軍とす。武帝死す(年71)
前81(漢昭帝、始元6)蘇武匈奴より帰り属国とふる
前68(漢宣帝、地節2)霍光死す

前60年　鄭吉、西域都護とふる(漢宣帝、神爵2年)
(都護府設置)

宣帝の時匈奴は頻りに烏孫を攻めたから、漢は烏孫を援けて匈奴を攻撃し大に之を破ったので之から匈奴衰え、従来匈奴に従って居た西域諸国は皆漢に降った。此年帝は鄭吉を西域都護に任じ、都護府を烏壘城(天山南路)に置き西域三十六ヶ国を監察せしめた。これから匈奴は勢を西域に失い、呼韓邪・郅支の二単于は、南北に分れて国を争い、のち呼韓邪は漢に降り郅支は滅された。

● はるか西域　わがものに……前60

(附記)

西域のその後

西域諸国は王莽の時再び匈奴に服し、光武帝の時漢に内附を求めたが帝は内治を重んじて許さなかった。しかるに明帝は紀元73年竇固をして北匈奴を討たしめ又班超をして西域諸国と同盟せしめた。後、紀元91年和帝の時西域都護府を亀茲(天山南路)に置き、班超を都護に任じ六十余国を統べさせたので漢威再び西域に振った。

(年記)

前57年　朴赫居世の新羅建国(漢宣帝、五鳳1年)

● 名のり出る国　南の新羅……前57

前37(漢元帝、建昭2)東明王高麗国を建つ
前36(〃　〃　3)郅至単于敗死、王昭君呼韓邪に嫁す
前33(〃　竟寧1)⑤帝死す、成帝立つ(外戚王氏の権張る)

前18年　温祚王の百済建国(漢成帝、鴻嘉3年)

● 温祚百済を　世に建てる……前18

前1(漢平帝、元寿2)⑦王莽政をとる

5(漢平帝、元始5)⑫王莽帝を弑す

紀元8年　王莽前漢を亡し新の国を建つ

漢宣帝の子元帝は多病であったから宦官石顯・弘恭等勢を得、賢臣を斥けた。次で母后王氏の弟王鳳等之に代って権を専にし外戚専横の弊を生じた。王厚の甥に王莽あり、巧に恭謙を装って世を欺き次第に人心を收め、平帝の時女を納れて皇后とし自ら摂政し、紀元五年帝を弑して孺子嬰を立て遂に漢室を簒って此年帝位に即き、国を新と号した。為に漢は凡そ十四代二百九年にして一時中絶した。

○　ヤとばかり！……8

23年　昆陽の戦（漢淮陽王、更始1年）
（王莽の新の国亡ぶ）

王莽国を簒って後、時勢の推移を顧みず、一に周制に則って悉く漢の制度を改め、州縣の境界を変更し、天下の田を收公し、法令の変更甚しく・且つ租税が重かったので民心離反し反乱四方に起った。中にも樊崇は兵を山東に起して赤眉の兵と称し、王匡も亦兵を湖北の緑林山中に起して緑林の兵と称したが、わけても漢の王族劉秀は、兄劉縯と共に此年兵を舂陵（湖北省）に起し劉玄を擁して

勢大に振った。

王莽は王尋・王邑を將とし、此年大軍を率いて劉秀を昆陽（河内省）に囲ませたが、劉秀寡兵をもって敵の中堅を衝き、尋を斬り邑を走らせ大に敵を破ったので王莽力尽き殺されて部下に殺され、遂に新は建国から僅か十五年にして滅んだ。

○　昆陽に　新を滅ぼす……23

25年　後漢の建国（光武帝、建武1年6月）
（光武帝の即位）

劉秀は昆陽の戦に勝って新を滅し威名大に揚り遂に此年推されて帝位に即き、洛陽（周の洛邑）に都して漢室を再興した。これ以後を後漢と称して前漢に対し劉秀を後漢の光武帝と云う。その頃群雄猶四方に割拠して居たので、帝は諸将を遣して次第にそれ等を征服し、即位後十年で全く天下を一統した。

○　光武（コウブ）後漢（ゴカン）の　主（ヌシ）にあり……25

（附記）

1. 洛陽は前漢の都ある長安の東にあるから、前漢を西漢と云うに対して後漢を東漢とも云う。

2. 光武帝の治世

光武帝は即位の後、親政して政権の外戚に移ることを防ぎ、又外国との関係を絶って専ら内治を整え、大学を起して教育を盛にし名節を奬励

した。されば此後学術起り文物張り気節の士が輩出して天下よく治った。その子 明帝、孫章帝もよくその業をつぎ、国運隆昌を極めた。

(年記)

29 (後漢、光武帝、建武5) ⑲ 始めて大学を起す

36 (仝. 仝 12) ⑪ 蜀の成帝平ぎ天下一統す

40年 迦膩色迦王出ず (後漢光武帝、建武16年)

○ たのめ迦膩王 わが佛……40

57 (後漢光武帝、中元2) ① 倭奴国朝貢 ② 帝死す

65 (仝 明帝、永平8) 蔡愔等を西域に遣し佛教をもめしむ

67年 佛教始て支那に入る (後漢明帝永平10年)

後漢の初大月氏国に英主迦膩色迦王出で国強くして深く佛教に帰依し、堂塔を起し、第四回佛典結集を行った。

当時印度の中土は再び婆羅門教が勢を得たから佛僧多く此国に集り、大月氏国は佛教流行の中心となった。但し此時の結集には南印度の佛僧は加わらなかったから、佛教は是より南北二大派に分れた。

後漢の明帝は大月氏国に佛教の盛んな事をきゝさきに蔡愔(サイイン)を遣し之を求めた。愔は此年大月氏国から佛經、經論を得、且つ高僧迦葉摩騰(カーシャバマタンガ) (Kasya va Matanga) 及び竺法蘭(ジクホウラン)を伴い帰ったから、明帝は洛陽に白馬寺を建て二僧に経文を訳さしめた。是から佛教は次第に支那に流行するに至ったと云う。

○ 佛をば 迎えた明帝……67

(附記)

1. 佛教の小乗派と大乗派

南派佛教は小乗派と云い錫蘭島及印度諸国に行われ、北派佛教は大乗派と云い中央アジヤから支那に入り、朝鮮及我国に流行した。

2. 佛教傳来の年代

佛教が支那に傳えられた年代に就ては異説が多い。本文にあげたのは尤も普通に行われる説であるが、近来は西紀前2年(前漢哀帝の時)大月氏王の使者伊存と云う者が支那に来て博士景盧に佛教を口授したのを以て始めとする説もある。

(年記)

68 (後漢明帝永平11) 洛陽に白馬寺を建つ

73 (仝 仝 16) 窺固北匈奴を伐つ

89 (仝 和帝、永元1) ⑥ 窺固北匈奴を破る

91 班超、西域都護となる (後漢和帝永元3年12月)

○ 立派に西戎 治める班超……91

102 (後漢和帝. 永元14) ⑨ 班超死す。鄭聚列侯に封ぜらる (宦者封侯の始)

105年 蔡倫紙を発明す (後漢和帝、元興1年)

支那の書籍は太古から普通竹簡又は木札(後には帛をも)用い漆液で書き韋(カワ)で編んで巻いて藏した。然るに此年蔡倫と云う宦官が苦心の末、樹皮・麻屑等を以て紙を製造する事を発明してから非常に便利になった。曾て孔子は易を読んで韋編三絶したと云われて居るが、之は昔の不便な書物時代のことで、紙の発明が文化の傳播上役立つ

た事は非常なものである。

○ 韋編ほど　笑う昔と　ふる世かな……105

（附記）

紙の普及その外

紙の製法は八世紀に支那から中央アジヤに傳えられ、十二世紀には、大食国（サラセン帝国）に傳わり、その領土である西班牙地方で製造されて盛にヨウロッパ諸国に輸出された。依ってこれまで羊皮紙やカヤツリ草紙（パピラス）のような不便で高價なものを用いて来た欧羅巴人は亦大に之が恩恵を蒙った。

その他毛筆は秦の時蒙恬が始めて作ったと云われ、石墨石も支那人の発明で、夏・殷・周代既に存し、前漢の時大章車（遠距離測量機）、後漢の和帝の時候風地動儀（一種の地震計）も発明されたと云う。

166年　大秦国と後漢の交通始る（後漢桓帝延熹9年）

大秦とは支那で、東羅馬帝国を呼ぶ名である。その国では支那の絹を珍重し、一時その値黄金と同じであったから直接支那と通じようとしたが、中間の安息国に阻まれて果さなかった。

班超が西域で大に勢を振って居た時、部下の甘英を遣して交通しようとした時も、安息に欺かれて目的を達する事ができなかった。

然るに後漢の末桓帝の時、大秦王安敦（アントニウス）は、東洋航海の関門とも云うべき波斯湾頭の地を得たから、此年海路により使を漢に遣し、始めて両国の交通が開かれる事となった。是から大秦の商人続々来って互市を行い、珠玉・琥珀類を出して支那の絹を求め、支那の商船も亦印度洋を往来して貿易に従った。

○ 安敦が　はるばる後漢に　人を寄せ……166

166年　党人の禍起る（後漢、桓帝延熹9年）

後漢の光武帝が名節を奬励してから正義の士が続出したが桓帝の時、陳蕃・李膺等の名士が出て宦官の専横を憎むこと深く、従って宦官も亦是等の人々を怨み終に上書して、陳蕃・李膺等大学の学生と結んで徒党を為し以て朝廷を非議する由を奏した。桓帝大に怒り、蕃・膺等二百余人を捕えて獄に下し、こゝに党錮の獄が起った。

○ 恐ろしや　人を呪うて　人に罪……166

（附記）

党人禍の其後

167年先に投獄した党人を赦し田里に終身禁錮とした。翌年九月に至り、陳蕃・竇武等は宦者を誅せんとして却って殺され更にその翌、169年10月李膺等百余人殺された。

以上数年に亘り宦官の禍は続いたが、後、189年袁紹が出て宦者二千余人を捕え悉くこれを殺し禍を絶った。

184年　黄巾の賊起る（後漢霊帝、中平1年2月）

霊帝即位の頃から鉅鹿の人、張角と云う者が太平道と云う妖術を行い、当時は迷信の盛んな時代であったから

帰依する者多く、僅か十数年の間に数十万の信徒を得た。

其頃国内は外戚や宦官の跋扈甚しく漢室の衰えて居るのを見て、此年遂に兵を山東にあげ自ら天公将軍と称しその弟張梁・張宝等と共に諸所を荒掠し狼籍を極めた。彼の徒は黄巾を附けて目標としたから之を黄巾の賊と云う。而して霊帝は此の徒を懲らす為、皇甫嵩を將として伐たしめ、曹操等と共に進んで賊を破った。時に張角病死し、一先ず乱平いだがその余党は尚各地に出没して容易に鎮まらなかった。

○ 大勢で　世を乱すなり　天公將軍……184

(年記)

189年　袁紹悉く宦者を誅す（後漢弘王襲、中平6年8月）

○ 袁紹が　やがて宦者の　塔をあけ……189

190（後漢献帝、初平1）董卓、都を長安に遷す
202（〃　建安7）㊐ 袁紹死す
207（〃　〃 12）劉備、諸葛孔明を訪う

208年　赤壁の戦（後漢献帝、建安13年）

外戚、宦官、黄巾の賊などの事起って後漢の末年には国大に乱れた。やがて宦官の滅んだ189年董卓は帝辯を廃し、翌年その弟献帝を立て、自ら政権を握り、次で帝を脅して都を長安に遷した。依って四方の豪傑、卓を誅す

るを名として兵を各地に起し、幾もなく卓は部下の為に殺され、献帝は逃て洛陽に帰った。

兵を挙げた群雄中曹操尤も智略に富み、先ず中原を定め、董卓殺されて後献帝を迎えて許（河南）に拠り、南下して劉備に迫った。

劉備（字は玄徳）は漢の疏族で、謀臣諸葛亮（孔明）の勧により天下三分の策を立てたが、操に逐われて江東の孫権に投じた。是に於て曹操は此年、兵八十万を率いて孫権を伐つため赤壁に向った。孫権は其の臣周瑜・魯粛等をして兵三万に将とし、備と力を協せて迎え戦わしめた。周瑜奇謀を以て敵艦を焼き進み撃つに及んで北軍大に敗れ、曹操僅に身を以て免れ北に還った。

赤壁は今の湖北省嘉魚県の西北にあって揚子江に臨む山の名である。

○ 勝闘を　割って流れる　揚子江……208

(年記)

216（後漢献帝、建安21）㊍ 曹操魏王となる

220年　後漢亡ぶ（後漢献帝、建安25年10月）

（曹丕、魏文帝と称す）

赤壁役後、劉備は孫権の援を得て巴蜀（四川）漢中（陝西）

の地を定めて之に拠ったから、　揚子江以北は曹操に、以南は孫権に、その西は劉備に属し天下三分の形勢となった。

是より前、曹操は魏王に封ぜられ、その出入に天子の儀令を用いたが、死んで後その子曹丕嗣ぎ、献帝に迫って位を禪らしめ、洛陽に都して魏の文帝と称した。

依て後漢は、光武帝の建国から是に至る十三代百九十六年（前漢と併せて四百六年）にして滅んだ。これから所謂三国の時代に入るのである。

○ 漢の世を　蹴って魏帝が　蟠かまる……220

〔年記〕

221年　劉備、蜀漢帝を称す（公帝、章武1年4月）

○ 国は蜀　こゝに劉備が　一の帝……221

227（蜀漢後主、建興5）③ 孔明出師表を上り魏を伐つ

229年　呉王孫権帝を称す（蜀漢後主、建興7年4月）
（九月、建業に都す）

○ 建業に　皇帝の呉の　例開け……229

漢代の文化

秦の焚書坑儒により学術一時衰えたが、漢興って挾書の禁を解き、武帝に至り大学を設け博士を置き学者を優遇したので学術又栄えた。殊に武帝は董仲舒の議に従い儒学を政教の標準と定めたので儒学は大いに興った。

併し周代と相隔って言文に変化あると、火坑の後を受けたのとにより学者は専ら経義の註釈に努め所謂訓詁の学が行われ特に鄭玄は諸経を注釈し漢代儒学を大成した。

文字＝小篆、隷書、真、行、草、飛白

学者 { 前漢＝董仲舒、公孫弘、孔安国、劉向、揚雄
後漢＝馬融、鄭玄、服虔、班固

文学 { 前漢の文は簡古莊重―賈誼、司馬遷等
後漢の文は浮華―班固、蔡邕等
詩賦は武帝以来盛に行われた―東方朔、司馬相如等

史学＝漢以前の史書には左傳、国語、戦国策、楚漢、春秋など
漢武帝の時司馬遷は父、談の志をつぎ史記を著した。
之は太古から武帝に至る厂史で文章雄健永く支那正史の模範と仰がれる。
又漢書は後漢の班固の著で前漢の厂史、文は史記に劣るも精確之に優る。

三大文明の接触

後漢の世仏教傳来し又ローマとの交通開け、こゝに支那・印度・西洋の三大文明接触し融和する端を開いた。

234年　諸葛孔明死す（蜀漢後主建興12年8月）

諸葛亮、字は孔明、山東の人、後漢の末乱を避け襄陽に隠れ住んで居たが、天下の識者はその俊傑なるを知って臥龍と呼んだ。劉備三度その草廬を訪い、問うに漢室再興の事を以てした。亮感激し天下三分の策を立て、出廬し、為に帝に蜀漢の地を得しめた。　蜀の国小くして而もよく魏呉と対立するを得たのは実に亮の力である。

されば君臣の情誼極めて厚く、劉備は「吾の孔明に於ける猶魚の水あるがごとし」と云った。

劉備の死後幼帝劉禪を輔けたが未だ志を果さずして、此年八月、五十四歳を以て遂に五丈原(陝西)の陣中で死んだ。これから蜀漢の勢力大に衰えた。

○ 朽ちぬ名を　出師の表に　とめて逝き……234

(附記)

出師表

その魏を討つ時、劉禪に上った前後二回の出師表は至誠惻切、「之を読んで泣かざる者は忠臣にあらず」とさえ云われて居る。

又その死後蜀軍は孔明が猶生きて居る様に装い、魏軍に当ったが、魏将司馬仲達は畏れて退却したから時の人「死せる孔明生ける仲達を走らす」と云った。

(年記)

263年　蜀漢、魏に滅さる(蜀漢後主、炎興1)
(蜀漢二代43年間)

○ 国は魏に　滅ぼされたり　蜀二世……263

265年　西晋の建国(西晋武帝、泰始1年12月)
(司馬炎、魏を滅す)

諸葛孔明の死後、蜀の勢又振わず姜維は魏と幸を用いて益々疲れ、魏軍に伐たれて成都陥り後主出で降り、蜀は二代四十三年にして亡んだ。

一方司馬氏の勢は聡に起り、蜀を防ぎ、遼東を征して大功を立て、其子司馬昭の時蜀を滅して威望益々高くその子炎嗣ぐに及び、此年遂に魏の元帝に迫って位を禪らしめ西晋の武帝と称した。こゝに西晋興り、魏は五代四十六年にして亡んだ。

○ 殼(カラ)の魏を　拾って建てた　西の晋……265

280年　呉亡ぶ(西晋武帝太康1年3月)
(西晋の一統)

呉は大帝孫権以来廢帝・景帝を経て帝皓に至り暴虐で人心を失って居たから、此年晋の武帝は杜預(トヨ)・王濬(シュン)を将として呉を伐たせた。やがて建業の都陥り王出でゝ降り、呉遂に亡んで西晋天下を一統した。

実に三国鼎立してから六十年、呉は四代五十二年にして亡んだのである。

○ 皓(コウ)の呉は　四つ目で滅ぶ　悪い石……280

(年記)

300(西晋惠帝、永康1) 八王の乱起る
304(〃　永興1) ⑩ 匈奴の劉淵、漢王を称す

306年　八王の乱終る(西晋惠帝、光熙1年)

後漢が外戚と宦官に亡んだのを見て、魏の文帝は之等に注意しその害を免れたが、その代り帝室は全く孤立したために亡んだ。之等に鑑み晋の武帝は一族子弟を厚く分封して帝室の藩屏としたから諸侯の威権張り、反って後の患となった。

290年晋の武帝歿して子惠帝立ち、性暗愚、賈后権を専にし、汝南王司馬亮を殺し更に楚王瑋を殺し、楊太后を殺したので、趙王司馬倫は斉王司馬冏と謀って賈后を殺し、翌年惠帝を廃して帝位を簒った。

斉王冏は河間王司馬顒、成都王司馬穎と共に兵を起して倫を殺し惠帝を復した。その功に誇って斉王専横を極めたので、長沙王司馬乂之を殺して大権を握るや、河間王・成都王兵を併せて長沙王を斃し権を専にした。

因って東海王司馬越兵を起し、河間・成都の二王を逐い代って政を輔けた。此間実に十六年、司馬氏の八王互に政権を争い骨肉相害し、晋室の威令全く地に墜ちた。

○ 司馬越が　禍静めて　ホッと息……306

316年　西晋亡ぶ（西晋愍帝.建興4年11月）

西晋は清談の流行、八王の乱などにより国衰え乱れ、夷狄之に乗じて蜂起し、遂に天下の大乱となった。

此時に当り匈奴の劉渊兵を起して漢王と称し懐帝の時晋を攻めたが、渊死んで子聰つぐに及び、劉曜及び石勒等を遣して西晋を攻めさせた。

西晋の東海王司馬越軍中に病死し次で懐帝は捕えられて殺され、従子愍帝が即位したが、此年劉曜に攻められて長安陥り帝降り、こゝに西晋は四代五十二年にして滅んだ。

○ 西晋の　命も愍に　滅びけり……316

317年　東晋興る（東晋元帝.建武1年3月）

漢代以後、塞外民族は多く支那内地に移住したが、中にも匈奴の酋長劉渊は先ず諸胡に先って兵をあげ、平陽（山西）に拠って国を漢と号し、その子劉聰ついに晋を攻めて之を滅した。　依って此年司馬懿の曾孫司馬睿は、建康（呉の建業）で位に即き、僅に江南の地を保った。これを東晋の元帝と云う。

○ 司馬睿が　王位建康に　守られる……317

（附記）

五胡十六国

晋が南に遷ってから、塞外民族は江北に拠って互に相攻争すること凡そ百三十年に及び、此間に興亡した列国は十六あったから之を総称して五胡十六国と云って居る。

五胡十六国興亡表

（国名）	（種族）	（始祖）	（興亡年代）	（之ヲ滅ボシタ国）
1. 漢（前趙）	匈奴	劉渊	304—329	後趙
2. 成（漢）	氐	李雄	304—347	東晋
3. 後趙	羯	石勒	318—352	前燕
4. 前涼	漢人	張重華	349—376	前秦
5. 前燕	鮮卑	慕容儁	349—370	前秦

6. 前秦	氐	苻健	351 — 394	後秦
7. 後燕	鮮卑	慕容垂	384 — 409	北燕
8 後秦	羌	姚萇	384 — 417	東晋
9 西秦	鮮卑	乞伏国仁	385 — 431	夏
10 後涼	氐	呂光	386 — 403	後秦
11 南涼	鮮卑	禿髮烏孤	399 — 414	西晋
12 北涼	匈奴	沮渠蒙遜	397 — 439	後魏
13 南燕	鮮卑	慕容德	398 — 410	東晋
14 西涼	漢人	李暠	400 — 421	北涼
15 夏	匈奴	劉勃々	407 — 431	後魏
16 北燕	漢人	馮跋	409 — 436	後魏

此中、匈奴と羯はトルコ族、氐と羌はチベット族、鮮卑は満洲族である。

(年記)

317 (東晋元帝、建武1) ⑫ 劉聰、愍帝を殺す
318 (〃 太興1) ③ 東晋王帝位に即く
319 (〃 〃 2) 漢改め趙と号す(前趙) ⑪ 石勒趙王を称す(後趙)
330 (〃 成帝、咸和5) ⑨ 石勒皇帝を称し襄陽を陷る

372年 王猛 前秦の相となる (東晋、簡文帝、咸安2年6月)

○ 前秦が 猛を迎えて 国(クニ)宰(ツカサ)……372

仝年 ⑫ 前秦王苻堅始て僧侶及佛経を高麗に送る
375 (東晋孝武帝、寧康3) ⑫ 王猛死す
376 (〃 、太元1) ⑫ 前涼、前秦に降る(苻堅の江北一統)
381 (〃 、〃 6) ② 東夷六十二国前秦に貢す

383年 淝水の戦 (東晋孝武帝、太元8年11月)
(江北の乱れ)

五胡十六国の世に一時江北を一統したものは前秦である。前秦は氐人苻健が関中に建てた国で、その従子苻堅の時、名相王猛を用い次第に江北の諸国を併せ、又将軍呂光を遣して西域を定め勢甚だ盛であった。

王猛死に臨んで「晋は江南に僻在して居るけれども、正朔相承け、上下安和して居るから、臣殁後晋を図ること勿れ」と云って諫めたが、苻堅は之を用いず江北を一統し塞外六十二国を来貢せしめて心驕り「吾が衆を以て鞭を江に投ずればその流れを断つに足る、また何の険か恃むに足らん」と云って、此年九十万の大軍を率いて東晋を伐ち、江南の地を併呑せんとした。

東晋では挙国震駭して為す所を知らぬ有様であったが、丞相謝安(石)は自若として平生と異る所なく客を会して碁を囲み人心を定め、かくて従子謝玄をして僅か兵八万を以て之を淝水に迎え撃たせ大に敵軍を破ったので、苻堅僅に身を以て洛陽に逃れ還った。

○ 謝玄等に 破れた淝水の 秦苻堅……383

(年記)

399 (東晋安帝、隆安3) 僧法顕印度に往く(十五年を経て帰る)

420年 宋興る (宋武帝、永初1年6月)

東晋は淝水の戦に勝って小康を得たが其後孫恩の乱に引続き桓玄の反あり、玄は安帝に迫って位を禅らしめたが、劉裕此の乱を鎮定し且つ外征にも功があったので勢張り、遂に安帝を弑して恭帝を立て自ら権を恣にして居

たが、此年恭帝に迫って位を譲らしめ已帝位に即いて宋の武帝と云った。

かくて晋は十五代百五十六年（西晋4代52年、東晋11代104年）にして亡び、宋の世とふった。

○ 東晋の　鼎（カナエ）宋・武に　割られけり……420

（年記）

427（宋文帝、元嘉4）⑪ 陶淵明死す（年63）

439年　南北朝（宋・魏）の対立（宋文帝、元嘉16年9月）

此年、後魏の太武帝北凉を滅し江北を統一して江南の宋と対立してから隋の一統（589年）に至るまで百五十余年間を南北朝時代と云う。　此の間南朝には宋・斉・梁・陳の四朝が興亡し之に前代の魏・晋の二朝を加えて六朝と云って居る。

さて北朝の後魏は建国から凡そ百四十年を全て東魏と西魏とに分れ（534年）次で東魏は北斉に、西魏は北周に滅された。やがて北周は北斉をも併せたが間もなく隋の為に簒われ、隋は更に南朝の陳をも併せ茲に南北朝は始めて一に帰した。

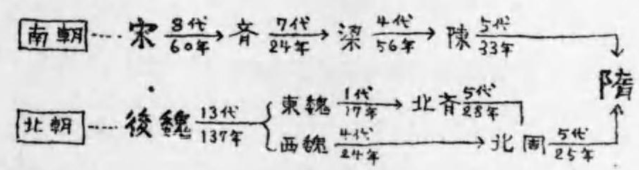
一体に此時代は五胡十六国時代のような混乱はなかったが両朝とも廃立、簒弑頗る多く、南北朝五十君の中、

終を全うしたのは二十君に過ぎない。されば南朝の宋の順帝は歎じて「願くば後身世々復た天王の家に出るゝことなれ」と云ったとの事であるが、これによってもその時代の一面を窺うことができる。

○ 太武（タイブ）立ち　宋魏二分で　埒ができ……439

（所記）

南北朝興亡表



（年記）

479（斉高帝、建元1）斉宋を滅す（宋8代60年）
502（梁武帝、天監1）④ 梁、斉を滅す（斉7代24年）

527年　達磨支那に来る（梁武帝、大通1年3月）

○ 西国（コシグニ）ゆ　来たる達磨の　眼のこわさ……527

535（梁武帝、大同1）① 宇文泰、文帝を立つ（西魏）…東西両魏分立
550（〃 簡文帝、大宝1）⑤ 北斉東魏を滅す（東魏1代17年）
557（梁及陳）① 北周、西魏を滅す（西魏3代23年）
⑩ 陳梁を滅す（梁4代56年）○突厥 柔然を滅し強盛

571年　マホメット生る（陳宣帝、太建3年）

○ 生（ナ）り出でぬ　マホメットの祖　アラビヤに……571

577（陳宣帝、太建9）① 北周、北斉を滅し江北一統（北斉6代28年）
581（〃　〃 13）② 隋、北周を滅す（北周5代25年）
587（〃 後主、禎明1）④ 隋、後梁を滅す（後梁3代33年）

魏晋南北朝の文化

漢代訓詁学の風を受けて魏晋の際王弼・杜預等が出たが、幾もなく儒学に老荘の説を加味した清談の風行われ、南方は儒学衰えて一般に文雅を喜び北方は儒学を重んじ雄健を尚び南北相反した。

儒学
- 南朝 — 范寧
- 北朝 — 王肅・王弼・何晏・杜預・徐遵明等

文藝
- 文 — 曹操・曹植・諸葛亮・陸機等
- 詩 — 陶淵明・謝灵運
- 駢驪文 — 陸機・潘岳
- 史学 — 范曄・沈約・蕭子顯・魏收

美術
- 書 — 王羲之（書道の神と云わる）、王献之
- 画 — 顧愷之（画聖と云わる）、張僧繇

道教＝道教は長命・富貴・快楽を旨とする一種の宗教で後漢の末張陵之を創め、後魏の寇謙之之を大成した。蓋し三国以来老荘の学行われるに伴い、之に古来の俗習信仰を加味してできたもので、後魏の太武帝は尤も之を尊信し、佛教を圧した。後周の武帝も又之を崇めた。これから道教は儒・佛二教と対立し支那の三大教の一となった。

589年 隋天下を一統す（隋文帝、開皇9年1月）

南北朝の末、北朝ある北周の外戚であった楊堅は位を簒って長安に都し、隋の文帝と称した（581年）。

当時南朝では陳の後主叔宝は奢侈淫虐で人心彼を離れて居たから、文帝は此年遂に兵を遣して之を滅した。

依て陳はこゝに五代三十三年で終り、隋の文帝始めて天下を一統した。

○ 南北朝 やめて隋・文 場をあけ……589

（年記）

604（隋文帝、仁寿4）⑦ 隋煬帝、父・兄を殺し即位す ⑪ 洛陽を東京とす。
605（〃 煬帝、大業1）印度に戒日王興る（在位44年）
607（〃 〃 3）日本支那の交通始る（日本遣隋使の始）
611（〃 〃 7）② 帝高麗征伐の兵を起す（翌年敗る）
617（〃 恭帝、義寧1）天下凡八主 ○ 李淵長安に克つ

618年 隋亡び、唐興る（唐高祖、武德1年3月）

隋文帝天下を一統して後、勤倹にして治を計り諸制度を改め国民を休養せしめたから、天下よく治り民栄えたが、後病むに及びその次子廣は帝を弑し且つ兄勇をも殺して位に即いた（604年）。之を煬帝（ヨウダイ）と云う。

煬帝は性豪奢を好み遊観の為の離宮を営み、運河を開き、又林邑（今のサイゴン附近）、流求（今の台湾）、吐谷渾（トヨクコン）（今の青海地方）を征し又西域諸国を招き、その国威一時四方に振ったが、再三高麗を征して失敗したので、土木と遠征とに苦んで居た人民は諸所に乱を起した。中にも太原の留守、李淵は其子世民に勧められて兵を起し、長安を陷れて一時恭帝（煬帝の孫）を立てた。

当時煬帝は南方を巡遊して江都（江蘇）に居り、此年三月臣下に弑せられたので、李淵は恭帝に迫って位を譲らし

め長安を都とした。之を唐の高祖と云う。

かくて隋は三代三十七年にして滅び唐の世となった。

○ 滅び行く 命(イノチ)・煬帝 夢にして……618

626年 唐太宗(李世民)即位(唐高祖、武德1年3月)
(貞觀の治)

唐の高祖は即位後七年で群雄を討ち平げて天下を一統したが、之はその次子世民の力に負う処が多かったので遂に此年位を世民に譲った。之を唐の太宗と云う。

太宗は英明の君で、はじめ高祖を輔けて統一の業を成し、位に即いて後はよく人を識って適材を適所に用い以てその能力を発揮せしめ、内に諸般の制度を整え、外は諸外国を征伐し、国内よく治り国威四方に輝いた。

当時、賢相に杜如晦・房玄齢あり、諫臣に魏徵・王珪あり、名将に李靖・李勣等があった。

太宗在位二十三年にして位を其の子高宗に譲ったが、其代またよく治り、両帝の治世約六十年間は実に唐の最盛時代であった。世に太宗の時を貞観の治と云う。

○ 日を受けて 国(クニ)太宗に 振いけり……626

629年 僧玄奘印度に往く(唐太宗貞觀3年8月)

唐の代は南北朝時代流行の余勢を受けて佛教隆盛を極め、名僧知識が輩出した。中にも僧玄奘(ゲンジョウ)三藏は此年出で、千辛万苦の末、陸路天山南路から印度に入り歴遊十七年、經典六百余部を持帰り、長安の大慈恩寺に住して、七十四部千三百余卷の書を訳出した。しかも彼の飜訳は頗る精密で、從来の誤訳を正した所多く、世に玄奘以後の訳を新訳と云い、それ以前のものを旧約と云って居る。又彼は法相宗を支那に傳え太宗・高宗の尊信を得た。一方弟子の教養に力を尽し、その門に博学高德の僧多く、門徒三千人達者七十人と云われて居る。

○ 法の旅 苦の旅玄奘 流浪に出……629

(附記)

1. 僧義淨の旅と飜訳

此後僧義淨は高宗の咸亨二年(671年)三十七才で海路印度に赴き、廿五年を経て多くの經論を持帰り盛に之を訳した。

2. 唐の八宗

唐代の佛教宗派は、三論・法相・律・華厳・天台・真言・禅・淨土の八宗があった。此頃日本僧の来て学ぶもの多く、最澄・空海の入唐したのは德宗の時である。

3. 佛教と美術

佛教の興隆に伴い、印刷・絵画・彫刻・建築の術大に発達し、中にも絵画には、佛画に長ぜる呉道玄(道子)を始め、南宗画の祖王維、北宗画の祖李思訓等の名手が出た。

(年記)

630年　唐太宗(李靖)東トルコを滅す(唐太宗、貞観4年2月)

○ 東トルコ　その国唐に　渡しけり----630

仝年　日本遣唐使の始(日本史を見よ)
631　(唐太宗、貞観5)祆教唐に入る
632　(仝　仝　6)マホメット死す

635年　景教唐に入る(唐太宗、貞観9年)

唐は支那に於ける空前の大帝国を建て東西の交通盛に行われたから、当時中央アジヤ以西に行われた祆教・摩尼教・景教・回教等の諸外教相ついで傳来した。

景教は五世紀の初に、シリヤの人ネストリウスの創めた基督教の一派であるが、彼は当時一般に行われた三位一体の説を排斥した為に紀元341年エフェサスの宗教会議で異端者と認められ、その著書は焼かれ彼は追放された。

しかし西方アジヤではその説を賛する者多く、遂に中央アジヤを経て支那に傳えられ一時広く行われたが、武宗の時他宗教と共に禁ぜられ衰えてしまった。

景教が唐に流行した有様は、「太秦景教流行中国碑」の文に詳であって、此年太秦国即ちローマの阿羅本(オロバン)が始めて支那に傳え、以後漸く広く行われたと云う事である。

此のネストル教を支那で景教と呼ぶのは景(ヒカ)り輝く教の

意味だと云う。

○ はるばると　支那に入つたる　ネストル教----635

(附記)

1. 祆教

之は紀元前六世紀の頃、波斯のゾロアストルの開いた拝火教で、南北朝の時既に支那に入つたが、唐初波斯が大食に併せられた時、教徒多く支那に逃げ入りその教も所々に行われた。

2. 摩尼教

紀元三世紀の初、波斯人摩尼が祆・佛・耶の三教を折衷して作った宗教で、主に回紇に行われたが、則天武后の時支那に傳り、諸国に行われた。

3. 回教

之はアラビヤの摩訶末(マホメット)の開いたイスラム教即ちマホメット教で、回紇人の間に行われたから回教の称がある。中唐の頃から大食人の通商と共に支那の南方に行われるようになった。

(年記)

641(唐太宗、貞観15)① 唐、文成公主を吐蕃に嫁す
642頃(仝　仝　16)大食、ペルシヤを占領す
644(仝　仝　18)高麗親征
645(仝　仝　19)① 玄奘印度より還る

649年　唐の高宗即位(唐太宗貞観23年6月-)

唐の太宗は、在位廿三年で此年六月歿したから太子高宗が位に即いた。　此の代には長孫無忌・褚遂良(ケヨズイリョウ)・李勣・劉仁軌等文武の名臣が、先帝の遺詔を受けて政を輔けたから天下よく治り、太宗・高宗二帝の治世はひとり唐の最も栄えた時代であるのみならず又漢族の極盛時代であった。

而して日本・朝鮮等に影響した唐の諸制度も皆此の時代にでき上った。

○ 日は高し　立つよ高宗　六月に……649

〔年記〕

651年　大食未り唐と交通す（唐高宗、永徽2）

○ はるか支那に　懇（ネンゴロ）を請う　アラビヤ王……651

657年　唐、西トルコを滅す（唐高宗、顯慶2年10月）

○ 滅ぼさる　西突厥（トッケツ）も　亦唐に……657

660（唐高宗、顯慶5）唐蘇定方等百濟を降す

663年　劉仁軌等、百濟を滅す（唐高宗、龍朔3年9月）

○ 豊璋（ホウ）も　滅び百濟の　社稷絶え……663

668年　李勣、高麗を滅す（唐高宗、總章1年9月）

○ 宝藏王　滅んで高麗の　世も終り……668

671（唐高宗、咸亨2）僧義淨印度に向う
674（〃　上元1）㊀帝を天皇、后を皇后（則天武后）と称す
679（〃　調露1）安南都護府をおく（安南の名起る）
684（〃中宗、嗣聖1）㊁太后（則天武后）帝を廢す

690年　則天武后帝位に即く（唐中宗、嗣聖7年9月）
（国を周と号す）

則天武后は初め唐太宗の女官となり、ついで高宗に知られて後宮に入り、後皇后となった。

高宗晩年疾に苦み国政を武后に委ねたが、后は才略があってよく政事を裁決したので、その権力は帝を凌ぐに

至った。683年高宗死んで中宗が立ったが、武后は之を廢して中宗の弟、睿宗を立てゝ自ら政を執り、唐の宗室・外戚・大臣等の已に不利なる者を多く殺し、遂に此年睿宗をも廢して自ら帝位に即き、聖神皇帝と称し国号を周と改めた。

武后位に在ること十五年、この間天下の耳目を恐れて政苛酷であったが、能く賢能の士を登用したから天下無事なるを得た。のち紀元705年武后病むに及び宰相張柬之は同志と謀って中宗を迎え、強いて武后に位を禪らせ以て唐朝を復した。

その後廿年経って中宗の皇后韋氏は、武后に則ってか又権勢を擅し遂に中宗を弑するに至った。これ等二皇后の乱を武・韋の乱と呼ぶ。

○ 妃の武氏が　乱の道踏み　わけて立ち……690

〔年記〕

694（唐中宗、嗣聖11）摩尼教支那に入る
705（〃　神龍1）①張柬之等兵を起し中宗復位②唐室再興
⑪則天武后死す
710（〃睿宗、景雲1）⑬皇后韋氏中宗を弑す、平王隆基后を殺し帝を立つ

712年　唐の玄宗即位（唐玄宗、先天1年8月）
（開元の治）

韋后が中宗を弑した時、睿宗の子隆基兵を起して韋氏

を殺し、父を迎えて位に即かしめ、次で此年その禅を受けて第六代の帝位に即いた。之を玄宗と云う。

玄宗は即位後、姚崇・宋璟等の賢相を用い倹素自ら奉じ、税を軽くし、学術を奨励したから戸口繁殖し、文運大に興った。世に之を貞観の治と並べ称して開元の治と云う。わが吉備真備・阿倍仲麻呂等が唐に留学したのは此頃のことである。

○ もめたのも　治まり玄宗の　国静か……712

(附記)

十節度使

玄宗は辺要の地に十節度使を置き兵馬の権を委ねて四方を經略せしめ、民政をも掌らしめたから、国威は大に振ったが、後次第にその跋扈を招き、遂には唐室滅亡の一因ともなった。

713年　大祚榮、渤海国を建つ(唐玄宗、開元1年)

今の満洲地方には、もと粛慎と云う満洲族が居たが、東晋以来、靺鞨と称せられ、数部に分れて高麗や突厥に分属して居た。是等の中で粟末水(松花江)の岸に居た粟末靺鞨と、黒水(黒龍江)の岸に居た黒水靺鞨とが最も勢力があった。此の頃、粟末部の部長に、大祚榮出で近隣の諸部を統一して唐の玄宗から渤海郡王に封ぜられ、遂に此年渤海国を建てた。

○ 靺鞨を　併せ渤海　栄え行く……713

(附記)

渤海国のその後

祚榮の子武藝に至って、益々領土を拡張し唐の文化を輸入した。我国にも727年初めて入貢して以来度々往来した。
やがて渤海は都を忽汗(フルカ)城に定め文化大に進んだが、五代の世契丹の耶律阿保機に滅された。(927年)

(年記)

742(唐玄宗、天宝1)① 安祿山を平盧節度使とす
744(〃　〃 3)② 安祿山范陽節度使を兼ぬ
745(〃　〃 4)① 突厥の地恵く回紇に併す ② 楊氏を貴妃とす

755年　安史(祿山)の乱起る(唐玄宗、天宝14年10月)

玄宗在位四十五年、晩年政に倦み、奸臣李林甫を相とするに及んで政治紊れ武備弛み、驕奢に耽り楊貴妃を寵して国政を顧みなかったから、遂に安祿山の大乱を引起すに至った。

祿山はもと営州(直隷)の胡人で、嘗て羊を盗み范陽の節度使、張守珪に殺されようとしたが、免されてその部下となり屢々戦功を樹て幽州の節度副使となった。性狡黠、巧に楊貴妃や李林甫の意を迎えて平盧・范陽・河東の三節度使を兼ね密に形勢を窺い、此年遂に反旗を翻し十五万の兵を率いて南下し、直に洛陽を陥れ、翌年自ら大燕皇帝と称えて長安に迫った。

玄宗恐れ慌てゝ蜀に遁れる途中、楊貴妃・楊国忠等を殺し位を太子粛宗に譲った。此時忠臣顔真卿・顔杲卿・張巡・許遠等防ぎ戦って利なく、杲卿，巡，遠等は賊の為に殺された。

粛宗は郭子儀・李光弼等の名将を遣し又回紇や大食の援を得て賊を討たしめた。それに先って即ち757年、禄山はその長子安慶緒に殺され、慶緒はその将史思明に殺され、史思明は又その子朝義に殺された。かくして遂に此年、賊将李懐仙は朝義を殺して出で降り、763年、大乱終を告げた。

此の乱前後九年に亘り、為に国力衰え、宦者・外敵の禍起り、これから唐室漸く衰運に向った。

○ 謀反人（ホンシン） 南無三宝(763)と 根を断たれ……755

〔年記〕

756（唐玄宗、至德1）① 禄山僭号 ⑥ 賊関に入り都出奔す、楊国忠・楊貴妃伏誅 ⑦ 粛宗立つ

757（〃 粛宗、仝 2）① 安慶緒 父禄山を殺す ⑩ 張巡 許遠戦死
○郭子儀 東京を復す

758（仝 乾元1）⑥ 史思明反す

760（仝 上元1）③ 朝義 史思明を殺す。画家王維死す

762（仝 宝応1）④ 粛宗死す

762年 李白死す（唐代宗、宝應1年11月）

唐代の儒学は太宗の時、孔穎達に命じ従来の諸学説を統一して五經正義を作らしめ、学校の教科も官吏登庸試験も皆之に拠ったから、自由討究を欠き従ってあまり振わなかった。しかし文学方面は空前の盛観を呈し、中にも詩には、李白(太白)・杜甫(子美)の二詩聖出で、清新の調を歌い、これまで外形の飾を事とした弊風を打破ったので大に盛になった。

李白は幼より詩書に通じ、撃剣を好み仁侠を事とした。性豪放尤も酒を好み、その詩は多く酔中に成ったと云われ奇想妙趣天馬空を行くの趣がある。一時玄宗に仕えて居たが後去って四方に飄遊し、此年六十四才を以て死ぬまでその一生の間ひたすら詩酒に楽んだ。

○ 身一つを 瓢箪（ヒョウタン）にして 轉（コロ）げ込み……762

（附記）

1. 杜甫は幼時家貧しく四方に客遊して詩想を練り、李白と交深かった。実に此二人は支那詩壇の二大明星である。曾て進士に及第せず、のち賦三篇を上って玄宗に仕えたが、偶々安禄山の乱に官をすて、秦州に行き、貧困甚しく薪を負い橡栗を拾って食み、後江南に客死した。其詩想壮、沈痛を以て鳴る。

2. 白居易（楽天）の詩は平明・流麗、その詩集白氏文集は我が国文学にも大影響を與えた。長恨歌・琵琶行の二篇は尤よく知られて居る。

3. 韓愈（退之）は唐代第一の文豪である。刻苦して学び六経百家に通じ、孟子以後の大儒と称せられ、其文雄宕、実に八代の衰を興した。

4. 柳宗元（子厚）の文は雄健・奇峭尤も紀行に長じ、韓愈と共に支那の二大文豪として知られて居る。

（年記）

763（唐代宗、広德1）① 李懐仙、朝義を殺す ⑩ 吐蕃長安を陷る、郭子儀之を破る。
770（仝　大曆5）③ 詩人杜甫死す（年59）
819（〃憲宗、元和14）② 柳宗元死す（年47）
823（〃穆宗、長慶3）　韓愈死す（年57）

845年　唐帝諸外教を禁ず（唐武宗、会昌5年8月）

○ 世の宗旨　唐は道教　のみにして……845

847（唐宣宗、大中1）　白居易死す（年75）
894（〃昭宗、乾寧1）④ 日本遣唐使を止む

907年　唐亡び後梁代る（唐哀帝、開平1年4月）

安史の乱後、唐の国勢急に衰え外敵の侵入、節度使の跋扈・宦者の専横・朋党の爭・財政の困難などにより、遂に唐室の滅亡を見るに至った。

外敵としては、回紇・南詔・吐蕃などがあり又節度使は、安史の乱後増置されその勢張って朝命を用いず、中には兵を養い独立する者もあった。

又安史の乱後財政紊れて節度使租税を私し、国庫窮乏した。ために德宗の時租・庸・調法を廃し新に両税法を行い新税を課したので民心益々離れた。

尚玄宗の晩年、宦者を重用してからその勢強く遂には政權を握り機密を掌め、憲宗はその毒手に斃れ、の方益々威權を恣にした。

かゝる世相の中に唐の国勢衰え、盜賊四方に起り僖宗の世には、黄巢の賊が起って諸所を侵し、洛陽・長安をも陷れたりした。

昭宗の時、汴（河南）の節度使、朱全忠招かれて宦者を悉く誅戮し、功により梁王となったが、それから彼の勢張り、さきに帝を弑して哀帝を立て、此年遂に帝に迫って自ら王位に即いた。之を後梁の太祖と云う。

依て唐は二十代二百九十年にして亡び、これから五代の世に入るのである。

○ 梁（リョウ）王が　わけふく唐を　貰い受け……907

（年記）

907（後梁太祖開平1）⑨ 蜀王、建帝を称す。耶律阿保機契丹主となる。
908（仝　仝2）① 後梁、唐哀帝を殺す
909（仝　仝3）① 後梁、都を洛陽に遷す
912（仝　乾化2）⑥ 後梁太祖弑せらる

（附記）

1. 唐の外国経略

唐の極盛期に国威大に国外に振った。

(ア) 突厥 ｛東突厥＝太宗之を亡し－単于都護府を置く
　　西突厥＝高宗之を亡し－北庭都護府を置く

(イ) 回紇＝太宗の時遠征し勢力範囲とした。

(ウ) 波斯と大食（タージ）
- 波斯は東ローマに攻められ大食国に亡ぼされる
- 大食（サラセン帝国）＝高宗の時使聘を通ず

(エ) 南海諸国＝唐の盛大を聞いて南海諸国も朝貢したので、高宗の時安南都護府を置き治めしめた。

(オ) 吐蕃＝太宗吐蕃と和す

(カ) 北印度＝太宗、吐蕃を介て北印度の尼日王と交通す

(キ) 朝鮮＝初め高麗・百済・新羅の三国鼎立したが、百済・高麗亡んで後唐は安東都護府を置いて治めた。のち新羅唐に反き半島を一統した。

2. 唐の六都護府

安西－（天山南路及中亜統治）――640年設置（太宗）
単于－（内蒙古　〃　）――650　〃　（高宗）
安東－（遼東及朝鮮　〃　）――668　〃　（高宗）
安北－（外蒙古　〃　）――669　〃　（高宗）
安南－（南海諸国　〃　）――679　〃　（高宗）
北庭－（天山北路　〃　）――702　〃　（武后）

3. 東西の交通

- 陸路＝中亜及印度――僧侶、商人等往来
- 海路＝唐船は印度洋、波斯湾、紅海等に至る
  印度・大食の商船は唐の諸港に来る
- 関税徴収＝提挙市舶司をおく
- 大食国と通商――犀角・象牙・胡椒・綿花の輸入
- 日唐交通＝日本の遣隋使、遣唐使
- 朝鮮、渤海交通

唐の制度

唐の太宗・高宗の世制度完備し、支那歴代の典範たるばかりでなく、日本や朝鮮にも影響した。

- 官制
  - 中央
    - 三省
      - 中書省
      - 尚書省
      - 門下省
      - 左僕射
        - 吏部
        - 戸部
        - 礼部
      - 右僕射
        - 兵部
        - 刑部
        - 工部
    - 三師＝太師・太傅・太保
    - 三公＝太尉・司徒・司空
  - 地方＝十道（巡察使）州（刺史）県（令）
  - 官吏登庸法
    - 生徒
    - 郷貢
    - 考試
      - 秀才・明経
      - 進士・明法
      - 制挙
- 田制税法
  - 田制＝均田法＝丁男に百畝
    - 永業田
    - 口分田
  - 税法＝
    - 租＝丁男ハ毎年粟二斛
    - 庸＝丁男ハ毎年廿日力役又ハ代償
    - 調＝土地ノ物産
  - 戸籍＝三年毎ニ改正
- 兵制
  - 十人ヲ火（長）五十人ヲ隊（正）三百人ヲ團（校尉）
  - 府兵の制＝634 折衝府
- 刑法
  - 五刑＝笞・杖・徒・流・死
  - 贖罪＝八議・十悪
- 年中行事＝秦・漢時代から漸次発達し唐に至り完成したもの
  - 元旦（1.1）　人日（1.7）　上巳（3.3）　灌仏（4.8）　端午（5.5）
  - 七夕（7.7）　盂蘭盆（7.15）　重陽（9.9）　追儺（除夜）

隋唐の文化

儒学＝隋は天下を一統して大に文学を奨励し、劉焯・劉炫・王通等が出た。
唐に至り太宗は孔穎達・顔師古等に命じ、五経正義を撰せしめ経義を一定した。後韓愈出で儒学を振興した。

文芸
- 文＝韓愈・柳宗元・張籍・陸贄
- 詩＝沈詮期、宋之問、王維、李白、杜甫、孟浩然、白居易

美術
- 書＝顔真卿・張旭・欧陽詢・褚世南
- 画＝呉道玄（仏画）、李思訓（北画）王維（南画）
- 音楽＝玄宗―雅楽、俗楽

佛教＝陸路を極め玄奘・義浄等印度に入る、日本名僧数人入唐

道教＝玄宗之を奨励し、武宗は国教とした。

諸外教＝景教・祆教・マニ教・回教

（635年「景教唐に入る」の附記を見よ。）

第三史期

916年 契丹の太祖帝を称す（後梁末帝貞明2年）

（五代の世）

唐の滅亡から宋の興起に至るまで僅か五十余年間に、後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五代十三君の興亡があった。そして五代諸国の勢力範囲は僅か中原に止り地方には十国（前蜀・後蜀・楚・荆南・呉・南唐・呉越・閩・南漢・北漢）が割拠して各々王を称して居た。

此間廉恥地を拂い、紛乱止む時なく遂に新に興った契丹の為に統一された。

契丹は南北朝の頃から、潢河（シラムン河）の沿岸に散居して居た満洲族で、初め唐に帰服して居たが、唐の末に、耶律阿保機（エリアボキ）が出、雄略あり、頻りに四方を攻取り勢強く此年遂に皇帝を称し都を臨潢に築めた。之を契丹（遼）の太祖と云う。

○ 臨潢に 耶律阿保機（エリアボキ）氏の 覇業成り……916

（附記）

五代の沿革表

国名	始祖	代数	年数	最後	前後の年代
後梁	朱全忠（もと唐将）	2	17年	後唐に滅さる	907―923
後唐	李存勗（〃）	4	14年	後晋に〃〃	923―936
後晋	石敬塘（もと後唐将）	2	11年	契丹に〃〃	936―946
後漢	劉知遠（もと後晋将）	2	4年	後周に奪わる	947―950
後周	郭威（もと後漢将）	3	9年	宋に〃〃	951―960

〔年記〕

918（後梁末帝、貞明4）朝鮮の王建、高麗国を建つ

927年 契丹渤海を滅す（後唐 明宗天成2年）

○ 利を得ては　契丹渤海を　もみつぶし……927

935（後唐廢帝、応順清泰2）新羅亡ぶ（凡56代992年）

936年 高麗の朝鮮統一（後晋高祖、天福1年）

○ 麗王建　新羅後百済　滅ぼせり……936

937（後晋高祖、天福2）契丹、国号を遼と改む

954（後周世宗、顯德1）③高平の戦 ④馮道死す（年73）

960年 北宋興り、後周滅ぶ（北宋太祖、建隆1年）

契丹の太祖は北は室韋を侵し、西は回紇の故地を併せ東は渤海を伐って之を滅し益々勢を得、その子太宗は後晋を助けて後唐を滅し支那の北辺十六州を得た。後晋が後唐に代るを得たのは実に契丹の後援があったからだがその後、後晋が礼を欠くに及んで太宗は遂に之を滅し、汴京に拠って国を遼と号した。しかし漢人は之に服せず叛乱相ついで起ったので太宗間もなく北に帰った。

この後、後晋の節度使たる劉知遠は汴京に入って後漢を建てたが僅に二代四年で其将　郭威に簒われ威は後周を建てた。次で後周の二代世宗つぎ諸方を平定し国威大に振ったが、その死後恭帝立ち年僅に七才、且つ遼軍の

入寇を受けたので、此年、後周の節度使趙匡胤は幼帝を不利とする人々に推され、遂に恭帝の譲を受けて汴京に即位した。之を宋の太祖と云う。かくて後周は三代九年で亡び、五代の紛乱鎮って宋の世となった。

実に五代の世は世道人心の壞敗その極に達し、節義殆ど地を拂った。瀛州の人馮道の如きは、初め劉守光に仕え、のち後唐に用いられ、後晋興るや之に仕え、遼の時その太宗に仕え、後漢の高祖の世又之に帰し、後周の太祖立つや又之に赴き、実に五朝十一君に歴仕して常に相将の栄位を失わず、朝に仇敵となり夕に君臣となって恥じず、自ら長樂老と称し、累朝の勲爵を陳列して栄とし、時人も亦之を寛厚の長者として敬重した。当時の士風の頽廢を見るべきである。

○ 倫常を　人は宋まで　忘れて居……960

（附記）

王彦章の義節

五代の世にも全然節義の人が無かったのでは亦い。後梁の、王彦章が戰敗れて生擒せられた時、後晋主その勇を惜み己に從わせようとしたが彼は少しも志を屈せずして曰く「豹は死して皮を留め、人は死して名を留む」と云って節に死んだ如き人もある。

〔年記〕

972（北宋太祖、開宝5）大藏經出版せらる

979年 北宋、北漢を併せ天下一統（北宋太宗、太平興国4年5月）
（北漢4代29年）

○ 楽そうに　円める天下　利を得ては……979

・仝年㊐ 北宋太宗遼を伐ち高梁河に敗る
980（北宋太宗、太平興国5）北宋、安南を攻めて敗る
982（仝　仝　7）㊐ 遼主死す。遼再び契丹を号す
994（仝　淳化5）高麗、遼に臣属す

1004年 澶州（セン）の役（北宋真宗、景德1年12月）
（宋・遼の交戦）

宋と遼とは初め互に好を通じたが、宋の太宗北漢を伐つに及んで両国の和平破れ、太宗は遼の北辺十六州を恢復せんとして屢々兵を出したが却って失敗した。

太宗歿して真宗の時、遼の聖宗之を機とし自ら大軍を率い入寇して、此年宋の都汴京を距る三百里（我が30里余）の澶州（直隸）に迫った。　宋の上下驚愕して一時遷都説も盛であったが、真宗は宰相寇準の議を用い親征して大に遼軍を澶州に破った。

遼の聖宗、形勢の不利なのを見て和議を図り、

(1) 両国は兄弟の礼を以て交り、宋を兄とし遼を弟とすること。

(2) 宋は歳幣銀十万両、絹二十万匹を贈ること。

などの条件を以てこゝに和を結んだ。

▲ 銀と絹　和議に宋から　年の料……1004

（注意）千年代のおぼえ句には皆「一の容」と附けるのだが便宜上省いてある。

寇（アダ）の遼軍　僅かに防ぎ　和して宋から　年の料……1004

（年記）

1010（北宋真宗、大中祥符3）遼の聖宗高麗を伐つ
1018（仝　天禧2）遼軍高麗に敗る
1031（〃仁宗、天聖9）㊐ 遼聖宗死す

1038年 西夏興る（北宋仁宗、宝元1年）

唐の末から西蔵族なる党項（タングート）部は夏州に拠り、宋遼に両属して居たが真宗の子仁宗の時に、李元昊部長となり勢大に張り、文字を製し・学校を建て・国政を改革し・回紇を討って河西の地を取り、遂に此年興慶（甘粛）に都して国を西夏と号し、皇帝を称し、屢々宋の西辺に寇した。

▲ 我が腕に　西夏の国を　世に建てる……1038

腕の元昊　笑って立って　西夏誕すよ　世の中に……1038

（年記）

1040（北宋仁宗、康定1）㊐ 趙元昊宋に入寇 ㊗ 韓琦 范仲淹、陝西を攻せしむ
1041（仝　慶暦1）㊗ 元昊又入寇す
1044（仝　仝　4）㊐ 帝西夏と和す
1054（仝　至和1）交趾の李氏国を大越と号す

1069年 王安石新法を行う（北宋神宗、熙寧2年）
（神宗の改革）

宋は唐末、五代の弊に懲り、太祖以来軍人の勢を殺ぐことを努めたから、その結果兵力を弱くして外征に失敗し、遂に遼や西夏に多くの歳幣を納れ財政難を来した。

紀元1067年、年の若い第六代の神宗が即位するに及んで、先代の失敗を回復し国威を張るの志あり、遂に此年王安石を挙げて宰相とし局に当らしめた。依て安石は旧法を改めて新法を発布し、富国強兵の策を立て、富国策としては、均輸・青苗・募役・市易の四法を行い、強兵策としては、保甲・保馬の二法を行った。

▲ わが富強　計る安石と　六代目……1069

安石おもしに　我が家の富を　計る神宗　六の帝……1069

（附記）

安石の富強策

均輸法とは各地に均輸官を置き、地方物資の有無を通じ、物價を平均する方法。之は曾て漢武帝の時にも行われた。

青苗法とは春耕の時、政府から百姓に資金を貸し、秋収の時利子を附けて返させる法

募役法とは人民から免役錢をとり、服役を免じ、政府は別に民を募って役にあてる法。

市易法とは各地に市易司を置き、物価下落の時物品を買入れ又は官物と交換し、時を見て売下げ、又商人に資金を貸付け、一定の利子を納めさせる法。

保甲法とは十家を保とし、五百家を都保とし各々長を置き、各弓箭を貯え、武藝を習わしめる法。

保馬法とは保丁に馬を貸し又は價を給し、毎年肥瘦を検し、死病すれば弁償させる法。

（年記）

1069（北宋神宗 熙寧2）㋐ 均輸法を行う ㋑ 青苗法を行う
1070（〃　〃 3）㋒ 保甲法を行う
1072（〃　〃 5）㋓ 市易法を行う ㋔ 保馬法を行う ㋕ 欧陽修死（年66）
1074（〃　〃 7）㋖ 王安石相を免ぜらる
1075（〃　〃 8）㋗ 王安石又相となる　○交趾入寇
1079（〃　元豊2）㋘ 蘇軾貶せらる
1081（〃　〃 4）㋙ 宋、西夏を伐ち大敗す
1084（〃　〃 7）㋚ 司馬光、資治通鑑を上る
1085（〃　〃 8）㋛ 帝死し太后政をとる ㋜ 程顥死す　○保甲・保馬等の新法をやむ
1086（〃 哲宗、元祐1）㋝ 司馬光相となる。

1086年 王安石と司馬光死す（宋哲宗、元祐1年）

神宗は富強の実のまだ挙らない中に頻りに外征の軍を起し、西夏や交趾と戦ったが何れも失敗し、遼は之に乗じ宋の北辺を侵した。

又王安石の新法は決して悪法ではなかったが、多く国庫の充実を目的としたのと、その施行に急であったのとで人の怨を買い、官吏跋扈し、弊害百出した。依て大に反対論起り中にも、司馬光・欧陽修・程顥・蘇軾等の名士は、その祖宗の制に背き、人民を虐るものと痛論するに対し、安石は新法を固執し言論を束縛し反対党を排

なした。　是から新法・旧法の二党起り互に政権を争奪し、紛乱を極めること三十余年に及んだ。

その新旧両統紛争の中途である此年四月、先ず安石死に全九月司馬光又死んだが争は此後も猶続いた。

実に新法党の首脳である安石と、旧法党の頭領である司馬光（温光）が、年齢も同じく六十八才で同年に死んだのは一寸皮肉な感がする。

▲ わが意地も　やめて冥途の　二人づれ……1086

啀(イガ)み合ったも　わびしい浮世　逝けば冥土の　二人づれ……1036

（年記）

1092（北宋哲宗、元祐7）⑨ 蘇軾召さる
1094（　〃　、紹聖1）⑩ 蘇軾貶され、章惇相となる
1095（　〃　　〃　2）② 保甲法を復す
1097（　〃　　〃　4）③ 蘇軾再流される
1100（〃徽宗、元符3）① 哲宗死し太后向氏政をきく ② 韓忠彦相となり新法をやめ

1100年　北宋の徽宗即位す（全帝元符3年）
（宣和時代）

宋は神宗・哲宗・徽宗の治世中、新法党・旧法党互に争ったが、大体の様子を見るに、母后等の摂政時代には保守主義に傾き旧法党が勢を占め、又天子の親政時代には進歩主義に傾いて新法党が政権を張った。　哲宗の後、第八代の徽宗は此年位に即いたが、帝は奢侈を好み、政

治のオ乏く、大に国勢の衰を来したが、その代り宮室を飾り美術を奨励したからその方面大に栄り、後世宣和時代と称してその藝術を讃える。

▲ 栄耀(ニイヨウ)が　我が身の疵か　我が徳か……1100

家を仆した　怨はあるが　僅か徽宗に　技(ワザ)の恩……1100

（年記）

1101（北宋徽宗、建中靖国1）① 太后向氏死す ② 章惇を貶す
③ 蔡京を召す ○此年蘇軾死す（年66）
1102（　〃　、崇寧1）④ 韓忠彦をやめ再び司馬光等の官を追貶す
1104（　〃　　〃　3）⑤ 王安石を孔子に配享す
1107（　〃　、大観1）⑥ 梁顔死す
1114（　〃　、政和4）⑦ 女真 混同江に遼軍を破る

1115年　金の国興る（北宋 徽宗、政和5年1月）
（女真の阿骨打、帝を称す）

宋・遼の末に今の満洲から金が興った。　金は黒水（黒龍江）沿岸に居た黒水靺鞨の裔で、この後女真(ジュルチン)と云い渤海に服し、渤海滅亡後は遼に属して居たが、その一部なる完顔(ワニヤン)部に阿骨打が出るに及んで、大に遼軍を混同江に破り女真の諸部を一統して、此年遂に帝を称し都を会寧（吉**）に築め、国を金と号した。これ即ち金の太祖である。

▲ 阿骨打(アクダ)氏が　興って金の　名のり上げ……1115

家を興した　阿骨打はこれぞ　音に響いた　ふり金家……1115

〔年記〕

1118（北宋 徽宗、宣和1）㊁ 宋、使を金に遣し遼を夾撃せんとす
1119（ 〃 宣和1）① 宋帝道教を尚び仏教を排斥す ② 金、女真文字を作る
1120（ 〃 〃 2）③ 宋と金の同盟成る
1122（ 〃 〃 4）④ 金、遼の西京を陷る ⑤ 宋、遼を攻めて敗る

1125年 遼、金に滅さる（北宋徽宗、宣和7年1月）

さきに遼の天祚帝が、金を親征して敗れてから遼の国威地に墜ちたので、金軍之に乗じ頻りに南下して其の地を奪った。

時に宋の童貫は金の勃興を聞き、徽宗に勧めて、金と共に遼を夾み撃ち以てその侵地を回復せんとし、1120年宋と金の同盟成り共に遼を攻めた。

此の戦、南から南京を攻めた宋軍は、遼の王族、耶律大石（ターシ）に破られて進むことができなかったに反し、金の太祖は西京を取り南京を陷れたので、遼の天祚帝力尽き西夏に遁れようとして金軍に捕えられ遂に此年遼は九代・二百十年にして亡んだ。

▲ あい遼も　これが終りと　泣くもあり……1125

襲い伐たれて　あい遼国も　これが終と　泣くもあり……1125

1125年 西遼の建国（北宋徽宗、宣和7年）

遼は亡んだが其の王族の耶律大石は恢復に力を致し、前の年余党を率いて中央アジヤに遁れ、今のサマルカンド地方を定め、此年遂に都を吹河の上流、虎思斡耳朶（コスオルド）に奠めた。之を西遼の德宗と云い、西人は此国を黒契丹（カラキタイ）と呼んだ。此後西遼は1201年まで続いた。

▲ 耶律大石（エリターシ）　国（クニ）引越して　西に行き……1125

王の一族　耶律大石等が　国を捨げ　西に行く……1125

〔年記〕

1126（北宋 欽宗、靖康1）① 金太宗宋を攻む（靖康前役）
○ 高麗金の藩となる

1127年 靖康の変（南宋高宗、建炎1年）

〈北宋の二帝 金に囚わる＝靖康後役〉

さきに宋・金聯合して遼を攻めた時、金は勝って遼の地の大部を取り、宋は敗れて金に歳幣を約し僅に燕京（後の北京）附近の地を得た。それから金は宋の無力を知り侮って屢々之を侵したので宋の憂は前に倍した。

偶々宋に違約の事があったから、金の太宗は此の前年大挙して南侵し汴京に迫った。宋の上下大に恐れ、徽宗は已を罪して急に位を其子欽宗に譲り、蔡京等を斥け、

勤王の兵を募った。李綱等奮戦大に努めたが効なく、此年汴京陥り、金軍は宋の徽宗・欽宗並に后妃諸皇族等三千余人を捕えて北に還った。之を靖康の難と云う。

此時宋の二帝は金の五国城に囚われ、相ついで憂愁の中に死んだ。

▲ 鬼の手に　徽宗欽宗　身をもがき……1127

鬼に囚われ　悪運嘆き　徽宗欽宗　身をもがく……1127

〔年記〕

仝年			⑤ 宋の高宗、南京に即位す（南宋の起り）
1131	（南宋高宗、紹興1）		⑤ 秦檜宋の相となる
1135	（仝	仝 5）	⑤ 徽宗金に死す
1136	（仝	仝 6）	⑦ 程氏の学を禁ず。西遼耶律大石死す
1138	（仝	仝 8）	② 宋高宗、臨安に遷都（宋室南渡）
1140	（仝	仝 10）	⑦ 岳飛大に金兵を破る。李綱死す
1141	（仝	仝 11）	⑩ 岳飛投獄 ⑪ 宋、金の臣となる

1141年 宋の秦檜、岳飛を殺す（南宋高宗、紹興11年12月）
（秦檜の和議）

靖康変後金軍去って應天（河南）に即位した高宗（欽宗の弟）は性怯懦、その後名将宗沢の諫を斥け金軍を避けて江南に退き都を臨安（杭州）に遷して所謂宋の南渡を為し、河南・関中・淮北の地全部を失い国勢大に衰えた。

その後和戦の両論起り、軍人や学者は主戦論を唱え中にも岳飛の如き忠臣は北進して旧都附近に迫り金軍を破って殆ど河南の地を復しようとしたが、高宗は其の生母、韋氏が金に囚われて居たので頻りに和議を望み、宰相秦檜之を察して、此年岳飛を獄に下し先ず主戦論者を抑え、遂に歳貢を金に納めてその封冊を受け、東は淮水・西は大散関を国境として和議を結び、韋氏と徽宗の遺骸との送還を得た。

此間、秦檜は反対者を斥け岳飛を殺し、国内僅に小康を得たが宋人之を以て国辱となし挙怨悉く秦檜に集った。

▲ 刺青（イレズミ）の　忠義を斬って　怨まれる……1141

おのれ秦檜　あの入墨の　忠義斬ったと　怨まれる……1141

（附記）

岳飛の精忠

岳飛は相州の人、性沈厚で寡言、学に深く気節を尚び、徽宗に用いられて功を累ね、高宗の時戦功により帝の手記せる「精忠報国」の旗を賜った。彼は深く兵法に通じ為に金軍も恐れて「山を動かすは易く、岳家の軍を動かすは難し」と云い、その死を聞いては相賀して酒を酌んだ。

或人嘗て岳に向い「天下は何時泰平となるか」と問うた時彼は「文臣銭を愛せず武臣死を惜まざれば天下太平なり」と云った。金軍南下の時屢々之を破ったが、宰相秦檜は講和に害ありとして彼を獄に投じ遂に之を殺した。時に年39、その背には「尽忠報国」の四大字を入墨して居たと云う。

後、鄂王に追封せられ香華は今も墓辺に薫ると。

（年記）

1153	（南宋高宗、紹興23）		③ 金、燕に遷都し中京と改む
1155	（仝	仝 25）	⑩ 秦檜死す
1156	（仝	仝 26）	⑤ 欽宗金に死す
1161	（仝	仝 31）	⑦ 金、汴に遷都 ⑨ 金、大挙宋に入寇す ⑪ 宋将虞允文之を采石に破る
1162	（仝	仝 32）	蒙古に鉄木真（成吉思汗）生る

1165 (仝 孝宗、乾道1) 宋、金と和す
1198 (仝 寧宗、慶元4) ⑤ 偽学の禁を厳にす
1200 (仝 仝 6) ③ 朱熹死す (年71)
1201 (仝 、嘉泰1) 西遼 乃蠻に滅さる (3代77年)

宋代の文化

儒学
- 宋は武に劣り文に秀れた。漢唐の学者は訓詁を事としたが宋代には仏教殊に禅宗の影響を受け儒学を哲理的に取扱った。世にこれを宋学、性理学、格物究理又は道学と云う。
- 儒者には周敦頤(宋学開祖)、程顥・程頤・朱熹(宋学大成)陸九淵がある。

文学
- 古文復活 ― 欧陽修
- 学者 ― 曾鞏・王安石、蘇洵・蘇軾・蘇轍(＝三蘇)
- 以上六人に唐の韓愈・柳宗元を加えて唐宋八大家と称す、此外宋の文天祥・謝枋得も名高い。

美術
- 書道 ― 太宗書を好み奨励す、―蔡襄・蘇軾・米芾
- 絵画 ― 徽宗の奨励により盛 ― 李公麟・牧谿

史学
- 欧陽修と宋祁の新唐書(後唐劉昫の唐書改刪)
- 欧陽修の新五代史、司馬光の資治通鑑、朱熹の通鑑綱目
- 馬端臨の文献通考

宗教
- 仏教 ― 宋の太宗力を尽し僧を印度に派し経を訳し、大蔵経を出版し仏教又興った。
- 道教 ― 宋真宗・徽宗の信仰厚く盛あり

印刷
- 古代の書籍は皆写本、隋・唐頃から仏書の印刷始り、五代より北宋にかけ一般書籍又印刷され、南宋の時書肆現れ学問普及。
- 活版術は宋の仁宗の時発明され、はじめ膠を固め活字を造り、後、木、銅、鉛等で造った。之等の活字は朝鮮を経て我邦にも伝った。

紙幣
- 南宋の時始めて之を作り金に倣い、糸を以てもといせる交鈔と云う一種の紙幣を作った。

1206年 成吉思汗、蒙古に興る(南宋寧宗、開禧2年)
(鉄木真、オノン河上で即位)

蒙古人は外蒙古の斡難(オノン)・怯魯連(ケルレン)両河の上流地方に居た遊牧の民で、世々遼・金に属して居たが、宋の末、也遂該(エスガイ)の子に鉄木真(テムチン)と云う者が出、父殺されて後十三歳にして蒙古部の長となり、逆境に立って雄才大略を振い、遂に父の仇なる塔々兒(タタル)部を滅し、万難を排して蒙古の諸部を従え、当時按台山(アルタイ)附近を根拠として漢北に雄視して居た乃蠻部(トイマン)(突厥族)の長太陽汗(タヤン)を倒し内外蒙古の地を一統し終えて遂に此年、諸酋長を斡難河上に会し大汗(大帝)の位に即き成吉思汗(*Chingis Kan* = 強盛なる君主)と号した。

大汗時に年五十二之を蒙古の太祖と云う。

▲ 川水よ　我が名を流せ　日の隅 ……1206

斡難(オノン)河上に　汗成吉思が　湧いて出る日の　旗の風……1206

(年記)

1208 (南宋寧宗、嘉定1) ⑭ 宋、金と和す
1210 (仝 、仝3) ⑫ 蒙古金を侵す
1211 (仝 、仝4) 西遼亡ぶ
1214 (仝 、仝7) ⑦ 蒙古、金の燕京を囲む
1218 (仝 、仝11) ⑬ 金、和を宋に求む 許さず。乃蠻のクチュルク敗死

1219年 成吉思汗の西征(南宋寧宗、嘉定12年)
(―1225年迄)

▲ 君が名に　威光にかがやく　離々の草……1219

うてば蒙古の　かたきも散って　意気に猛いた　離々の草……1219

1220（南宋寧宗、嘉定13）蒙古軍 花剌子模を滅す
1222（　〃　，〃 15）⑫ 蒙古回々国を滅し印度に迫る
1223（　〃　，〃 16）⑬ 蒙古の将、速不台 欽察部を滅す
1224（　〃　，〃 17）蒙古軍南ロシヤに侵入、カルカ河畔の戦
1227（〃 理宗、宝慶 3）⑭ 西夏蒙古に滅さる（凡10代 190年）

1227年 成吉思汗死す（南宋理宗、宝慶3年12月）

成吉思汗はもと黒龍江の上流オノン河辺の蒙古から起った世界稀なる英雄である。

その頃塞外の諸民族は互に戦を事とし、婦人を奪い家畜を掠めるなど争の絶える暇がなかったから勇気ある者が推されて首長となるを例とした。

鉄木真の曾祖父哈不勒（葛不律）始めて汗を称し、その孫也速該は屢々東隣の塔々兒部と戦い、1155年大に之を破り、敵将帖木真を虜として帰った。時にその妻が一男子を生んだので、彼はその戦勝を記念せんが為に敵将の名をとって鉄木真と名けた。　鉄木真とは蒙古語で精鉄の意味だと云う。

鉄木真の幼時、父也速該が塔々兒部に殺されてからは部衆皆反き近隣からは攻められ、彼幾度か死生の間に出入し具に困苦を嘗めた。

やがて部長となり、漠北の乃満部長太陽汗を斃し、塔

塔兒部を滅し、成吉思汗となってから南下して西夏を降し、金を攻めて黄河以北を割かしめ、更に乃満部の屈出律を滅し国都サマルカンドを陥れた。　次で西征の軍を起し其の四子朮赤・察合台・窩闊台・拖雷等と共に西アジヤの花剌子模を滅し、印度に侵入し又別将哲別・速不台をして阿羅思（ロシヤ）をも侵さしめた。　かくして成吉思汗の西征は前後七ヶ年に亘り、やがて軍を東に班して再び南方経略に従い、此年西夏を滅し進んで金を討とうとしたが遂に病に罹り、此年十二月六盤山（甘粛省）南の軍中に死んだ。時に年六十六。

▲ 君が名は　胡砂吹く風に　舞い上り……1227

あわれ胡砂吹く　風とも消えて　君が此世の　幕を閉ず……1227

（附記）

成吉思汗の征服地

内外蒙古・満洲・支那本部の黄河以北・新疆・中西アジヤ・印度の西北・南ロシヤ等に亘る亦曾有の大範囲である。

1234年 金の滅亡（南宋理宗、端平1年1月）

蒙古では成吉思汗の死後、クリルタイ（Kuriltai）の決議によって第三子窩闊台が大汗となった。之を太宗と云う。太宗は都を喀喇和林に奠め、賢相耶律楚材を用い、父の志を継いで金を伐った。　金軍敗れ汴京陥って後その帝

哀宗は出奔して蔡州(河南)に拠り宋の援を乞うたが宋は却つて孟珙を将とし蒙古と同盟して蔡州を攻撃し之を陥れた。依て金は建国から此に至る九代百廿年で亡んだ。

▲ 金の国も　蔡州までは　続いて居……1234

あいそ(哀宗)尽きてか　金またたぶ　それは大そう(太宗)　罪おこと……1234

(年記)

1235 (南宋理宗、端平2) ⑧ 蒙古太宗、喀喇和林(カラコルム)を都とす

1236年　拔都の西征始る(南宋理宗、端平3年)
(―1242年まで)

西夏・金相ついで亡び高麗も亦蒙古に降って東方稍事おきを得たので、太宗は西方の征略を企て朮赤の子拔都(バツ)を大元帥とし老将速不台を副として此年五十万の大軍を以て欧羅巴に侵入せしめた。

蒙古軍は先ず阿羅思(オロス)に入りモスコウ・キエフを陥れて後各地を侵し、是より拔都は本軍を率いて匈牙利に向い、別軍は海都(ハイズ)を将として波蘭に入り、クラコウを取りシレシヤに進み、独逸の諸王族・騎士等の聯合軍をワールスタットに破り進んでブダペストを陥れ、ドナウを渡りてグランを取った。

欧洲諸国大に恐れ、ローマ法王は十字軍を起そうとしたが、偶々1241年太宗歿してその訃到り、拔都は急に軍を收めて東帰し自らボルガ河畔サライに留り、南露に欽察汗国(キプチャク)を建てた。かくて拔都の西征は1236年から1242年までであつたが欧羅巴諸国を驚倒せしめ大に東洋人の為に気を吐いた。

▲ 勝ちづけ　進む拔都軍　晝に夜に……1236

鬼を酢で食う　心も見せて　進む拔都軍　晝に夜に……1236

(年記)

1241 (南宋理宗、淳祐1) ⑦ 高麗蒙古に降る
1251 (　〃　、〃 11) 蒙古の憲宗 大汗となる
1253 (　〃　、宝祐1) ⑫ 忽必烈 大理を滅し吐蕃を降す

1254年　旭烈兀(フラグ)の西征始る(南宋理宗、宝祐2年)

蒙古の太宗の後、その子定宗(貴由(クユク))が位に即いたが、在位僅に三年で歿したので、太宗の一族はその従子失烈門(シラムン)を立てんとして成らず、拖雷の子蒙哥(マンダ)がクリルタイに推されて大汗となり憲宗と云った。

やがて憲宗は失烈門の叛を誅し、弟旭烈兀に命じて西方アジヤの経略に従わしめた。

旭烈兀は此年発して先ず強暴な木剌奚(ムラヒダ)を滅し次でバグダードを陥れ、大食国教主を滅しシリヤ地方を平げ帰途ダブリスに留って伊兒汗国を建てた。

▲ 憲宗が　西を旭烈兀に　衝かせけり……1254

亜細亜九める　心か憲宗　西をフラグに　つかせる……1254

(年記)

1256 (南宋理宗、宝祐4) 旭烈兀、ムラビタ(木剌夷)を滅す
1257 (　〃　、〃　5) ⑥ 蒙古の将、兀良合台、交趾を降す
1258 (　〃　、〃　6) ⑧ 旭烈兀 西域諸国を定む。伊兒汗国を建つ

1260年　忽必烈大汗となる (南宋理宗、景定1年3月)

(元の世祖―1294年没)

蒙古の憲宗は1258年弟忽必烈と共に宋を攻め翌年七月陣中に歿した。此後忽必烈の弟阿里不哥(アリグブカ)は喀喇和林(カラコルム)にあって大汗となろうとしたから、忽必烈は急に宋と和して北に帰り、開平(直隷)に至って此年大汗の位に上った。之を世祖と云う。この世祖は阿里不哥を攻めて之を降し都を燕京に遷し国号を立てゝ元と云った。

▲ 忽必烈(クビライ)が　日に(1294年)苦心して　和を謀る……1260

大きな蒙古を　擁いだ世祖　日々に苦心し　和を謀る……1260

(附記)

1. 忽必烈の読方

忽必烈はクビライともフビライとも云われて居るが おぼえ句では クとフ を注意しないと数が違って来る。

2. 元の国号

蒙古が「元」と国号を改めたのは1271年であって、従来支那の歴朝はその発祥地又は始封地を以て国号として居たが、世祖は始めて住字を以て国号をつけた。明・清二朝も亦之に倣った。

(年記)

1264 (南宋理宗、景定5) ⑨ 忽必烈、燕京に都す

1266年　海都世祖に反き自立す (南宋度宗、咸淳2年)

▲ これやこの　海都(カイドゥ)があげた　旗の風……1266

隠(オダ)やかでない　心に海都　世祖に　肱を張る……1266

1271年　蒙古国号を元と改む (南宋度宗、咸淳7年11月)

▲ 国の名を　蒙古が元と　あらためる……1271

改めにけり　国をば元と　蒙古世祖が　撰ぶ名に……1271

1275 (南宋恭宗、德祐1) マルコポーロ支那に来る ⑨ 文天祥勤王軍を起す。
1276 (　〃　、景炎1) ⑨ 元の伯顔、臨安を陥る
1278 (〃衛王、祥興1) ⑪ 文天祥 元に執えらる

1279年　南宋亡ぶ (南宋衛王、祥興2年2月)

(厓山の戦)

宋の国都臨安陥って後、宋の臣陸秀夫・張世傑等は恭宗の兄端宗を奉じて福州に拠り文天祥も之に会した。

然るに元軍来り攻めるに及んで、端宗は西走して程なく死に、天祥・世傑等亦敗れた。因って陸秀夫は端宗の弟、昺(ヘイ)を立てゝ世傑等と共に厓山に拠ったが、此年元将張弘範が兵を率いて水陸両道から攻めて宋軍を困しめるに及び、陸秀夫遂に意を決し漸く九歳の帝を負うて海に投じた。又張世傑は安南に奉る途中溺死した。かくて両宋合して十八代三百二十年間を保った宋室は茲に全く滅

んだ。

▲ 苦厓山　道踏迷う　陸秀夫……1279

運の厓山　これきり尽きて　道に涙の　陸秀夫……1279

1281年 元軍、日本に大敗す（元世祖、至元18年8月）

▲ 神風(カミカゼ)の　日本(ヤマト)の国の　おそろしさ……1281

（注意）日本史、弘安役を見よ

1282年 文天祥殺さる（元の世祖、至元19年12月）

文天祥は吉州（江西省）の人、博学能文にして忠義の心厚く常に宋室の復興を己が任とし、元軍来寇に当り奮然立つて勤王の軍を起した。臨安の陥った時元軍に執えられたが途中逃れて陸秀夫・張世傑等の軍に投じ諸所に轉戦した。然るに1278年再び蒙古に捕えられ厓山の役後大都に送られた。

元の世祖その人物を慕って屡々仕官を勧めたが、獄せらるゝこと三年文遂に従わず、此年刑せられ従容死に就いた。時に年四十七。有名な「正気の歌」はその獄中の作である。

▲ 国は破れ　やがては文も　殺されき……1282

命短し　道(ミチバ)は長し　世にもおちぢせぬ　君が文……1282

（年記）

1286（元世祖、至元23）元、緬国を征す
1287（〃　〃　〃24）元、交趾を征す
1294（〃成宗、〃31）① 元世祖死す ② 伯顔死す（年79）
1299（〃　〃　大德3）耶蘇教会堂を大都に建つ
1306（〃　〃　〃10）此頃留湖台汗国たぶ

1295年 マルコ・ポロ伊太利に帰る（元成宗、元貞1年）

マルコ・ポロは伊太利ベニスの人。1271年十七歳の時父に伴われて国を出立ち、1275年陸路支那に来て元の世祖に用いられ留ること十七年、官枢密副使に至り頗る功労があった。　のち元の公主が伊兒汗国に嫁するを送って海路ペルシヤに至り遂に此年伊太利に帰着した。

其後彼の祖国ベニスはゼノアと戦争し彼も一艦長として力を尽したが、不幸にして虜となり獄に繋がれた。

有名な東方見聞録は獄中つれづれの余り同室の者に東方の事情を話したものゝ記録で、その中に盛に日本や支那の富裕を説き西欧人の好奇心を刺戟した。この書日本を呼ぶにジパングウ（Zipangu）と云い、黄金無尽の国であると述べた。これ我国が欧洲に知られた初である。

（尚、西洋史1271年、マルコの出発を見よ）

▲ 見聞(ケンブン)を　牢でマルコが　述べるあり……1295

亜細亜旅して　聞き見た事を　牢でマルコが　述べきかす----1295

(年記)

仝年頃、　モンテ・コルビノ燕京に来る
1333（元順宗、元統1）⑥ 順宗即位 ○帖木兒生る
1353（　仝　、至正13）⑫ 朱元璋（明太祖）起兵
1356（　仝　、仝 16）⑰ 朱元璋、金陵により長国公と称す
1367（　仝　、仝 27）⑭ 朱子璋、張士誠を捕う ⑮ 律令を定む
⑯ 方国珍を降す

1368年　元亡び、明興る（明太祖、洪武1年）

元は世祖の時隆盛を極めたが、その死後内には海都の乱があり外は版図大にすぎて却って統一の便を欠き衰亡の兆が見え初めた。

すべて相続はクリルタイの決議によるので王の代の変る時には多少の乱と、擁立者の専権を残し、世祖が喇嘛教を尊信して国教としてから其の僧の跋扈甚しく、又多年戦争の結果政府の財政困難となり、遂には重税を課し交鈔を濫発して国庫の欠乏を救わんとして国民益々苦んだ。　世祖五世の孫順帝の時国勢振わず加うるに天災地変相ついで至ったので、今まで多年の悪政と、異族の専横に不平であった漢人は紅巾の賊乱を機として所在に起り遂に天下の大乱となった。

中にも朱元璋は郭子興の部将より起り、大都を攻めて

順帝を開平に逐い、此年遂に金陵（古の建康、後の南京）に即位した。之を明の太祖、洪武帝と云う。

かくして元は世祖即位から十一代百九年（元号を立てからは98年）太祖の建国から数えて十五代百六十三年にして亡んだ。

▲ 朱元璋（シュゲンジョウ）が　滅ぼす元の　夢の跡-----1368

今は蒙古も　朱に染みはて　ほんに果敢い　世じやものを----1368

1369年　帖木兒（チムール）興る（明太祖、洪武2年）

蒙古の疏族、帖木兒（タメルラン）は、1326年中央アジヤの南、碣石（ケシュ）に生れた。廿五歳の頃、西察合台汗国に仕えて志を得ず、去って諸国を流浪し具に艱難を嘗めたが、その雄才大略よく運命を制して、遂に西察合台汗国を滅し漸次附近の地を併せて中央アジヤを平定し、此年都を撒馬兒罕（サマルカンド）に奠め、益々その力を遠境に振った。

▲ サマルカンドに　振うチムルの　雷の声-----1369

英者チムール　サマルカンドに　振う腕ぶし　雷の声-----1369

(年記)

1373（明太祖、洪武6）⑪ 大明律を定む
1380（　仝　　仝 13）⑱ 宗濂死す
1387（　仝　　仝 20）⑮ 湯和に倭寇を防がしむ
1390（　仝　　仝 23）チムール欽察汗を破る

1392年 李成桂、朝鮮王となる（明太祖、洪武25年7月）
（高麗の滅亡）

高麗は久しく元に服属して居たが、元末明初に至ってその国勢大に衰えた。此時に当り、高麗の臣李成桂と云う者倭寇を撃って功あり、民心を収めて勢を得、高麗王辛禑を廃し其の子昌を立てた。程ふく又之を廃して恭讓王を立てたが、此年遂に自立して王位に即き漢城（京城）に都した。之を朝鮮の太祖と云う。かくて高麗は半島一統から四百五十六年にして亡び、李朝の世となった。

▲ 成桂（セイケイ）が　乱を鎮めて　国を奪（ト）り-----1392

（年記）打った倭寇に　その名をあげて　李氏は朝鮮　国の王----1392

1395（明太祖、洪武28）帖木兒、伊兒汗国を定む
1398（〃　　〃　31）㊄ 明太祖死す。帖木兒印度に侵入す
1399（〃 惠帝、建文1）㊐ 靖難の軍起る（燕王棣、兵を起す）

1402年 明の成祖の簒立（明惠帝、建文4年6月）
（靖難の役）

明の太祖は微賤から身を起して元を滅し、群雄を服し前代の弊政を改め・制度を整え・風俗を矯正するなど、意を政治に用いたが、簒奪を憂えて功臣老将を殺し、諸子を要地に分封して帝室の藩屏としたから、諸王の勢張り及つて帝室の禍を招いた。

太祖が死んで後、惠帝（建文帝）が立ち諸王の大を恐れて、その勢を殺がんとするに及び、予てから野心を懐いて居た帝の叔父燕王朱棣（テイ）は遂に兵を燕京に起し君側の奸臣を除くを名とし、靖難の軍と号して金陵を攻めた。帝軍は、さきに太祖が功臣宿将を多く殺したので既に勢おく、且つ金陵の宦者等敵に内通した為、此年金陵陥り、惠帝出奔し燕王代って帝位に即いた。之を明の成祖（永樂帝）と云い、此乱を靖難の役と云う。

▲ 立上り　わけふく成祖が　国を奪り----1402

燕王朱棣（テイ）が　立ち塞がって　わけふく甥御の　国を奪る----1402

（附記）

1. 北京遷都　成祖は燕京を北京と改め後之に移り、旧都金陵を南京と云った。

2. 永樂錢　成祖の時造られた永樂錢が足利以後我国に行われた。

3. 方孝儒の節義

孝儒は惠帝の侍講となり、大儒の誉が高かった。成祖が金陵を陥れた後之を登用しようとしたが彼は従わなかった。後成祖は彼に筆を授けて、登極の詔を書かせようとすると、彼は直ちに「燕賊簒国」の四大字を書き筆を投じて罵ったので、帝怒って之を殺し、其災一族門生八百人に及んだと云う。

1405年 鄭和の南洋航海始る（明成祖、永楽3年6月）

明の成祖大略あり内政を整えると共に頻りに外征の師を起し、タタール、瓦剌の諸部を征して大勝し、又安南の内乱に乗じて之を伐って併合した。

成祖はまた惠帝の海外逃亡を疑い、その踪跡を捜り、兼ねて国威を海外に輝かさんと、此年宦者鄭和に命じ、水軍四万を率いて南海を探らしめた。

鄭和は此後廿五年間に七回の航海をふし、南海諸国を歴訪し遠く波斯湾に達した。かくて占城（チャンパ）・真腊（シャム）・爪哇（ジャバ）・ボルネオ・錫蘭等三十余国来貢し大いに明の国威を南海に輝かした。

▲ 鄭和等が　渡り行くなり　南洋に----1405

あとを追かけ　鄭和の船が　渡り行くとか　南洋に-----1405

1405年 帖木兒死す（明成祖、永楽3年）

帖木兒は都をサマルカンドに奠めて後、大いにその腕を振って四方を伐ち、先に西察合台汗国を滅し、即位後東察合台汗国を併せ、次で西征して伊兒汗国を滅し、欽察汗の背くに及んで南ロシヤに入って之を破り、次で印度を征し、又1402年小アジヤのアラゴンに於て、トルコ皇帝バジヤジッドの大軍を破って皇帝を擒にした。

かくてアジヤの大半を平定し勢益々加ったので、更に明を滅して世界統一の理想を実現しようと大挙東征の軍を起したが途中熱病に罹り、此年オトラル（シルダリヤ河畔）に死んだ。時に年七十一歳。

実に彼は英偉の才を抱いて深く成吉思汗の大業を慕い世界統一を理想とし、常に「天に二日ふし地に二王あるべからず、世界は大ふれど我が大望に比するに足らず」と云って居たが英才中道にして仆れ、幾もふくその帝国も亦瓦解した。

▲ 帖木兒の　我が大望も　なかばにて----1405

落つる露かや　チムール起たず　かひし望も　ふかばにて-----1405

（年記）

1407（明成祖、永楽5）⑤ 明軍安南を伐ち黎季犛父子を擒にす
1410（〃　〃 8）② 成祖親征、韃靼を伐つ
1413（〃　〃 11）朝鮮八道を定む
1414（〃　〃 12）⑥ 明、衛拉特（瓦剌）を破る
1418（〃　〃 16）大越国興る
1419（〃　〃 17）明、倭寇を遼東に破る
1421（〃　〃 19）成祖都を金陵（南京）から北京に遷す
1428（〃宣宗、宣德3）安南独立す
1430（〃　〃 5）鄭和の南洋航海終る
1446（〃英宗、正統11）朝鮮 諺文を作る

1449年 土木堡の変（明英宗、正統14年7月）

（明帝瓦剌に捕えらる）

瓦剌は成祖に破られたが其後再び強勢となり天山南路及び外蒙古の西半を占領し殊に也先が部長となるに及び元の遺族を擁して頻りに明の北辺を侵した。

此年大挙して明に来り寇したので、英宗は王振の勧めに従い親征して土木堡（直隷省）に戦い大敗して執えられたが間もなく和議成り僅に放還された。

▲ 土と水に　とっちめられて　樂でなし----1449

瓦剌伐つべく　立ったが明は　ついに土木に　刎もおくて----1449

（年記）

1450（明景宗、景泰1）㊄ 瓦剌和を請い ㊅英宗還る
1454（　仝　　仝 5）⑩ 也先殺さる（瓦剌衰え韃靼又盛大）
1470（〃憲宗、成化6）韃靼の達延可汗となる
1480（　仝　　仝 16）欽察汗国、イバン四世に滅さる

1498年 バスコ・ダ・ガマ印度航路を開く

（明孝宗、弘治11年）

マルコ・ポウロの東方見聞録に刺戟されて、欧羅巴人の東洋遠征を企てる者が多くなった。当時航海に羅針盤を使う事も行われたので、屡々大膽な遠洋航海が試みられ中にも葡萄牙と西班牙とは競って新地発見、新航路の探険に従った。偶々1492年コロンブスが米大陸を発見

したので、葡萄牙はその功を争わんと1497年同国人、バスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama）に命じて印度に至る新航路を探険せしめた。依ってガマは三隻の船を率いて本国を発し、途中風浪や船員の反抗あるので困難したが、遂に喜望峯を廻り印度洋を横断して、此年始めて印度の西岸カリカット（Calicut）に到着しポルトガル政府多年の宿望を遂げた。のち国王は彼を貴族に列し、アドミラルの称号を與え年金を贈った。

▲ 東印度に　樂々ガマが　やって来る

印度迄来て　遂にはガマが　樂に欧亜を　行き来する----1498

（年記）

1510（明武宗、正德5）葡国印度總督アルブケルケ印度を取る
1513（　仝　　仝 8）西国人、バルボア太平洋を発見す
1516（　仝　　仝 11）葡人始て広東に来る
1517（　仝　　仝 12）葡国の使始て明に来り通ず
1519（　仝　　仝 14）㊐王守仁（陽明）寧王の反を討平す
　　○此年葡人マゼラン世界一周の途につく

1521年 葡人マゼラン世界周航途上に殺さる

（明武宗、正德16年）

ポルトガル人マゼランは西班牙王の命を受けて1519年5月世界周航の途に上り、西班牙を発し大西洋を横断して南米に直航し遂に所謂マゼラン海峡を通って太平洋に出たが糧食欠乏して船中の獣皮を噛み、鼠を捕えて食う

ふど困苦の後、此年三月フイリッピン群島に着き、疲労を休めて居る中土人の襲撃に遭い彼は毒矢に中って死んだ。しかしその部下は、喜望峰を廻って翌年本国に帰着した。

出発の時は五隻の船と二百三十九人の乗組であったのが無事帰ったのは二十一人、船は只一隻のみ帰航し得た。これが世界周航の始である。

▲ 長旅に 殺されマゼラン 浮ばれず----1521

あわれマゼラン 長旅中に 殺されるとは 因果もの---1521

1526年 莫臥兒帝国興る（明世宗、嘉靖5年）

帖木兒の死後その大帝国は忽ち瓦解し、アラル海の北方に居た月即別のシバン汗はサマルカンドを陷れて布哈拉・基華の二汗国を建てた。

帖木兒五世の孫バベルは之が回復を図って成らず鋒を轉じて印度に入り、その地を征服してデリィに都し、第三蒙古帝国とも云うべき莫臥兒（蒙古の轉訛）帝国を建てた。

▲ 脱け出して 国を印度に 引くバベル----1526

腕の今ムルの 後ムガールの 国を印度に 張るバベル----1526

（年記）

1528（明世宗、嘉靖7）⑦ 王守仁 両広の諸蛮を平ぐ
1529（ 仝 仝 8）① 王守仁 死す
1536（ 仝 仝 15） 葡人マカオを占領す

1542年 サビエル、ゴアに来る（明世宗、嘉靖21年）

▲ 西の耶蘇 説くよザビエル 此のゴアに---1542

エスイタ宗派の 名もザビエルが 説くよ教を 此のゴアに---1542

1549（明世宗、嘉靖28）⑦ 倭寇浙東を侵略す
1552（ 仝 仝 31）⑥ 倭寇浙東に寇す、サビエル客死す
1553（ 仝 仝 32）③ 汪直、倭寇を誘って海辺諸郡を侵す
1555（ 仝 仝 34）⑤ 俞大猷等大に倭寇を破る
1556（ 仝 仝 35） アクバル大帝の即位

1557年 葡人マカオに商館を置く（明世宗、嘉靖36年）

▲ 西人の 根城は支那の 媽港あり----1557

腕をアジヤに のばした葡人 根城と定めたは マカオあり---1557

1563年 倭寇明に破られ勢衰う（明世宗、嘉靖42年）

元寇以来、日本人の海事思想進み、吉野朝廷の時代、内地に志を得ない武士など西南の辺民と合して支那や朝鮮の沿岸を侵掠した。之を倭寇と云う。倭寇は小船に乗り常に八幡大菩薩の幟を立てゝ横行したから支那人は又八幡賊とも云った。

彼等は多く軽装し甚だしいのは裸体の侭で日本刀を携え、進退の合図に法螺を用い、動作敏捷奇計を為し、伏兵を設け毎に寡を以て衆に勝った。

されば支那人朝鮮人大に之を恐れ、高麗・明ともに度々我国にその禁止を乞い、殊に明の成祖は足利義満と修交

して此害を逃れんとし、義満は固く之を禁じたので勢稍衰えたが、足利氏亡んで再び盛とぶり、明の世宗の時殊にその害が甚しかった。依て此年、俞大猷・戚繼光等命を受け伐って之を平海衛（福建省）に破った為これから倭寇の勢衰え僅に台湾に拠り近海に出没して居たが、豊臣氏が禁令を出してから全く影をひそめた。

▲ 撫でる胸　始めて倭寇が　静って---- 1563

恐ろしかったと　撫でるよ胸を　始めて倭寇が　鎮まって---- 1563

（年記）

1565　西班牙人フイリッピン諸島占領（明世宗、嘉靖44年）

▲ 集取って　フイリッピンを　根城にし---- 1565

イスパニヤでも　のばすか腕を　フイリッピンをば　根城にて---- 1565

1571（明穆宗、隆慶5）西班牙人マニラ政廳をおく

1579年　露国のシベリヤ侵略（明神宗、万暦7年）

ロシヤは蒙古の拔都に征服せられてから二百余年間、その欽察汗国に隷属して居たが、モスコウ大公イワン三世の時、欽察汗国の分裂に乗じ1480年之を滅して独立した。是からモスコウ大公の勢盛とぶり東ローマ帝国傳来の二頭鷲の旗印を襲用し、その孫イワン四世は全く国内を統一し自らツァールと称した。

尚イワン四世は、ドン河の流域に居たコサック部を征服したが、その部長エルマクは此年衆を率いてウラル山を越え山の東のシビル地方及びオビ河沿岸を征服して之を帝に献上した。

これ実に露人東侵の始であってシベリヤの名称も亦このシビルの名によって起ったのである。

▲ 乗り越えて　先ずシベリヤを　露が奪い---- 1579

エルマク部長が　乗りこすウラル　先ずはシベリヤ　露に奪う---- 1579

（年記）

全年、英人始めて印度に来る

1580（明神宗、万暦8）マテオリッチ（利瑪竇）支那に来る

1583年　満洲奴兒哈赤興る（明神宗、万暦11年5月）（清の太祖）

▲ 奴兒哈赤が　勇に満洲　従える---- 1583

愛親覚羅氏に　奴兒哈赤出で　勇に満洲　従える---- 1583

1587（明神宗、万暦15）⑥ 奴兒哈赤始めて国政を定む

1591（〃　〃 19）① 奴兒哈赤、長白山 鴨緑江地方侵略

1592（〃　〃 20）豊臣秀吉朝鮮を伐つ（日本史を見よ）

1595（〃　〃 23）蘭人始めて印度に来る

1600年　英人東印度会社を建つ（明神宗、万暦28年）

英吉利人はポルトガル・イスパニヤ人等より稍遅れて東洋に指を染め、1579年始めて印度に来り、偶々葡国衰に乗じて利権を張り、遂に此年東印度会社を建て、

東洋貿易を開いた。しかし支那及日本との貿易は、葡・蘭両国人に妨げられて目的を達し得なかったので専ら印度貿易に従った。

▲ 東印度に　笑って坐る　プレテン兒……1600

イギリス人等が　ほくほく顔で　笑って坐った　綿の国……1600

(年記)

1601（明神宗、万暦29）利瑪竇、北京に耶蘇会堂を建てる

1602年　蘭人、東印度会社を建つ（明神宗、万暦30年）

▲ 東印度に　若いオランダ　会社建て……1602

オランダ人等が　東印度に　若い翼の　会社成る……1602

1604（明神宗、万暦32）佛人東印度会社を建つ、

1616年　奴兒哈赤（清の太祖）の建国（明神宗、万暦44年）

蒙古人が金を滅してから満洲族の勢久しく振わなかったが、明の神宗の時、愛親覚羅部から部長奴兒哈赤が出て雄略あり、諸部の争乱に乗じ之を征して次第に満洲族を統一し、遂に此年自立して皇帝と称し国を後金と号した。

これ即ち清の太祖である。

この後、明の神宗は朝鮮と結んで之を攻めたが、太祖は却って之を薩尔滸山に破り進んで瀋陽（奉天）を取って此処に都を築き清朝三百年の基を開いた。

▲ 鋒とりて　愛親覚羅が　旗をあげ……1616

一の帝と　鋒とり立った　愛親覚羅氏の　旗の風……1616

(年記)

1619（明神宗、万暦47）サルフの戦

1619年　蘭人、バタビヤ府を起す（明神宗、万暦47年）

和蘭はもと西班牙領であって、その国人は葡・西両国から東洋の貨物を仕入れ、之を欧羅巴諸国に売るのを業として居たが、1581年和蘭が独立を宣言してから直接東洋貿易に従い、その経営着々効を奏し1602年東印度会社を建て、此年ジャバ島のバタビヤに総督府を置いて根拠地とし、1623年には南洋から英人を逐い、翌年台湾に拠り、又それより前1609年から日本と通商し、盛に支那や日本と貿易して遂に葡・西二国を圧倒し東洋の商権を握った。

▲ 府をバタに　オランダ人が　利権張る……1619

腕によりかけ　府のバタビヤに　オランダ人等が　利権張る……1619

(年記)

1622 (明熹宗、天啓2) アダム＝シャール(湯若望)支那に来る
1623 (〃 〃 3) 蘭人、南洋より英人を逐う

1624年 蘭人、台湾を占領す (明熹宗、天啓4年)

▲ フオルモサ こゝをオランダ 只で取り……1624

オランダ人等が 踏み段一つ 越えて来たぞえ 台湾に……1624

1625 (明熹宗、天啓5) ③ 満洲の太祖 瀋陽に遷都
1627 (〃 〃 7) ① 満洲の太宗の朝鮮征伐
1631 (〃 毅宗、崇禎4) ⑥ 李自成乱を作す

1636年 満洲の太宗、国を清と改む (明毅宗、崇禎9年4月)

満洲の太祖が1626年に死んでから子太宗立ち、よく父の遺業をつぎ朝鮮を服し 又 漠南蒙古諸部の争乱を鎮め、勢強く遂に此年 国号を清と改めた。

▲ 戈(ホコ)に漠南 静めて清が 幅きかせ……1636

意気も太宗 振った満洲 清と名のって 幅きかす……1636

(年記)

1637 (明毅宗、崇禎10) 朝鮮清に降りその封冊を受く
1639 (〃 〃 12) 英人マドラスを取る
1640 (〃 〃 13) ④ 李自成河南に走る
1642 (〃 〃 15) 清更に漢軍を分って八旗とす

1644年 闖賊 李自成北京を陷る (明毅宗、崇禎17年3月)

▲ 北京(ホッケイ)は 闖賊(チン)李氏に 取られけり……1644

勢(イキオイ)尽きては 滅びの毅宗 闖賊李自成に 仆されて……1644

(注意) 此年を明の滅亡年代と見る人もあり。

仝年. 史可法等福王を奉じて帝とす ○清世祖北京に遷都
1645 (明福王、弘光1) ⑤ 清兵福王を擒にす ⑤ 清、剃髪令を下す
⑦ 李自成自殺す
1646 (明唐王、隆武1) ⑧ 清兵唐王を執う、○鄭芝龍 清に降る
1658 (〃 永明王、永暦12) 英明皇帝 アウランゼブ即位

1661年 鄭成功 台湾に拠る (明永明王、永暦15年10月)

▲ 滅び行く 日を復さんと 腕をふで……1661

あわれ成功 滅びの明の 日をば復そと 腕を振る……1661

元・明の文化

- 儒学
  - 学風
    - 元は武を以て興り、学問は余り盛でないが、程朱の学が行われ、又独特の戯曲・小説を出した。
    - 明の成祖が四書五経の大全を作ってから程朱学は益々成におった。 後、王守仁(陽明)が出て宋の陸九淵の説に基いて良知良能を説き又知行合一を主張し所謂陽明学を起し学界一変した。
  - 学者
    - 元代＝馬端臨、金履祥、許衡、吳澄、劉因
    - 明代
      - 初期＝劉基、宋濂、方孝儒
      - 末期
        - 河東派一 薛瑄、吳與弼(程朱学)
        - 姚江派一 王守仁(良知良能説＝陽明学)
- 文学
  - 詩文
    - 元代＝元好問、楊維貞、虞集
    - 明代
      - 高啓、李夢陽
      - 宋濂、方孝儒、李攀龍、帰震川
  - 戯曲
    - 元代＝西廂記(王実甫)、琵琶記(高則誠)
    - 明代＝牡丹亭、還魂記(湯顕祖)
  - 小説
    - 元代＝水滸傳(施耐庵)、三国志演義(羅貫中)
    - 明代＝西遊記、金瓶梅
- 美術工芸
  - 書家
    - 元代＝趙子昂
    - 明代＝文徵明、董其昌
  - 画家－明代＝沈周(書画) 仇英(書画)
  - 磁器＝明代の発達、江西より多く出す、又七宝行わる

科学 ― 元代 ― 郭守敬、李冶

宗教
- 佛教 ― 佛教及 道教共に衰う
- 喇嘛教の流行
  - 紅教 ― パスパ八思巴
  - 黄教 ― ツオンカパ宗喀巴
- 回教の傳来 ― 元初支那に入り清真教と呼ばる
- 基督教

第四史期

1661年 明亡ぶ、清の一統（明永明王、永暦15年12月）

清の太宗は朝鮮を服し更に南下して明の北辺に迫ったが、時に明は毅宗位にあり、祖父神宗の時から国政紊れ国民苛税に苦んで居たので流賊各地に蜂起した。中にも陝西から起った李自成は勢尤も強く1644年北京に乱入したので、毅宗は遂に城中の煤山の辺に立ち遥に皇城を望んで叫喚の声をきゝ悲涙を呑んで自ら縊れて死んだ。明興ってより十七世二百七十七年後のことである。

その時清では太宗死んで其子世祖（順治帝）立ち伯父睿親王之を輔けて明を攻め、明将呉三桂と山海関に対峙して居たが、明滅んで呉三桂の降を許して共に李自成を伐ち支那の北部を平定し都を北京に遷し、翌年自成を自殺せしめ弁髪令を下した。

明の遺臣史可法等は毅宗の従弟福王を南京に立てゝ回復を図ったが敗死した。次で唐王は福州に、桂王は廣西に擁立せられたが皆敗れ、ついに桂王緬甸に奔って捕えられるに及び、茲に明は二十世二百九十四年で全く滅亡し清は天下を一統した。

▲ 日も月も　悲涙にくもる　運の果……1661

あわれ明朝　日も亦月も　光り失う　運の果……1661

(附記)

鄭成功

鄭成功は鄭芝龍の子で、母は我が国平戸の人田川氏の女である。成功は初め父芝龍と共に唐王に仕え明朝の回復を図った。唐王成功を愛し国姓朱を賜い名を成功と改めしめたから世呼んで彼を国姓爺と称した。

のち父芝龍が清に降った時之を諫めて用いられず、遂に義兵を起し魯王を奉じて勢盛であったが後敗れて台湾に移り和蘭人を逐うて安平城に拠り、制度を設け産業を奬め、フイリピン征伐を思い立つうち種々画策する所あったが1662年5月年僅に三十九才で病死しその志を果さなかった。

今台湾の県社開山神社に之を祀る。

(年記)

1663 (清聖祖、康熙2) ロシヤ人 アルバジン城を築く
1664 (仝　　仝 3) 鄭経台湾に奔る
1669 (仝　　仝 8) 清天主教を厳禁す

1673年　三藩の乱起る (清聖祖、康熙12年7月)

(呉三桂挙反す)

さきに清の世祖は明の降将、呉三桂を雲南に尚可喜を広東に、耿継茂を福建に封じて明の遺族を鎮めたが、その勢のあるのを憚って、世祖の子聖祖(康熙帝)は之に対して窃に備える所があり、三藩も亦安んじなかった。

遂に此年、呉三桂先ず明朝回復を名として兵を挙げたので、福建の耿精忠、広東の尚之信等之に應じて勢大に張り忽ち江南一帯を従えたが、やがて精忠・之信は清軍に圧せられて降り、呉三桂独り屈せず1678年には人心収攬の為め自ら皇帝と称し国を大周と云った。しかし間もなく三桂病死しその孫世璠家を継いだが次第に勢を失って1681年遂に自殺し、八年に亘る大乱始めて鎮定した。

▲ 八ケ年　南に荒れる　三大藩……1673

腕が鳴るとて　八年程も　南荒らした　三桂等……1673

(年記)

1674 (清聖祖、康熙13) ③耿精忠反し呉三桂に応ず
○仏人ポンジシェリイ占領
1676 (仝　　仝 15) ④尚之信反し呉三桂に応ず
1678 (仝　　仝 17) 閏8 準ガル部 天山南路を侵す ⑧呉三桂死
1680 (仝　　仝 19) 蘭人 印度の阿片を支那に輸入す

1681年　三藩の乱平ぐ (清聖祖、康熙20年10月)

▲ 八年で　やっと三藩　往生し……1681

一本一本　ひきぬく聖祖　やっと三藩　緒が切れる……1681

1683 (清聖祖、康熙22) ⑥施琅台湾を伐つ ⑦鄭克塽降り台湾清領となる。清兵露兵をアルバジン城に囲む
1685 (仝　　仝 24) ⑤清軍アルバジン城を復す。仏兵シャムに侵入。
1686 (仝　　仝 25) 露兵再びアルバジンの旧址に拠る
1687 (仝　　仝 26) 清・露講和の為、露使ゴロビン来る

1689年　尼布楚(ネルチンスク)条約成る (清聖祖、康熙28年11月)

ロシヤは十六世紀末からシベリヤ経営に従い、漸次東進して黒龍江畔に出で、アルバジン城に拠って益々東方

に手を伸して居た。　当時清は南方の平定に専らで北辺を顧るに遑なかったが、聖祖（康熙帝）が三藩の乱を平げてからは北辺の防備を厳にし、兵を発してアルバジン城を陥れて露人を逐い、次で書を露のピィター（ペトロ）大帝に送って国境を定めん事を求めた。

依て此年、清の全権索額図（ソエト）は露の使節ゴロビンと、シルカ河畔のネルチンスクに会して国境を議定し、その結果露国は黒龍江南の侵地をすて、外興安嶺を以て両国の境とした。

▲　果は露と　やがて聖祖が　領地（リョウチ）定め……1689

あとの為にと　はてピーターが　やがて聖祖と　領地定め……1689

（年記）

1696（清聖祖、康熙35）帝、ガルタン親征（蒙古清領とふる）
1707（　〃　　〃 46）アウランゼブ死す。露、カムチャツカ占領公布
1710（　〃　　〃 49）康熙字典勅撰（1716完成）
1720（　〃　　〃 59）㉔ 西藏、清に降る
1724（〃 世宗、雍正 2）天主教の禁。駐藏大臣を置く
1727（　〃　　〃 5）⑦ 恰克図条約成る
1744（〃 高宗、乾隆 9）英人クライブ印度に表る

1757年　プラッシーの戦（清高宗、乾隆22年6月）

（印度に於ける英・佛の争）

冀臥兒帝国衰えその諸侯分裂するに当り、英仏二国は競って印度を侵略し、遂に両国相争うに至った。

初めフランスの印度総督ジュプレックスは次第に自国の勢力を拡張し南敵英人を圧倒したので、英吉利の利権は一時危くなったが其時、英国東印度会社の書記クライブ（Clive）は決然立って軍に従い、1751年佛兵をアルコットに破り、カルカッタを奪い次で此年、佛人とベンガル侯との同盟軍七万を、僅に三千の兵を以てプラッシィの野に破り、英人の印度に於ける威権を確立した。故に史家は此の戦を以て英領印度の起原として居る。

クライブは1743年、彼が十八才の時イギリス東印度会社の書記として印度に赴いたが、固より書記に甘んじなかったから不平の余り自殺を企てた事が二度もあった。彼がプラッシーの野に廿三倍にも余る大敵を打破って回天の事業を成し得たのは其の決死の意気を以てしたからであろう。

▲　もう我慢　ならぬとクライブ　眼には剣……1757

英と佛とが　もみ合う印度　中にクライブ　身を起す……1757

（年記）

公年　準ガル（天山北方）清の有とふる
1760（清高宗、乾隆25）② 天山南路清に属す（回部平定）
1761（　〃　　〃 26）① 英人ポンジシェリィを取る
1769（　〃　　〃 34）⑦ 緬甸清に朝貢す
1774（　〃　　〃 39）ヘースチングス印度総督とふる
1786（　〃　　〃 51）⑫ 鄭華シャム王とふる。阮文惠兄弟の安南統一

1802年 阮福映の越南建国（清仁宗、嘉慶7年）

黎利の建てた大越国はその後、大越と広南の二国に分れ相争うこと百八十年に及んだが、1786年阮文岳と云う者その弟阮文惠と共に兵を起し、先ず広南国を滅し、次に大越国を倒せて安南を一統した。この時もとの王族阮福映は暹羅に逃れて援を求め回復を図ったが成功しなかった。　然るに明末清初の頃から佛国の宣教師が来て安南に布教する者が多かったので、福映は佛国の援により再びその回復を計り、佛の宣教師ピニョウの勧に従い、若し事成らば化南島を割き、且つ通商を許すことを約した。

偶々国王阮文惠死んで国内の乱れたのに乗じ、遂に此年福映は兵を起して安南を一統し、清の封冊を受け越南国を建てた。之を越南の嘉隆王と云う。

▲ 弓の業　阮福映が　国を建て……1802

安南一統　漸く成って　阮の福映　国を得つ（越）……1802

（年記）

1815年　阿片煙の輸入厳禁（清仁宗、嘉慶20年3月）

▲ 世に令す　阿片輸入は　ふらぬぞと……1815

阿片毒の毒　世の災よ　命惜しけりや　うむな人……1815

1839年 阿片戦争起る（清宣宗、道光19年4月）

英国の東印度会社は印度に勢力を得てから、その特産ふる阿片を盛に支那に輸入した。　清人はその為に多くの金銭を費し・時間を失い且つ健康を害うことが甚しかったので、仁宗以来屢々之を禁じたが更にその効がなかった。　然るに前年欽差大臣となった林則徐は此年宣宗の命を受け、阿片問題を根本的に解決するの任を帯びて広東に行き、英商に厳談して阿片を出させようとしたが、英商之を隠した為め則除は直にその二万余函を没収し悉く之を焼き次でその通商を禁じた。これ阿片戦争の起りである。

▲ 焼きすてゝ　清しく笑う　林則徐……1839

阿片奪うて　焼く身はまこと　清しかったろ　林則徐……1839

1842年 南京条約成る（清宣宗、道光22年8月）
（阿片戦争終る）

阿片焼却の事により英人大に怒り、損害賠償を求めて拒まれたので、英将ブレーメルは政府の命により、貿易保護を名として軍艦を率い、広東・厦門・寧波等の諸港を封鎖し次で南京に迫った。　清朝遂に屈し、耆英（キエイ）・伊里（イリ）

布等を南京に遣し、此年　英のポッチンジャーと和を議せしめ、清国は　(1)香港を英国に割き　(2)償金二千百万弗を拂い　(3)上海・寧波・厦門・福州・広東の五港を開き(4)対等の交を結ぶ。等の条件により和議を結んだ。之を南京条約と云う。

▲ 云うことを　手をついて聞く　耆英(キエイ)たち……1842

阿片戦争　四年で終り　ついに英女の　講和成る……1842

〔年記〕

1844（清宣宗、道光24）米国及佛国と条約を結ぶ

1847年　ムラビヨフ東部シベリヤ總督となる（清宣宗、道光27年8月）

▲ やって来て　東部治める　ムラビヨフ……1847

牧めどったり　やがてはロシヤに　東シベリヤ　ムラビヨフ……1847

仝年 ⑧ 回匪の乱

1850年　長髪賊の乱起る（清宣宗、道光30年6月）

清朝が阿片戦争に敗れてその威厳の衰えたのに乗じ異族の統治を喜ばないもの等、所在に乱を思った。

時に洪秀全と云う者、基督教を奉じて愚民を惑わし、遂に自ら耶蘇の次弟と称して此年乱を広西に起し、清を滅し漢を興すと呼号して人心を得、国号を立てゝ太平天国と称した。その徒は皆辮髪せず髪を蓄えて居たので長髪賊と云い勢振った。

偶々宣宗死んで文宗位に即いたが、その代変りの際に乗じ賊は湖南を略して長江に出、南京を陥れて之に拠り、又別に北京方面を窺がした。

当時八旗兵・緑旗兵などの官兵は全く衰えて用を為さなかったので、文宗は天下に詔して大に勤王の兵を募った。　此時、湖南の人曾国藩は郷勇（郷党の義勇兵）を率いて賊を伐ち、その弟曾国筌や胡林翼・左宗棠・李鴻章等相次で勤王の兵を挙げ所在に賊軍を破ったが賊勢尚強く容易に之を鎮めることはできなかった。

▲ 耶蘇(ヤソ)の親(ミ)を　名のって秀全　悪(ワル)を極め……1850

阿片戦から　弱った支那に　長い髪した　わるい賊……1850

（附記）

長髪賊の平定

長髪賊の反乱中、清朝は偶々、英船アロウ号事件により英・仏両国と争ったが、1860年の北京条約により和成り、その後は専ら内乱平定に力を用いた。

文宗の子穆宗の時、米人ワルド・英人ゴルドン等洋槍隊を率いて官軍を援け、曾国藩又大に奮戦して南京を攻めるに及び秀全自殺し城陥り余党悉く平ぎ、前後十五年に亘る大乱全く平定した。時に1864年である。

〔年記〕

1850（清宣宗、道光30）⑪ 林則徐死す

1858年　愛琿条約成る（清文宗、咸豊8年）

尼布楚条約の後、露国は一時南下の鋒を收めて専ら通商の利を計り、1727年恰克図条約を結んで北京に公使館を置き好誼を窺い、其間カムチャツカ半島並にアラスカの開拓に従った。

然るにムラビョフが東部シベリヤ總督となるに及んで、露帝ニコラス一世の命により南侵の歩を進め黒龍江口にニコライエフスク市を建てたが、更に清が長髪賊の乱に苦んで居るのに乗じ清に迫って国境を定めん事を求め、此年、清の全権委員奕山（エキザン）と愛琿に会して　(1)黒龍江を両国の境界とす。(2)烏蘇里（ウースリ）江東岸の地を両国共有とす。(3)松花江・烏蘇里江の通航を露人に許す。等の条約を結んだ。之を愛琿条約と云う。

▲　弱り目を　ニコラスが見て　ゆする亦り……1858

愛琿条約　やっぱりロシャが　のほほんとして　ゆする支那……1858

〔年記〕

仝年 ⑥ 清、英仏と天津条約を結ぶ　○英国印度を直轄す
　　○第一仏安戦争起る―1862マデ）

1859（清文宗、咸豊9）佛国柴棉を占領す

1860年　北京条約成る（清文宗、咸豊10年9月）
（英佛の第二回 北清侵伐）

長髪賊の勢猖盛んな1856年のこと、偶々清国官吏が恣に英船アロウ号を捜して乗組の清人犯罪者十二人を拘え、又佛国宣教師が廣西で清人の為に殺されたので、英佛二国は聯合して廣東を陷れ天津に迫って假条約を結んだ。之を1858年の天津条約と云う。

然るに翌年清国は、その批准交換の為に派遣された使節を白河に於て砲撃したので、聯合軍は再び進んで太沽、天津を陷れ北京に入って円明園を焼いた。

文宗恐れて熱河に逃れ、弟恭親王をして和を議せしめ(1)清国は償金千六百万両を出し、(2)九龍を英国に割き、(3)基督教の公布を許し、(4)支那の七港（牛莊・芝罘・漢口・九江・仙頭・瓊州・台湾）を開く、等の条約を結んだ。

之を北京条約と云う。　尚、露国公使イグナチエフが此の講和を斡旋した報酬として、露国は烏蘇里江東の地を得た。

▲　弱る文宗　北清役の　和を結び……1860

英と佛とに　やられた支那が　果は北京で　和を結ぶ……1860

1862年 柴棍条約成る（清穆宗、同治1年6月）

（第一佛安戦争終り、交趾支那佛領となる）

さきに阮福映が安南を統一して越南国を建てたのは、佛国の援けがあったからだが、其後越南は地を割くとの旧約を履行せず、その上屡々佛国宣教師を虐待したので佛帝ナポレオン三世怒り、1859年遂に兵を出して柴棍を占領した。依て越南王阮弘智は此年六月佛蘭西と条約を結んで、交趾支那の地と償金二千万法を彼に與えた。之を柴棍条約と云う。次で佛国はこの翌年柬蒲寨を保護国とした。

▲ 野心家に ふんだくられた 交趾支那……1862

越南国では 野心家殿に ひどくやられて 国を割く……1862

（年記）

1863（清穆宗、同治2）㊀ 英人ゴルドン常勝軍司令官となる ○ 李鴻章等 髮賊の諸城を陷る ○柬蒲寨 仏国の保護を受く ○朝鮮は李淵立ち 大院君執政

1864年 長髮賊の乱平ぐ（清穆宗、同治3年5月）

▲ 寄りたかり 滅し尽す 長髮賊……1864

あとを押されて 漸く支那が 滅し尽した 長髮賊……1864

1868（清穆宗、同治7） ブカラ 露の保護国となる
1871（〃 〃 10） ㊀ 露人伊犁を占領す ○ 日清修好条約締結
1873（〃 〃 12） キバ（巴蘭）ロシヤの保護国となる
1874（〃 〃 13） ㊂ 仏国、安南と和親条約を結ぶ ○ 日本台湾を征す（日本史を見よ）

1875（〃 徳宗、光緒1） ロシヤ 樺太を得（日本史を見よ）

1875年 江華島事件（清徳宗、光緒1年9月）

▲ 行く船に 水を向けたる 仲たがい……1875

（注意） 日本史全年項を見よ

1876（清徳宗、光緒2） コーカンド汗国ロシヤに滅さる（露、中央アジヤ併呑）

1877年 英王、ビクトリヤ印度女帝と称す（清徳宗、光緒3年1月）

（印度帝国の建設）

▲ 良き印度 見給う女王 身を祝がん……1877

熱い印度も 世を涼しげに 見さす女王の 身の光……1877

1878（清徳宗、光緒4） 清、露国と伊犁談判を始む
1880（〃 〃 6） ㊁ 曾紀沢更に伊犁事件を露に交渉す

1881年 伊犁事件落着（清徳宗、光緒7年1月）

（清、露の伊犁条約成る）

露国はこれ迄の東方経略に満足せず更に中央アジヤの侵略に従い、密に機会を窺って居た。偶々清国の天山北路（伊犁地方）に回教徒の乱が起ったので、露はその辺境を鎮めるとの名を以て1871年同地方を占領した。

その乱は間もなく清将左宗棠によって鎮められたので清国はロシヤに対し軍を伊犁地方より退けん事を求め、度々交渉したが露は之に應ぜず、両国の国交危くなった。

依て清国は曾国藩の子曾紀沢を露都に遣し互に譲歩して和を講じ、（1）コルゴス河（伊犁河の支流）を両国の境とす。

(2) 清国より償金九百万ルーブルをロシヤに拂う。 との条件を以て局を結んだ。之を伊犂条約と云う。

▲ やっとこさ　ようよう落つく　伊犂事件……1881

今は清露の　約束成って　やっと落つく　伊犂事件……1881

(年記)

1882 (清德宗、光緒8) 第二仏安戦争起る (翌年終る)
⑧ 清物浦条約成る

1883年　順化条約 (清德宗、光緒9年)

(第二佛安戦終り、越南仏の保護国となる)

第一佛安戦争が終って、柴棍条約を結び佛国は交趾支那を得て越南国と和したが、その国人深く佛人を悪んで居た。　佛国は1873年、偶々その人民の殺されたのを機として越南に迫り、基督教の布教と・紅河の航行とを承認させたが、それに満足せず1882年商人保護を名として兵を東京地方に送った。

越南王怒り長髪賊の残將劉永福をして佛軍を討たしめたが、程ふく佛軍がその国都順化府を陷れるに及んで、此年越南遂に屈し、順化条約を結んで東京地方を割き且フランスの保護国となった。

▲ 順化約で　やがて越南　せしめられ……1883

越南国では　順化条約で　やがて佛の　差図受け……1883

(年記)

1884 (清德宗、光緒10) ⑥ 清佛開戦 ⑩ 仏将クルベ台湾封鎖
⑫ 朝鮮に金玉均の乱作る

1885年　天津条約 (清德宗、光緒11年)

1.…日清交渉 (四月)
2.…清佛交渉 (六月)

1. 日清交渉、　朝鮮の紛争は同国の事大・独立両党の爭から起ったのであるが又清国に関係する所多く1884年の京城の変には清兵我が国人を殺し婦女を辱しめふどしたので、日本内地の民論喧しく我国は將来の禍根を除く為、此年伊藤博文を遣し、清の李鴻章と天津に於て交渉せしめた。その結果、(1) 日清両国は朝鮮駐屯の兵を撤去すること。　(2) 軍事教練の為に両国より教官を遣らざること。　(3) 將来派兵の必要あらば互に行文知照し事定れば直に撤兵すること。等の条約を結んだ。

2. 清佛交渉、　さきに順化条約により越南は東京地方を割き佛国の保護国となったが、清国は此の条約に異議を唱え越南の劉永福を助けて大兵を出し、佛兵と諒山に衝突し1884年両国こゝに戦を開いた。

此戦爭に於て佛の提督クウルベイは清の福建艦隊を福州に撃破り、澎湖島を取り台湾諸港を封鎖したが、陸兵は

清軍に諒山に敗れ、且つ佛本国の政変のため国論平和に傾いたので両国は天津に和を講じ、(1)清国は安南の宗主権をすてる、(2)佛国の東京地方占領を認める等の条件で和を結んだ。

▲ 約束で　やっとその日を　逃げる支那……1885

頭(アタマ)ペコペコ　約束しては　やっとその日を　逃げる支那……1885

(年記)

1886 (清徳宗、光緒12) ⑤ 英国緬甸を併合す
1887 (仝　仝 13) ① 西太后摂政をやむ　⑥ 東京境界条約成る
　　の露領と阿富汗との境界定る
1890 (仝　仝 16) ③ 印藏条約(清英間)成る
1891 (仝　仝 17) シベリヤ鉄道起工
1893 (仝　仝 19) シベリヤ東部鉄道開通の仏国メコン河東の地を略す
1894 (仝　仝 20) ⑤ 朝鮮に東学党の乱起る、金玉均殺さる
　　⑥ 清兵仁川に上陸

1894年　日清戦役起る(清徳宗、光緒20年8月)

日清両国間には1882年の京城事変や1884年の京城の変など朝鮮問題に関係して度々争が引起された。

依て我国は将来の禍根を絶つためさきに天津条約を清国との間に結んだが、その後凡そ十年を経た此年朝鮮に東学党(全琫準(ホウ))の乱が起り勢強く、朝鮮政府は自ら之を平定し得なかったので遂に援を清国に乞うた。為に清国は直に大兵を送ったので我国も亦兵を出して居留民を保

護し、やがて乱平いだ後、我国は清国と共に朝鮮の弊政を改革しようとしたが清国は之を斥け、朝鮮を以てその保護国と称し、益々大兵を送り我が撤兵を要求したので、遂に両国の国交破れ、戦は先ず豊島沖の海戦に始り遼東の野に風雲急とおった。

▲ 行け男兒　遼東(リョウトウ)の野の　露(ツユ)分けて……1894

(日本史全項を見よ)

1895年　下関条約成る(清徳宗、光緒21年4月)

(日清戦役終る)

日清両国の国交が破れてから我が軍は先ず豊島沖に勝ち、次で黄海に敵の北洋艦隊をうち破って制海権を收め、更に陸軍と協力して之を威海衛に追窮したので敵の提督丁汝昌は降伏の書を送り毒を仰いで自殺した。

陸には我が第一軍が先ず成歓・平壌の清兵を破って満洲に進み、第二軍は遼東に上陸して旅順の堅城を陷れ、次で両軍相合して連戦連勝進んで北京に迫らんとした。

依て清国大に恐れ、此年李鴻章を遣わして和を乞わしめたから我国は伊藤博文をして之と下関に会せしめ、

(1)清国は朝鮮の独立を認めること、(2)償金二億両(凡そ我が三億円)を出すこと　(3)遼東半島・台湾・澎湖島を日本に

譲ること、(4)沙市・重慶・蘇州・杭州の四港を開く、等の条約を結んで和議成立した。これ我が明治二十八年四月の事である。

▲ 宿帳に　李と書き茶代　二億両……1895

（日本史全項を見よ）

（附記）

三国干渉、遼東還附

日本は下関条約により遼東半島を得たが、当時ロシヤは頻りに東亜の侵略に意を用いて居たので之を喜ばず、仏にドイツ・フランス二国を誘ってその返附を日本に勧告した。

依て我国、時局を察し代償三千万両を得て全年十一月之を清国に返した。

（年記）

全年 ⑪ 日本遼東還附

1896（清徳宗、光緒22）③ カシニイ条約成る ⑪ 露国、東清鉄道敷設権を得

1897（　〃　　〃　23）⑩ 朝鮮国号を韓と改め光武と改元す
⑪ ドイツ膠州湾占領

1898年　列強支那に利を漁る（清徳宗、光緒24年）

（独逸の膠州湾租借其他）

日清戦役の結果、清国はその勢力のないのを暴露したので、これから列国競って支那を圧迫し種々なる強請をした。

先ず仏国は三国干渉の報酬として1896年、広東・広西・雲南の鉱山採掘権を得、全年ロシヤは清使李鴻章を籠絡して カシニイ密約を結び、満洲に於る東清鉄道の敷設権を牧めた。

独逸も亦久しく東洋に於る根拠地を得ようとして機を窺って居たが、偶々1897年自国の宣教師が山東省で清人の為に殺されたのを口実とし、全年十一月軍艦を送って膠州湾を占領し翌此年三月之が九十九ヶ年の租借権を得た。之に倣って露国は旅順・大連廿五ヶ年の租借権を受け、その宿望ある不凍港を得た。

英国も亦此年七月、露国と同一条件を以て威海衛を租借し、翌1899年仏国また廣州湾を租借した。　それのみならず列強競って鉄道・鉱山等の利権を得、仏国は南清地方に、ドイツは山東省に、露国は満洲・蒙古に、英国は長江一帯に各々勢力圏を設けて他国の窺うを得ざらしめ、支那は将に分割せられんとした。

此時日本は清国をして台湾の対岸福建省の不割譲を約せしめ、心ひそかに東洋の為に憂えた。

▲ 弱り目に　利権を漁る　慾の張り……1898

うまくたぶらし　弱り目の支那に　利を漁るとは　慾ふ奴……1898

（附記）

米国の活動

米国は1898年西班牙と戦ってフイリピン群島を得、東洋、支那とも

関係漸く密接となったので此年12月、清国の領土保全・門戸開放・機会均等を唱えて 日・英・露・仏・墨・伊 諸列強の賛同を得、漸く極東問題に容喙する端を開いた。

1899年 義和團の暴動起る（清德宗、光緒25年5月）
（北清事変）

支那は日清戦役後甚しい列強の圧迫を受けて国歩困難となり、為に一部の志士は大に之を憤慨したが中にも広東の儒者、康有為の如きは率先して変法自彊の説を唱え屢々改革意見を上疏した。

德宗は喜んで之を登庸し革新に着手したが西太后等守旧派は之を悦ばず、1898年遂に帝を幽閉し改革派を倒して再び政を執るに及び、康有為等は海外に逃げ改革の業忽ち失敗した。

かくて守旧派が勢を得てから国民の排外思想はその極点に達し、遂に此年基督教の撲滅・外人の排斥を主義とする義和團と称する匪徒が山東省に起り、政府は之を制止しないのみならず義民として庇護する風があったからその勢は益々強くなった。

▲ 世を怨み 流離に嘆く 乱徒たち……1899

苛められては 世の中怨み 乱を思うか 流離の子……1899

（附記）

義和團のその後

翌1900年六月、匪徒は天津を陥れて北京に乱入し、官兵と合して独逸公使ケットレルン及び我が公使館員を殺し列国公使館を包囲した。

よって列国は聯合軍を組織し、我軍主として太沽・天津を陥れ北京に入り乱徒を破って公使館を救った。その時清帝德宗及び西太后は一時西安府に奔ったが、遂に慶親王及李鴻章をして和を列国に乞わしめ、十二月和議成立した。

(1) 日・独両国に謝罪使を特派す、(2) 元兇を処罰す、(3) 償金四億五千万両（三十ヶ年賦）を出す等を約した。

（年記）

1910（清德宗、光緒26）⑥ 義和團匪各国公使館を焼く ⑧ 聯合軍北京の囲を解く ⑩ 列国との和約成る
○ロシヤの満洲出兵

1901（〃 〃 27）⑧ 各国使臣会議 ⑪ 李鴻章死す（年79）
○シベリヤ鉄道ウラジオストックに至る

1902年 日英同盟成る（清德宗、光緒28年1月）

▲ 両国が 和平の為に 気を協せ……1902

（注意）日本史全項を見よ

（年記）

1902（清德宗、光緒28）① 德宗及び西太后還京 ④ 満洲還附条約成る ○婦人の纏足禁止

1903（〃 〃 29）② 広西に土匪起る ⑤ 雲南に土匪起る ⑪ ロシヤ兵奉天占領

1904年 日露戦役起る（清德宗、光緒30年2月）

▲ 露の不義を 我は懲らさん 天に代り……1904

（注意）日本史全項を見よ

1905年 ポーツマス条約成る（清德宗、光緒31年9月）
（日露戦役終る）

▲ ルーズ氏を　和合の神に　仲直り……1905

（注意）日本史全項を見よ

（年記）

1906（清德宗、光緒32）⑭ 西園条約（英・清間）成る ⑰ 清朝の立憲予備上諭下る ⑫ 満洲南放実行

1908（　〃　　〃　34）⑧ 清朝の国会開設期限発布 ⑩ 西太后及び德宗死す、宣統帝即位 醇親王摂政

1910年 韓国、日本に併合（清宣統帝、宣統2年8月）
（李王退位）

朝鮮は日清戦役後、国号を韓と改めたが依然その国力弱くして独立の体面を維持し難く、日本はその隣国として度々全国の為に辛労し、遂には日露の戦役をも見るに至ったが、猶不安に堪えず、戦後は韓国を我が保護国とし、京城に統監府を置き統監をして保護・監督・指導の任に当らしめ、その福利を図ったが韓人中にはよく事理を解せず不穏の挙を為す者もあった。偶々前統監伊藤博文が韓人の為に哈爾賓に要殺せられて併合の機運進み、韓人中にもそれを望む者多きを見て遂に我国心を決し、両国民の幸福と東洋平和の為に此年韓国を併合し、改めて朝鮮と称し、一切の統治権を李王より譲り受けて新に朝鮮総督を置いて之を治めしめる事とおった。李氏の建国から五百十八年後のことである。

▲ 李の国を　併せて歓呼　湧き上り……1910

（日本史を見よ）

（年記）

1911（清宣統帝3）⑤ 清国新内閣制度施行、慶親王総理大臣となる。
⑨ 四川暴動 ⑩ 革命軍起る ⑪ 袁世凱総理大臣となる
⑫ 南京陥る、摂政王退職

清の制度及学術

清の諸制度は多く明の遺制に基き、満洲の国俗を考え、概ね康熙・乾隆二代に成った。

- 官制
  - 中央政府
    - 内閣（政務を総ぶ）｛吏・戸・礼／兵・刑・工｝六部（尚書／侍郎）
    - 軍機処＝軍国の大事決定、後には内閣の実権をとる
    - 理藩院＝内外蒙古・西蔵・青海を管す
    - 都察院＝百官の監察
    - のちに、総理各国事務衙門（外交事務）／海軍衙門等設けらる
  - 地方行政
    - 支那本部を十八省とし総督・巡撫・提督等の官あり
    - 省は更に府・州・県に分る
    - 満洲は後に新疆省と共に本部同様とふる
- 兵制
  - 陸軍
    - 八旗兵（近衛兵）
    - 緑旗兵（地方警備の常備軍）
    - 郷勇
  - 海軍＝五水師＝北洋・南洋・長江・福建・広東
- 学術
  - 聖祖・世宗・高宗学芸を好み、又漢人懐柔のためこれを奨励したので学術起り大部の書が編まれた。
  - 重なる書物
    - 聖祖の時（淵鑑類函・佩文韻府・康熙字典・全唐詩／又次の雍正帝の時完成の古今図書集成一万卷）
    - 高宗の時＝大清一統志、大清会典・皇朝文献通考等

考証学
- 明の王守仁が良知の説を唱えてから学者理論を尊び空論に傾いたから、清初顧武が考証を唱え諸学に応用した。
- 学者＝顧炎武・黄宗羲・閻若璩・毛奇齢・銭大昕・趙翼 顧祖禹等

文学
- 詩文＝王士禎・呉偉業・侯方域
- 戯曲＝李漁
- 名作には桃花扇（孔尚任作戯曲）紅楼夢（曹雪芹作小説）

史学者＝王鳴盛・趙翼・銭大昕

耶蘇教と科学
- 清初耶蘇教は西洋学術を伝え文化に貢献す、世宗は之を禁じた。
- 尚新教は英人モリソン之を伝え迫害を受け後に許さる
- これ等宣教師が測量・製図・暦法・砲術・数学等を伝う

第五史期

1912年 中華民国起る（民国1年2月）

（清朝亡ぶ）

日本国運の隆昌に見て清廷の迷夢は破れ遂に国政改革の必要を覚り、1906年立憲準備の詔勅を下し張之洞・袁世凱を挙げて国政を委ね、越えて二年国会開会の期を十年の後に予約した。

然るに同年徳宗・西太后が相次で歿したので、徳宗の甥、宣統帝は僅か三才で即位し、父醇親王が政を摂したが輿論に圧せられて国会開設の期を五年の後に早め着々その準備を急いだ。しかし久しく満洲人に服従するを喜ばなかった漢人の間には、此の場合に清朝を覆して漢人の天下を起そうとする革命の気分が漲って居た。

偶々清朝が鉄道国有を発布するに及んで非難百出、民心動揺、革命党之に乗じて兵を武昌に挙げ、黎元洪をその都督とした。江南各地忽ち之に響應しその勢日に盛となり頻りに清軍を破り此年一月、南京に假政府を設けて共和を宣言し、孫文（逸仙）をあげて臨時大総統とした。

清廷大に驚き袁世凱をして時局を救拾するため討伐軍を率い南征せしめたが、世凱は時の勢の武力によって解決

し難きを見、又一部野心をも藏して、假政府と度々交渉の末共和の止むべからざるを陳べた為め、宣統帝は十二月共和政体を認めて退位し、こゝに清は太祖から十二代二百九十七年（世祖が中国に君臨してから二百六十八年）にして滅んだ。

依て袁世凱は臨時政府を北京に起し、南京の假政府と和し全国に共和を宣言して、臨時約法（憲法）を発布したので孫文その職を退き假政府を解散した。やがて世凱は全国各省の代表者より成る参議院に推されて臨時大總統となった。

▲ 零落の 命に喘ぐ 共和政……1912

落ちた命に 霊吹きこめて 喘ぎ出て来る 共和支那……1912

（附記）

袁世凱大總統となる

翌1913年4月 第一回の国会を開き、其後起った討袁軍も鎮定して、十月袁世凱は正式に任期五年の大總統に当選し、同時に支那共和国即ち中華民国は正式に列国の承認を得た。

（年記）

1913（中華2）⑨国会南護の討袁軍起る（直に鎮定）⑩袁世凱大總統となり支那共和国成立○露支条約締結

1914年 世界大戦起る（中華民国3年6月）

▲ 六合に（リクゴウ） うずまき起る 鬨の声（トキ）……1914

（注意） 西洋史全項を見よ

（年記）

全年 ⑧日独開戦、日墺関係断絶 ⑩日本ヤルート島占領 ⑪青島陥落

1915（中華4） 討袁軍諸所に起る○袁世凱帝王登極 美諾○蔡鍔雲南に独立す ⑤日支条約成る

1916（仝 5） ③帝政取消申令 ⑥袁世凱死し黎元洪大總統となる ⑩黄興死す ⑩蔡鍔死す

1917（仝 6） ⑦張勲の復辟運動失敗、馮国璋大總統となる ⑧支那、独墺二国に宣戦 ⑩広東政府成る（孫文大元帥）

1918（仝 7） ⑩徐世昌大總統となる

1919年 世界大戦終る（中華民国8年6月）

（ベルサイユの講和）

▲ 乱果てゝ 新たに見えし 黎明（レイメイ）の……1919

（注意） 西洋史全項を見よ

（年記）

1920（中華9） 日本軍サガレン州占領

1921（仝 10） 外蒙古の独立宣言、孫文南方大總統となる

1921年 ワシントン会議（中華10年11月－翌年2月）

（日英同盟終る）

▲ 利に驕る 心も見せし アメの国……1921

（注意） 西洋史及日本史全項を見よ

本文　第三　西洋史の部

第一史期

○ 西洋史のみなもと

西洋文明は、ナイル河の流域と、チグリス、ユウフラテス両河の下流に起った。

1. 埃及

世界最古の文明国なる埃及は、ナイル河畔にあって、その年々の定期の氾濫と、氣候炎熱との為め、地味肥え、早くから農業開け、人口繁殖し、既に紀元前三千年の頃、メンフイスを都として埃及王国を成し、国王の権力強く、宗教は多神教を奉じて、霊魂の不滅を信じ、学術技藝発達し、太陽暦を用い、数学・天文学・測量術興り、文字・紙筆を発明した。

その頃の建造物、ピラミッド、オベリスク、スフインクス等は今もナイル河畔に雄姿を表し、数千年の昔を物語って居る。

2. 古バビロニヤ

埃及王国に次で、バビロニヤが興った。此国は、チグリス、ユウフラテス両河に恵まれて、土地肥え、穀物よく実り、人口繁殖し、紀元前二千五百年頃、バビロンを

都としてバビロニヤ王国を建てた。そしてハムラビ王時代全盛を極めたが、後衰え、植民地アッシリヤに滅された。　文明としては、天文・数学の発達、星占術、太陰暦、楔形文字の発明、煉瓦の建物などがある。

3. ヘブライ

ユウフラテス河下流地方に居たヘブライ人は、後にパレスチナに移り、更に埃及に移住したが、此の民族は一神教（エホバ神）を信じ、排外心が強かったから、他国民に迫害され、埃及でも虐待を受けたので、酋長モーゼに率いられて埃及を出、再びパレスチナに帰った。

その政治は、初め高僧が神意によってなし、祭政一致であったが、のち王政となり、ダビデ王の時四方を征服し、その子ソロモン全盛を極め、その死後、国はイスラエル、ユダヤ両国に分裂して衰えた。

4. フエニキヤ

フエニキヤは、地中海東岸の一小国であるが、リバノン山脈の良材により船を作り、盛に海外に殖民通商した。そして多くの都市が、各々一小国家を形づくり、古代第一の商業国となったが、国家的自尊心薄く為に強国つぎ起るに及び之に屈従した。

文明としては、貝の染料、金属細工、硝子製造などがあり、又埃及文字を改良発達せしめて、音標文字の組成に成功した。之が現今の西洋文字の基である。

5. ギリシヤ

西洋文明の母国と云われるギリシヤは、初めドーリヤ種族であるスパルタ人が、アケーヤ族を征服して、スパルタ市を建て、その数、旧住民に比して甚だ少かったので、紀元前八百五十年頃、リコルゴスが出て、自衛上、法典を定めて政権を独占し、極端な国家主義を行い、厳格な尚武教育を施し、盛をペロポネソス半島に振った。

6. ローマ

ギリシヤ文明の後を受けて、西洋史上に光り出たのは羅馬である。上古伊太利半島には北部にガリヤ人、エトルリヤ人、中部にラテン人、サビニ人、ウンブリヤ人、南部にギリシヤ人の殖民地があった。ローマは実にラテン人が附近の民族と共にチベル河畔に建てた村落で、後にその建国の年を紀元前753年と定めた。

ローマは古代の西洋諸国を統一し、それが瓦解して近代の西洋各国が興った。

前606年 アッシリヤ国の滅亡

アッシリヤはもとバビロニヤの西北に位し、その殖民地であったが、漸次勢力を伸して紀元前十五世紀の頃独立し、のち都をニネベに奠め、頻りに四隣を侵し、紀元前八世紀頃、バビロニヤを滅し、フェニキヤを服し、イスラエルを取り遂に埃及をも征服し、東方文明諸国を尽くその版図に入れ、西洋史上最初の大帝国を建設した。

然るにその国人、性残忍、征服国統御の道を誤ったので、叛乱絶えず、且つスキタヤ人、キンメリヤ人等の蛮族が北境を侵したので、埃及先ず独立し、次で自立したバビロン王ナポポラッサルとメヂヤ王キャクサレスとの聯合軍の為に、此年遂に滅された。

● 滅ぶアッシリヤ　我が身の運を　ひきかねて……前606

(注意) 紀元前を表す、おぼえ句には「皆」前の冠」と附けるのだが、便宜上省いてある。

前594年 ソロンの新法

ギリシヤのアテネ市は、イオニヤ種族がアッチカ地方に建てたもので、初め王政であったが、後貴族政治となり、執政官九人が政務を行い、平民は参政権なく、常に貴族に圧迫されるので不平であった。

此の年ソロン執政官となり、新法を立てゝ貧民を救い、又財産の多少によって、人民を四階級に分ち、各階級の権利義務を定め、平民にも政権を分け與えた。

● 無い仲間に　利を分てよと　説くソロン……前594

(附記)

1. ピシストラッス僭主となる

この後、前560頃、平民党の首領ピシストラッスは兵力を以てアテネを占領し、僭主となり、鋭意国家の富強を図り、海軍を創設し、学藝を興し、商工業を盛にし、他日ペルシヤの来寇に備えた。

2. クリステネスと貝殻投票法

前509年頃、クリステネス執政官となり、民権を伸し、アッチカ地方を十区に分け、各区を更に十町村に分け、民主政治を確立し、オストラシズム(貝殻投票法)と云う放逐法を設けて僭主の出るのを防いだ。

(年記)

前586　バビロニヤ王ネブカドネザル、ユダヤ王国を滅す
前580　ギリシヤの哲学者ピタゴラス生る(—497)
前560　ピシストラス、アテネの僭主となる(前527迄其間二回流される)
前559　ソロン死す

前550年 キルス王の波斯建国(一説 前558年)

波斯はもとメジヤに属し、キルスはその人質となって居たが、遂に此年メジヤの衰頽に乗じて之を滅し、波斯帝国を建てた。

● 名のる波斯　中にキルスが　蟠(ワダ)かまる……前550

(附記)

波斯の優勢

キルス王は次でリジヤ及び、小アジヤ沿岸にある希臘殖民地を征服し、轉じて新バビロニヤ国を滅し、

パルケヤ、バクトリヤ地方を征服し、治世三十年間に亦、その領土東はインダス河から西はエーゲ海に及び、埃及の外、それまでの東方諸国皆その版図に入つた。のち、子カンビネス王が埃及をも征服した。

〔年記〕

前538　波斯王キルス、バビロニヤ国を滅す
前537　ピシストラス　ローマの政権を握る（前527死）
前535　悲劇始めて　アテネに演ぜらる
前529　キルス戦死、子カンビネス継ぐ　（前456死）
前525　波斯王カンビネス埃及を滅す、悲劇作家エルキルス生る

前521年　波斯王ダリウス一世即位

波斯はキルスに興り、子カンビネス埃及をも征服して国威をあげたが、この前年戦死し、其後国内大に乱れた。時に王族ダリウス英邁にして経世の才あり、国難を鎮定して此年王位に登り、スーサに都した。それから四方を征服し、先ず印度を征してパンジャブ地方をとり、次で欧洲に侵入してドナウ河北に至り、トラキヤ，マケドニヤ地方をも征服して、東はインダス河、西はバルカン半島に至る空前の大帝国を建てた。

尚内治に意を用い、中央集権を行い、その領地を廿余県に分けて知事・將軍を置き、時々按察使を派遣し、貨幣を使用し、租税の法を設け、交通を整え、軍道を置き、駅傳を立て、エクバタナ、ペルセポリスに離宮を造り、制度・宗教は各地の習慣に従い、寛大なる統治をなして畢竟なる大帝国を創めた。

● 中の乱れを　方づけダリウス　王になり……前521

〔年記〕

前516　ペルシヤ王ダリウスIパンジャブをとる　○アポロ神殿再建
前510　ギリシヤのクリステネス執政官となる

前509　ローマ、王政をやめ共和政となる

● 名前と共に　和して治まる　ローマ国…前509

前500年　波斯戦争起る（一前449頃迄）

波斯はアジヤ沿岸なるギリシヤ殖民地を征服したが、自主独立の気象に富む希臘人はその抑圧を忍ぶ事ができず、遂に此年、小アジヤのミレッス市先ず反し、本国のアテネ、エレトリヤニ市之を援けた。ペルシヤ王ダリウス大に怒り、兵を出して之を平定し、更に大兵を起して希臘本国を懲らさんとしたので、茲に此後長年に亘る波斯戦争の端をひらいた。

● 何糞ペルシヤ　割っちまえとて　渡り合い……前500

前492年　第一回波斯戦争

此年ダリウスは女婿マルドニウスに命じ、海陸両道から希臘に向わしめたが、陸軍はトラキヤに敗れ、海軍はアトス岬附近で暴風に遭い空しく引返した。

● トラキヤ・アトスに　利を得て希臘　勝ち誇る……前492

前490年　第二回波斯戦争
（マラトンの戦…9月12日）

第一回の希臘遠征に失敗したダリウスは其後二年経った此年、ダチス及びアルタフェルネス等に命じ、大挙して希臘を攻めしめ、その軍は先ずエーゲ海を渡り、エレトリヤ市を陥れ、更にアテネに向ったが、アテネの将ミルチヤデスの為に大にマラトンの野に破られて空しく国に帰った。

其後アテネの士気大に振い、テミストクレスの説を用いて海軍を拡張し、波斯の再挙に備えた。

● 戦ひ勝ちて　利はマラトンの　ギリシヤ軍……前490

（アテネ）
マラソン競走の起り　マラトンの戦に希臘軍大に勝ち、軍使アテネに馳帰りて曰く「悦べ勝利は我が軍に」と云い終って無緩み落命した。これ、今も長距離競争をマラソン競争と云うの起りである。

（年記）
前486　ダリウス死し、子クセルクセス嗣ぐ（一前465）
前484　ソポクレス生る（一前402）

前480年　第三回波斯戦争（7月）
（テルモピレ、サラミスの戦）

波斯王ダリウスは、報復の志を果さないで歿し、子クセルクセスはその志を継ぎ、此年親ら大軍を率い、海陸両道から希臘に侵入した。

依てスパルタ、アテネ同盟して之に当り、スパルタ王レオニダスはテルモピレーの峡により、敵の大軍に当って衆寡敵せず、将卒悉く名誉の戦死を遂げた。波斯軍勝に乗じアテネに入って之を焼き、市民は難をサラミス島に避けたが、アテネの将テミストクレス聯合艦隊を率いて、波斯の艦隊をサラミス湾に破った。クセルクセス大に恐れ、マルドニウスを留めて陸軍を統べしめ、自分は狼狽して本国に帰った。

翌年希臘の陸軍は全国のプラテーエに勝ち、海軍は小アジヤのミカレに敵艦隊を破ったので、その後、波斯は希臘本国を侵す意を絶った。

● テミストクレスが　勇気に奮う　湾の船……前480

前477年　デルス同盟成る
（アテネ、希臘の覇権を握る　―前430）

第三回波斯戦争の後も、争は猶続いたが、アテネはサラミス戦勝の威を以て沿岸諸市を糾合し、デルス同盟を結んで盟主となり、波斯に備えた。

デルス同盟とは、エーゲ海中のデルス島にあるアポロ

の神殿に、同盟の会議を開き且つこゝに同盟都市の金庫を置いたからの名である。

● 立ちデル同盟　結ぶアポロの　守り神……前477

（附記）

ペルシヤの敗退

其後アテネは度々波斯軍を撃って之を破ったので、波斯王、アルタ・クセルクセス一世は、前449年頃遂に屈して、小アジヤなる希臘殖民地を棄て、波斯戦争全く終を告げた。

（年記）

前469　大聖ソクラテス生る（前399）

前450　ローマ十二銅表法典の制定

前449　ペルシヤ戦争全く終る

● 遂にキモンが　立って波斯の　塔をつけ……前449

前445　ペリクレスの和約（アテネ、スパルタ三十年休戦）

前444年　ペリクレス，アテネの主権を握る（―前429）

希臘国中でアテネは波斯戦争に尤も功があったので、戦後その国威大に揚った。偶々此年大政治家ペリクレスアテネの政権をとり、民権を重んじ制度を改め・公益を図り・海軍を盛にし・美術学芸を奨め・都市を飾りなどして国勢益々張り人物輩出したので、同盟都市皆その命を仰ぎ、アテネの文化は其極に達し、実に希臘の黄金時代を為すに至った。称してペリクレス時代と云う。

● 立って（444）アテネの　たかうにされる（429）　強い人……前444

前431年　ペロポネソス戦争起る（―前404）

アテネとスパルタとはその国情が違い、スパルタは陸軍を以て覇をペロポネソス半島に称えたが、今や海軍国アテネが日に盛んなのを見て快しとしなかった。此頃アテネは又デルス同盟の資金を私用して、同盟国の信用をも失った。偶々此年コリント市が、その殖民地コルキラと争うやアテネはコルキラを援けたので、スパルタはコリントを援け、他の諸市各々之に党し、こゝに希臘全土二分し、此後二十七年に亘る大戦をひき起した。之をペロポネソス戦争と云う。

此の戦は実にイオニヤ人とドーリヤ人、民主政治と貴族政治、海軍国と陸軍国の争であった。

● 立ち廻りする　スパルタ軍と　アテネ軍……前431

（附記）

戦況と講和

戦の初、アテネは海軍を以て、ラコニヤの沿岸を侵し、スパルタは陸軍を以てアッチカを荒掠したが、後アテネ市中に疫病流行し、ペリクレス以下諸名士多く斃れ、スパルタ亦疲れ一時休戦したが、戦再び始り、前405年スパルタの将リサンドルはアテネ艦隊をヘレスポンド海峡附近のエゴスポタミに全滅し、進んでアテネ市を囲んだので、アテネ遂に屈し、

民主政治をやめ、軍艦の数を制限し、デルス同盟を解散して、前404年和議あり、ペロポネソス戦争終を告げた。これからアテネの国威地に墜ちた。

〔年記〕

前430　悪疫アテネ城中に流行
前429　ペリクレス死す　○　プラトン生る（―前348）
前405　⑧エゴスポタミの戦（リサンドル、アテネ艦隊を滅す）
前404　㊏ペロポネソス役終る（スパルタ再覇となる）

前402年　歴史家ヘロドッス死す（前484生）

● 土に残した　我がヘロドスの　書いた文……前402

前399年　ソクラテス死す

ソクラテスは紀元前469年アテネ市に生れた古今稀なる哲学者であり道徳家である。その父は彫刻師で、母は産婆を業とした。彼は初め父の業を学んだが、当時アテネの人心腐敗し、且つ曲学の徒が人心を惑わすを慨いて業を捨て、倫理道徳を説き・常に自ら節倹を守り・粗衣粗食に安んじ、諄々として人を教え年少子弟に説き倦むことを知らなかった。のち政府より、神を非議し・青年を惑わすとの罪名のもとに獄に下され、三十日以内に毒を服せよとの宣告を受けられた。門弟中には脱獄を勧める者もあったが、彼は断じて之を斥け、期日に至り諸弟子に説教し、毒全身に及ぶに至って瞑目した。年七十。

● 聖ソクラテス　倫理を説いて　牢に死に……前399

（附記）

1. プラトン（前429―374）

アテネの貴族に出た大哲学者。二十歳の時、ソクラテスの門人となり、八年間その下に居り、師の歿後

各地を歴遊し、周遊十年アテネに帰り、学校を建て教育に従うた。プラトン終生娶せず、思想高遠、著述多く弟子多く、後世に及ぼした影響は頗る大きい。

2. アリストートル（前384―322）

マケドニヤのスギタラに生れた大哲人。十七才の時、アテネに赴きプラトンの門に入る。前347フイリップ王に招かれ、アレクサンドルの教師となる。後アテネに帰り、学校を起し教育に従う。彼博学多才、政治・博物・物理・美術等の学に通じ。特に演繹法を以て知られ、後世学問研究の燈台と仰がれる。

〔年記〕

前399　ガリヤ人伊太利中部に侵入す
前384　デモステネス生る、アリストートル生る（共に前322死）
前371　レウクトラの戦（エパミノンダス、スパルタ軍を破る
　　テーベ希臘の覇権を握る（―前362）

前367年　リキニウス法案通過（ローマの平民権昂る）

● 政治の権を　平民も亦　持つローマ……前367

前362年　マンチネヤの戦
（エパミノンダス戦死）

中部ギリシヤのテーベ市は、一時スパルタに従い、貴族政治を行ったが、紀元前378年エパミノンダス、ペロピダス等起り、アテネの援を得て民主政治を復し、スパルタを離れテーベを盟主としてボエオチヤ同盟を造り、前371年スパルタの大軍とレウクトラに戦い勝ち遂に希臘の覇となった。

のち、アテネはテーベの興隆を妬み、スパルタと同盟してこれを抑えんとしたので、テーベのエパミノンダスは

兵を率いて此年、スパルタ・アテネの聯合軍と、マンチネヤに戦い、大いに勝ったが、不幸已は戦死し、テーベの覇業程なく破れた。

● 死の間際に　はるかテーベの　勝ちを聞き……前362

前356 アレキサンドル大王生る

前348年 哲人プラトン死す（一説前年）

● 死の夢に入る　土にプラトン　床（ユカ）しけれし……前348

前338 ケーロネヤの戦（マケドニヤ希臘の覇となる）

前336年 アレキサンドル大王の即位

ギリシャ諸邦争乱相つぎ、アテネ衰えスパルタ復栄え、やがてテーベの興起となり、それ等の皆が内乱に疲れて居る時、北方からマケドニヤが興ってギリシヤを併呑した。

マケドニヤは希臘の北にある未開の国であったが、その王フイリップの時大に国勢の振興を図り、先ず希臘の文物を輸入し・兵制を改め、次で希臘の内事に干渉し遂に之を併呑せんとした。

アテネの雄弁家デモステネスその野心を看破し、列国に防禦同盟の必要を遊説したが、多く聴入れられなかった。

フイリップは遂に、前338年希臘軍をケーロネヤに破りその覇権を握り、尚ギリシヤ諸市をコリントに会して、波斯に復讐の戦をあげんと議決したが、近臣に殺されてその志は成らなかった。

依てフイリップの子アレキサンドルは此年二十才にして王位に即いた。彼は実に不世出の英傑で、後年ペルシヤ遠征を企て、更に印度にまでも侵入した。その為、東西両洋の文明が初めて融合されたと云われて居る。即ち東洋文明が西洋諸国に入ると共に、西洋文明は又印度支那等から他の東洋諸国に傳わり、その餘波は我が日本にまでも及んだ。

● その子大王に　その夢譲る　フイリップ……前336

（附記）

アレキサンドル大王の事業とその死

大王は父の志を果さんとて、先ず希臘の反乱を平げてその盟主となり、次で前334年、波斯遠征の途に上り、グラニックスの戦に勝って小アジヤを取り、翌年、イッススに波斯王ダリウスと戦って之を破り、シリヤ、エジプトを取り、ナイル河口にアレキサンドリヤ市を建て、轉じて波斯に入り、ダリウスとアルベラに戦って大勝し、波斯を滅し、北進してバクトリヤに入り、轉じて印度に侵入したが、將士疲れて前進を肯んぜず、大王やむを得ず軍を分つて二となし、海陸両道からバビロンに凱旋した。（前324）

尚王は東西両洋の文物、学藝、宗教等の融合統一を謀り、自らバクトリヤの貴女と婚し、東西両民族の雑婚を

奨励したが、その業未だ成らずして病を得、前323年年三十三才を以てバビロンに歿した。

大王歿後諸將の爭があって、其広大なる領土は、埃及、シリヤ、マケドニヤ等に分裂したが、是等は皆、のちにローマに併吞された。

(年記)

前334 グラニクスの戰(大王ヘレスポントを渡り、波斯軍を破る)
前333 ⑪ イッススの戰
前332 大王フェニキヤを滅し、エジプトを降す、アレキサンドリヤ市創建

前331 アルベラの戰(大王波斯を滅す)

● 死線を越えて それ大王が アルベラえ…前331

前323 ⑫ 大王死し国土分崩(一前276)

前322年 デモステネスの死

デモステネスは、世界の大雄弁家として知られて居る。紀元前384年アテネ市に生れた。人物清廉潔白、国事を憂え、夙にマケドニヤ王フイリップが希臘併呑の野心あるを看破し、極力之に反対し、有名なるフイリップ攻撃の大演説を為し、以て希臘諸国の同盟を図り、前338年、ケーロニヤに戰ったが敗れ、希臘遂にフイリップに降伏した。その後も大に祖国の為に力を尽したが、時非にして志成らず遂に自殺した。此年は又彼の大哲学者アリストートルの死んだ年で、此の二人は生れも死も同年である。

● 死んでデモステネー ケーロニヤから 定めたこと…前322

(年記)

前322年 哲人アリストートル死す

● 死の後ながく 君が哲理は 輝けり…前322

前319 アレキサンドル大王の印度征服地独立す

前311年 ローマの水道成る

● 水道成りぬ 今もローマに あととめた…前311

前285 ジオニシウス太陽暦を作る
前283 アレキサンドリヤ市学問及商業の中心となる
前275 ベネベンツムの戰(ピルス大敗イタリヤを去る)

希臘の文明

文明発達の原因

1. 山水明媚、気候温和の為、人民の美感が発達した。
2. 交通便利で東方文明入り易かったこと。
3. 奴隷を使い労役を任せ国人は專ら政治学藝に勵んだこと。
4. 領土内多く小邦に分れ、互に文武の技を競ったこと。
5. 人民進取の気象に富み研究法が自由であったこと。
6. 大理石の産出多く、彫刻、建築等に良材の得易かったこと。

文藝
- 詩文
  - 叙事詩 — ホーマー(イリヤッド、オデッセー有名)
  - 抒情詩 — アナクレオン、ピンダルス
- 戲曲
  - 悲劇 — エルキルス、ソフオクレス
  - 喜劇 — アリストファネス

学問
- 史学 — ヘロドッス(ヽ史の父) ツキジデス(ヽ史ッ模範) クセノフォン
- 哲学(西洋哲学の基) — ソクラテス、プラトン、アリストートル
- 科学 — ヒポクラテス(医) アリストートル(博物学) アルキメデス(数理) ユークリデス(幾何) アリスタコス(天文) プトレメーウス(地球円形ヲ唱フ)

美術 { 建築＝ドーリヤ式（荘重）イオニヤ式（優美）コリント式（華麗）
彫刻＝（人体美の表現）フイジヤス、プラクシテレス
絵画＝前二者ニ及バズ

前272年　ローマの伊太利統一成る
（タレンツム羅馬に降る）

ローマでは国初から、貴族は一切の公権を専有し二人の統領、元老院、貴族会、兵員会等があって庶民を抑圧し、両階級の争が絶えなかったが、前509年王政破れて共和政となってから庶民の不平甚しく、遂に前494年護民官を置いて貴族の行政を監督し、庶民会を起して立法に参與し、前450年、十二銅板の成文律を建てゝその権利を確保したが、猶貴族は種々の特権を有して居た。而るに前367年、護民官リキニウスの法案元老院を通過して平民漸く利権を得、両階級の政治上の権力平等となり多年の紛争漸く静った。

是よりさき北方のガリヤ人南下して羅馬を侵したが、その北帰の後ローマは力を南方の経略に用い、強敵サムニウム人を征服して中部伊太利を統一し、進んで南部の希臘殖民地に迫った。タレンツム市の希臘人、援をエピルス王ピルスに求め、両軍ベネベントに戦ってローマ軍

大勝、ピルス空しく帰国し、希臘諸市相ついで降った。此年タレンツムも亦陥ったので、北方ガリヤ人の外伊太利半島悉くローマに征服された。そこでローマは征服諸市を互に相聯財せしめ、要地に屯田兵を置き、軍路を開いて統御の便を図った。

●勝ったローマに　負けタレンツム　降参（コウサン）し……前272

前264年　第一ポエニ戦役起る（―前241）

羅馬が新興の勢の盛な時に当り、アフリカ北岸には、もとフェニキヤの殖民地であったカルタゴ市あって、当時その富天下に比なく、強大なる海軍を有して地中海西部に威を振って居たから、ローマと勢両立せず、両国の間には常に暗雲が低迷して居た。

此年ローマは、シシリー島のメッシナに拠れる傭兵（伊太利人）が、シラクサ王ヒエロン二世に攻められ援を乞うに及び、遂に兵を出してメッシナの囲を解かしめ、要塞を占領して居たカルタゴ人を逐ったので、こゝに両国の大戦争が起ることゝなった。これをポエニ戦争と云う。

ポエニとは羅馬人がフェニキヤ人を呼んだ名である。

●カルタゴの国　屠れとローマ　立ち上り……前264

（附記）

戦況及講和

ローマは本来陸軍国で、陸にはしばしば勝ったが、海軍は度々大敗した。しかし不屈のローマ人は、遂に前241年エガテス諸島附近の海戦に最后の大勝を得、カルタゴから巨額の償金を受け、又シシリー島を割かしめて和を結んだ。

こゝに第一回ポエニ戦争終り、地中海の海上権は全くローマの手に帰した。

（年記）

前250　此頃パルチヤ（安息）シリヤより独立し王国となる

前241　エガテス島の海戦○第一回ポエニ戦講和○ローマ市民調査（廿五万人）

前218年　第二ポエニ戦役起る（―前201）

第一の役後、羅馬はカルタゴからサルジニヤ、コルシカ両島を奪ふ、又北伊太利を征服して次第にその版図を広めた。一方カルタゴは鋭意国力の回復を図り、中にも憂国の將ハミルカル・バーカスは西班牙に渡り、地を拓き兵を養い、羅馬に対する報復を図り、子ハンニバルの代に至って国富み兵強く、此年その軍が羅馬の同盟市ザクンツムを陥れたので、再びローマとカルタゴの和破れ、第二ポエニ戦争が起った。

此役ハンニバルは大兵を率いアルプス山を超えて伊太利に入り、破竹の勢を以て屢々ローマ軍を破った。

● カルタゴの軍　アルプを越えて　勇を鼓し……前218

（附記）

戦況及講和

ハンニバルは伊太利に入って勢強く、ガリヤの兵を合せて南進し、前216年カンネーの会戦に寡兵を以て敵の大軍を撃破し、將にローマ府を陥れんとした。

その時ローマの勇將スキピオ（長スキピオ）ハンニバルの虚に乗じ、西班牙を取り、轉じてアフリカに入り、カルタゴの本国を衝いた。

ハンニバルは本国政府の招に應じて急ぎ帰り、前202年スキピオとザマに戦って大敗し、翌年カルタゴ遂に和を乞うに至り、

ローマに西班牙を割き・巨額の償金を出し・軍艦を譲り・ローマの許可なしに外国と戦わざる事を約し第二ポエニ戦役終を告げた。これからカルタゴの国威地に墜ちた。

（年記）

前216　カンネーの戦（ハンニバル，ローマ軍を破る）

前202　ザマの戦（スキピオ，ハンニバルを破る）

前201　カルタゴ陥る（第二ポエニ戦役終る）

前183　ハンニバル自殺（前247生レ）○スキピオ死（一説180）

前168　◎ピドナの戦（ローマ，マケドニヤを滅す）

前149年　第三ポエニ戦役起る（ローマ，カルタゴを攻む　ローマのカトー死す）

● 怨晴らせと　立てりカルタゴ　ローマ軍……前149

前146年　ポエニ戦役終る（カルタゴ亡ぶ）

第二ポエニ戦争後カルタゴは通商航海に勵み、徐々にその勢力を回復したので羅馬喜ばず、偶々前149年カルタゴが隣国ヌミジヤの侵略に堪えず之と戦った時、羅馬は条約違反なりとて軍を発してカルタゴを伐ち、こゝに第三ポエニ戦争が起った。

此の役カルタゴの住民は、老幼婦女に至るまで挙国一

致して孤城を守り、力戦大に努めたが、羅馬の将スキピオ・エミリヤヌス（少スキピオ）が海陸より包囲して此年之を陥れ全市を焼いて焦土と化した。かくて死守三年カルタゴこゝに全く亡んだ。

● あゝカルタゴの　尽きぬ恨を　火と燃えて……前146

（附記）

スキピオの歎声

カルタゴ滅亡の時は、十七日間に亘つて猛火炎々天を焦した。此時ローマの将スキピオ之を望み ホーマーの詩 トロイ城陥落の章を読み、大息して曰く

「アッシリヤ、ペルシヤ、マケドニヤ相次で亡び、カルタゴ今正に焼く、想うにローマ滅亡の日また次で来らん」と歎じ、潸然として涙を流したと云う。

前146年　マケドニヤ，ギリシヤの滅亡

第二ポエニ戦役後ローマは東方の経営に着手し、マケドニヤを伐って希臘を独立せしめ、次で前190年シリヤと戦って之を破り、小亜細亜を割かしめ前168年マケドニヤ王ペルセウスの軍をピドナに破り、王を捕え王国を滅して共和国を建てたが、此年即ちカルタゴ滅亡と同年コリント市を壊ち、マケドニヤと共に希臘全国を併呑した。

斯くてカルタゴ・マケドニヤ・ギリシヤ共に亡び、羅馬は地中海沿岸の諸国（エジプト，シリヤを除く）外全部を併せる事となった。

● ジヤローマが　取るマケドニヤ　剝ぐギリシヤ……前146

前133年　チベリウス＋グラックス護民官となる

（ローマの内乱）

チベル河畔七丘上の小村落から起ったローマは次第に外征して版図を広め、カルタゴを征服した時は、地中海を湖にし「天下の道はローマに通ず」と言われ頗る繁盛となったが同時に奢侈の風起って質朴剛健の気風衰え、貧富の懸隔大となって上流は放逸にして奴隷を使用し、政権を独占し、土地を兼併し、貧民は生活難に陥り、公共心欠乏し、それに伊太利人及び属州の人民の不平が加って、盗賊起り国政又紊れて党争又党争遂に内乱となった。

チベリウス・グラックスは前163年ローマの名門に生れ、此年護民官となり、上下の腐敗を慨き、国家の病弊を革めんと志し、貧民の為にリキニウス法を復活して、土地所有額の制限を励行し富豪の専横を抑えようとしたが、翌年富豪党の為に殺された。

● 惜しまれし　死のチベリウス　淋しけれ……前133

（附記）

1. ガイウス＝グラックスの改革

チベリウスの弟ガイウス＝グラックスは兄の死後十年即ち紀元前123年護民官となり、兄の志をついで改革に従つたが、伊太利人に市民権を與えようとするに及び

閥族及び市民の怒を買い其典党三千人と共に虐殺せられ目的を達しなかった。其後間もなく伊太利諸国連合してローマの公民権を要求し、内乱三年の後伊太利全土悉く公民権を得た。

2. これ我が宝なり

或る貴婦人が、グラックス兄弟の母コルネリヤに自分の宝石を誇り、彼女にも宝石を示せと求めた時、コルネリヤは二子を指して「これ我が宝なり」と云ったと云う。

(年記)

前121 カイウス＝グラックス殺さる（ローマの内乱つゞき）
前100 ケーザル生る

前88年 スルラ，マリウスの争（…前82）

◉ 行くのはスルラ　行かぬマリウス……前88

前64 シリヤ，アルメニヤ，ポンツス皆亡ぶ

前60年 ローマの第一回三頭政治起る
（ケーザル，ポンペイウス，クラックス）

グラックス兄弟の死後、マリウスは貧民党、スルラは富豪党の首領として相争う中、偶々ポンツス王ミトリダテスがローマの属州を侵略した。此時両將その征討の任を争い、遂にスルラが行き伐って勝った。然るにスルラの不在中マリウスはローマの主権を握り程なく死んだので、スルラはローマに帰りマリウス党を討ち権勢を掌らにした。

スルラの歿後ポンペイウスつぎ、マリウスの残党及び地中海の海賊を平げ、又ポンツス王の反乱を平定し、シリヤを滅し、ローマの国威をあげた。

然るに元老院はその功を認めないので彼大に怒り遂に富豪党を脱し、此年貧民党の首領ユリウス＝ケーザル及び富豪クラックスと結び第一回三頭政治を建て、各々恣に任地を定めて知事となった。即ちケーザルはガリヤに、クラックスはシリヤに、ポンペイウスはイスパニヤの知事となった。

◉ 始めてローマ　分け持つ三人……前60

(年記)

前59 ケーザル統領となる
前55 ケーザル、ゲルマニヤ蛮族を伐つ、ポンペイウス，クラックス統領となる
前53 クラックス殺さる
前51 ケーザル全くガリヤを鎮定す
前49 ケーザル，ルビコン河を渡りローマに入る，ポンペイウス東走す
前48 ◉ ファルサルスの戦（ポンペイウス、ケーザルに破られ後殺さる）
前47 ケーザル，ローマに凱旋，ジクタートルとなる
○エジプトは女王クレオパトラ専政
前45 ケーザル，ポンペイウスの残党を平げ終身のジクタートルとなる
○太陽暦制定（ユリウス暦）

前44年 ケーザル殺さる

ユリウス＝ケーザルは任地ガリヤに行ってその蛮族と戦い、前後八年に亘り大功を建てた。其間クラックスはパルチヤを征して敗死し、ポンペイウスは一人任地に行かず留って羅馬に居たが、ケーザルの威名を妬み、元老院と結び之を除かんとしたのでケーザル急に帰国、途中元

ルビコン河を渡る時「骰子は既に投げられた」と叫んで帰国した。ポンペイウス恐れて希臘に走ったが、そのファルサルスの戦でケーザルに破られ、追われてエジプトに入り横死した。ついでケーザルはポンツスの叛を平げてローマに帰った。

ケーザルは実にローマの大偉人であつて、文武に通じ、政治・法律・厂史・文藝・数学・軍事すべてに卓越し、精力絶倫、果断に富んで居た。

天下定まって終身の統領となり、イムペラトルの称号を得・文武の大権を握り・人材を登用して弊政を改め、貧民を救い・殖民を奬め・学藝を興し・太陽暦を採用し、治績大に挙ったが、遂に此年三月その威望を忌み、その野心を疑えるカシウス，ブルツス等彼を共和政治の敵をりとして遂に元老院に刺殺した。

● 智恵のケーザル　血に亡び……前44

前43年　第二回 三頭政治成る

ケーザルの死後その友アントニウス勢を得、此年ケーザルの養嗣子オクタビヤヌス及び将軍レピツスと共に第二回三頭政治を組織した。

● 地図を見て居る　三統領……前43

(附記)

1. アントニウスの末路

三頭領は翌年マケドニヤのフイリッピの戦に大に反対党を破り天下を三分して、アントニウスは希臘以東，オクタビヤヌスは伊太利以西、レピツスはアフリカ地方を治めたが、やがてレピツスはオクタビヤヌスと争ってその領地を彼に奪われた。

アントニウスはパルチヤを征して破れ，埃及に出り、その女王クレオパトラに迷い、私曲を行い、且つその妻即ちオクタビヤヌスの姉を離婚したので、オクタビヤヌス怒り、前31年アクチウムの海戦に大にアントニウスを破り、翌翌年エジプトを平定しローマに凱旋した。

2. クレオパトラの死（前69－30）

クレオパトラはエジプトの女王で，絶世の美人として知られて居る、ローマの英雄ケーザルを惑わせ伴われてローマに行き、ケーザル死後アントニウスを迷わせた。

アントニウスが敗れて自殺した時、ローマの虜となるを恥じ、自ら毒蛇に咬まれて死んだ。

かくてエジプトはプトレメイウス朝亡びローマの一県となった。

〔年記〕

前31 ⑨ アクチウムの海戦（オクタビヤヌス埃及軍を破る）
前30　アントニウス自殺

前30年　クレオパトラ自殺（エジプト王国亡ぶ）

● 死王の肌に　毒の蛇……前30

前27年　オクタビヤヌス，アウグスツスの尊号を受く（ローマ帝政の始）

オクタビヤヌスは天下を一統してローマに帰り、此年アウグスツス（尊厳者）の尊号を受けた。

此後彼は顕要の官職を兼ねて政権を独占し、元老院及び民会は形式に止まり、名は共和政なれど実は帝政とな